

広島市佐伯区五日市町所在

下沖2号遺跡 発掘調査報告

1994・3

は し が き

広島市の北西部に位置する佐伯区の石内地区は、古代山陽道が通っていたとされ、古くから交通の要衝でした。このためか、広島市域でも埋蔵文化財が比較的集中している地域のひとつです。

ところでこの石内地区は、第12回広島アジア競技大会のメイン会場となる広島広域公園が所在する隣接の安佐南区沼田地区とともに対象地域とされている、「住む」・「働く」・「学ぶ」・「憩う」といった複合機能を備えた人口10万人規模の西部丘陵都市「西風新都」の建設や宅地造成・道路整備工事などの開発がさかんに進められている地域であるため、近年さかんに発掘調査が実施されております。

このたび報告いたします下沖2号遺跡も、道路建設工事に伴って発掘調査を実施しました。調査の結果、古代および中世の掘立柱建物跡や土坑などの遺構や市域では出土例の少ない古代瓦や緑釉陶器をはじめとして大量の遺物が出土し、古代の人々の様子を知る上で大切な資料を得ることができました。

調査の進行上、ご指導いただきました諸先生方ならびに精力的に発掘作業に従事していただいた方々に厚くお礼申し上げますとともに、この調査報告書が、地域の歴史学習の一助となり、また郷土に対する理解と愛着を深めていただくことに役立てばと願っている次第です。

平成6年3月

財団法人広島市歴史科学教育事業団

目 次

I はじめに	1
II 位置と環境	3
III 遺構と遺物	8
IV まとめ	6 8

表 目 次

包含層出土遺物観察表 土師器類	5 0
包含層出土遺物観察表 須恵器類	5 5
包含層出土遺物観察表 緑釉陶器	6 0
包含層出土遺物観察表 黒色土器	6 1
包含層出土遺物観察表 瓦器	6 1
包含層出土遺物観察表 磁器類	6 2
包含層出土遺物観察表 瓦類	6 4
包含層出土遺物観察表 鉄製品	6 4
包含層出土遺物観察表 土製品	6 5
自然流路出土遺物観察表 弥生土器	6 6

挿 図 目 次

第 1 図 周辺主要遺跡分布図	4	第 19 図 「北調査区」ピット群実測図	2 8
第 2 図 遺跡周辺の地形図	7	第 20 図 自然流路実測図	2 9
第 3 図 遺構配置図（1）	9	第 21 図 遺構内出土遺物実測図（1）	3 5
第 4 図 遺構配置図（2）	1 1	第 22 図 遺構内出土遺物実測図（2）	3 6
第 5 図 第 1 号掘立柱建物跡実測図	1 3	第 23 図 包含層出土遺物実測図（1）	3 7
第 6 図 第 2 号掘立柱建物跡実測図	1 4	第 24 図 包含層出土遺物実測図（2）	3 8
第 7 図 第 3 号掘立柱建物跡実測図	1 5	第 25 図 包含層出土遺物実測図（3）	3 9
第 8 図 第 4 号掘立柱建物跡実測図	1 6	第 26 図 包含層出土遺物実測図（4）	4 0
第 9 図 第 5 号掘立柱建物跡実測図	1 7	第 27 図 包含層出土遺物実測図（5）	4 1
第 10 図 第 6 ～ 8 号掘立柱建物跡実測図 ...	1 8	第 28 図 包含層出土遺物実測図（6）	4 2
第 11 図 第 1 ・ 2 号土坑実測図	1 9	第 29 図 包含層出土遺物実測図（7）	4 3
第 12 図 第 3 ・ 4 号土坑実測図	2 0	第 30 図 包含層出土遺物実測図（8）	4 4
第 13 図 第 5 － 7 号土坑実測図	2 1	第 31 図 包含層出土遺物実測図（9）	4 5
第 14 図 溝状遺構実測図	2 2	第 32 図 包含層出土遺物実測図（10）	4 6
第 15 図 第 9 号掘立柱建物跡実測図	2 5	第 33 図 包含層出土遺物実測図（11）	4 7
第 16 図 第 10 号掘立柱建物跡実測図	2 5	第 34 図 包含層出土遺物実測図（12）	4 8
第 17 図 第 11 号掘立柱建物跡実測図	2 6	第 35 図 自然流路出土遺物実測図	4 9
第 18 図 第 12 号掘立柱建物跡実測図	2 7		

例 言

1. 本報告書は、広島布佐伯区五日市町大字石内における一般県道原田五日市線（石内バイパス）道路改良工事に伴い、平成4年度に実施した下沖2号遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、広島市佐伯区役所建設部土木課から委託を受け、財団法人広島市歴史科学教育事業団文化財課が実施した。
3. 本報告書の執筆・編集は高下洋一が行った。
4. 遺構の実測、写真撮影は、高下、脇阪伯史が実施した。また、遺物の実測及び遺構・遺物の製図は高下が行い、出土遺物の写真は高下、荒川正己が撮影した。
5. 本報告書の挿図に使用した遺構表示記号は次のとおりである。
SB：掘立柱建物跡 SK：土坑 SD：溝状遺構
6. 第1図に使用した地図は、建設省国土地理院発行の50,000分の1地形図（広島）を使用した。
7. 本報告書掲載の航空写真は、スタジオ・ユニに委託した。
8. 基準杭設置については、国際航業株式会社に委託した。

図 版 目 次

- とぴら 下沖2号遺跡航空写真
- 。一 a 下沖2号遺跡近景 (北西から)
- 一 b 下沖2号遺跡航空写真(調査前)
- 「一 a 下沖2号遺跡航空写真
(南調査区古代遺構面;調査後)
- 一 b 下沖2号遺跡航空写真
(北調査区古代遺構面:調査後)
- 」一 a 南調査区古代遺構面調査後 (北東から)
- 一 b 北調査区古代遺構面(一部)調査後(東から)
- 、一 a S B 1 完掘状況 (西から)
- 一 b S B 1 完掘状況 (北から)
- 一 c S B 2 完掘状況 (北西から)
- ・一 a S B 2 ・ S B 3 完掘状況 (北西から)
- 一 b S B 3 ・ S B 4 ・ S B 10完掘状況 (北から)
- 一 c S B 3 ・ S B 4 完掘状況 (北から)
- ㉞一 a S B 5 ・ S B 1 1 完掘状況 (東から)
- 一 b S B 7 ・ S B 8 完掘状況 (東から)
- 一 c S B 7 ・ S B 8 完掘状況 (北から)
- ㉟一 a S K 1 完掘状況 (東から)
- 一 b S K 2 完掘状況 (東から)
- 一 c S K 3 完掘状況 (北から)
- イ一 a S K 5 完掘状況 (東から)
- 一 b S K 6 完掘状況 (東から)
- 一 c S K 7 完掘状況 (北から)
- ウ一 a S D 1 完掘状況 (北から)
- 一 b S D 1 完掘状況 (北から)
- エ一 a 南調査区中世遺構面調査後 (北東から)
- 一 b 北調査区包含層遺物出土状況 (東から)
- ォ一 a S B 9 完掘状況 (西から)
- 一 b S B 1 1 完掘状況 (北から)
- 一 c 自然流路完掘状況 (北から)
- ャ一 a 南調査区包含層遺物出土状況(東から)
- 一 b 柱穴〔S B 1 0 / P 3〕遺物出土状況
(北から)
- 一 c S D 1 埋土中遺物出土状況 (北から)
- ユ 出土遺物 (1)
- ヨ 出土遺物 (2)
- ヅ 出土遺物 (3)
- ヅ。 出土遺物 (4)
- ヅ「 出土遺物 (5)
- ヅ」 出土遺物 (6)
- エウ 出土遺物 (7)
- エエ 出土遺物 (8)
- エオ 出土遺物 (9)
- エヤ 出土遺物師 (10)
- エユ 出土遺物 (11)
- エヨ 出土遺物 (12)

はじめに

広島市教育委員会（以下、市教委とする）では、昭和60年3月に五日市町と合併した時点で、一般県道原田五日市線の道路改良工事として、石内及び利松地区に道路を建設する計画があることを知り、その事業地内に多くの遺跡が含まれていることを確認した。

以後、これらの遺跡の取扱いについて、市教委と佐伯区役所建設部土木課（以下、佐伯区土木課とする）との間で、協議を重ねたが、用地買収も大部分終了しており、また地形的にも計画変更が困難であり、現状保存は困難であるとの結論に達し、記録保存の措置を講ずることとなった。すでに、この工事に伴って昭和60年10月～昭和62年5月まで下沖3号遺跡、下沖5号遺跡及び和田遺跡の調査が、平成3年5月から平成4年3月までには有井城跡の調査が、前三者は市教委、後者は財団法人広島市歴史科学教育事業団（以下、事業団とする）によってそれぞれ実施されている。

下沖2号遺跡については、平成4年6月4日に佐伯区土木課から事業団に調査の依頼があつ、平成4年8月3日から翌平成5年3月23日まで調査を実施した。また、調査後の平成5年6月30日から平成6年3月31日まで整理作業を実施し、本報告書を作成した。

調査実施に係る関係者は下記のとおりである。

調査委託者 広島市佐伯区役所建設部土木課

調査受託者 財団法人広島市歴史科学教育事業団

調査担当課 財団法人広島市歴史科学教育事業団文化財課

調査関係者 松原明二 常務理事・事務局長

半田 亨 文化財課長（現広島市郷土資料館館長）

山出健志 文化財課長（平成5年4月1日～）

幸田 津 文化財課事業係長

調査担当者 高下洋一 文化財課事業係学芸員

脇阪伯史 文化財課事業係学芸員（現広島市江波山気象館学芸員）

調査補助員（50音順）

植木恭子、植木真澄、岡原ちか子、尾崎千鳥、市田美也子、鴉田愛子、木村哲也、木村八重子、小嶋千恵、追尚、清水正行、杉浦美代子、杉浦麗、高本すがこ、田口剛、宅見陽子、竹中則夫、田中大輔、田中義照、谷口敏枝、筒尾俊宏、長尾明子、中村正次朗、西岡邦成（故人）、西本秋穂、野崎見、浜中美枝子、原田千代子、原田靖久、広沢英雄、福崎聴子、藤本朋子、舩田愛子、溝手勇、宮田政子、八木康子、山本孝、渡辺サツエ

整理作業員（50音順）

河合津子、佐伯ひとみ、管原彰子、住川香代子、瀬川綾子、竹内直子、橋本礼子、山本都

また、広島市佐伯区役所建設部土木課、広島市教育委員会の方々をはじめ、田中孝雄氏、スタジオ・ユニ井千三男氏のはか多くの方々から、調査を円滑に進めるために多大なご配慮、ご援助をいただいた。さらに、報告書作成にあたっては、広島大学文学部考古学研究室、財団法人広島県埋蔵文化財調査センター、財団法人東広島市教育文化振興事業団、財団法人倉敷考古館間壁忠彦館長などから、広範なご教示を得た。ここに記して謝意を表したい。

なお、すでに調査概要の一部については、平成5年10月30日広島大学において開催された史学会にて「下沖2号遺跡の発掘調査」と題して発表を行っている。

II 位置と環境

下沖2号遺跡は、広島市佐伯区五日市町大字右内小字有井に所在する。

佐伯区は、広島市の北西部に位置し、南は瀬戸内海国立公園に面し、背後を小高い山々に囲まれた、豊かな自然環境に恵まれ、快適な居住空間地域にあることから、昭和60（1985）年3月に広島市に合併する以前から、広島市のベッドタウン化が進み、それに伴い住宅団地や道路の建設などの開発も進んできた。今回発掘調査を実施した石内地区も、広島市が建設を進める人口約10万人規模の広島西部丘陵都市「西風新都」の開発整備範囲地域に入っており、開発工事が盛んに推進されているところである。

ところで同地区は、梶毛川、笹利川などの多くの小河川を合流させた、向山（標高約666m）を源とする石内川によって最大幅400m前後の沖積低地が形成され、そこに現在生活地が形成されている。そして現在の国道2号線バイパス付近で、本流である八幡川と合流して広島湾に流れ込んでいる。この石内川流域は、両側に崖や急傾斜地をつくり、箱型の谷地形となっている。さらに山塊から派生する幾つもの尾根が東西方向にのび、またその間には扇状地状の沖積地形がひろがる。この右内川流域の山塊から派生する尾根上や沖積地形上には遺跡が数多く形成されており、この谷地が狭隘ながらも、比較的肥沃な沖積低地を形成していたことを示している。

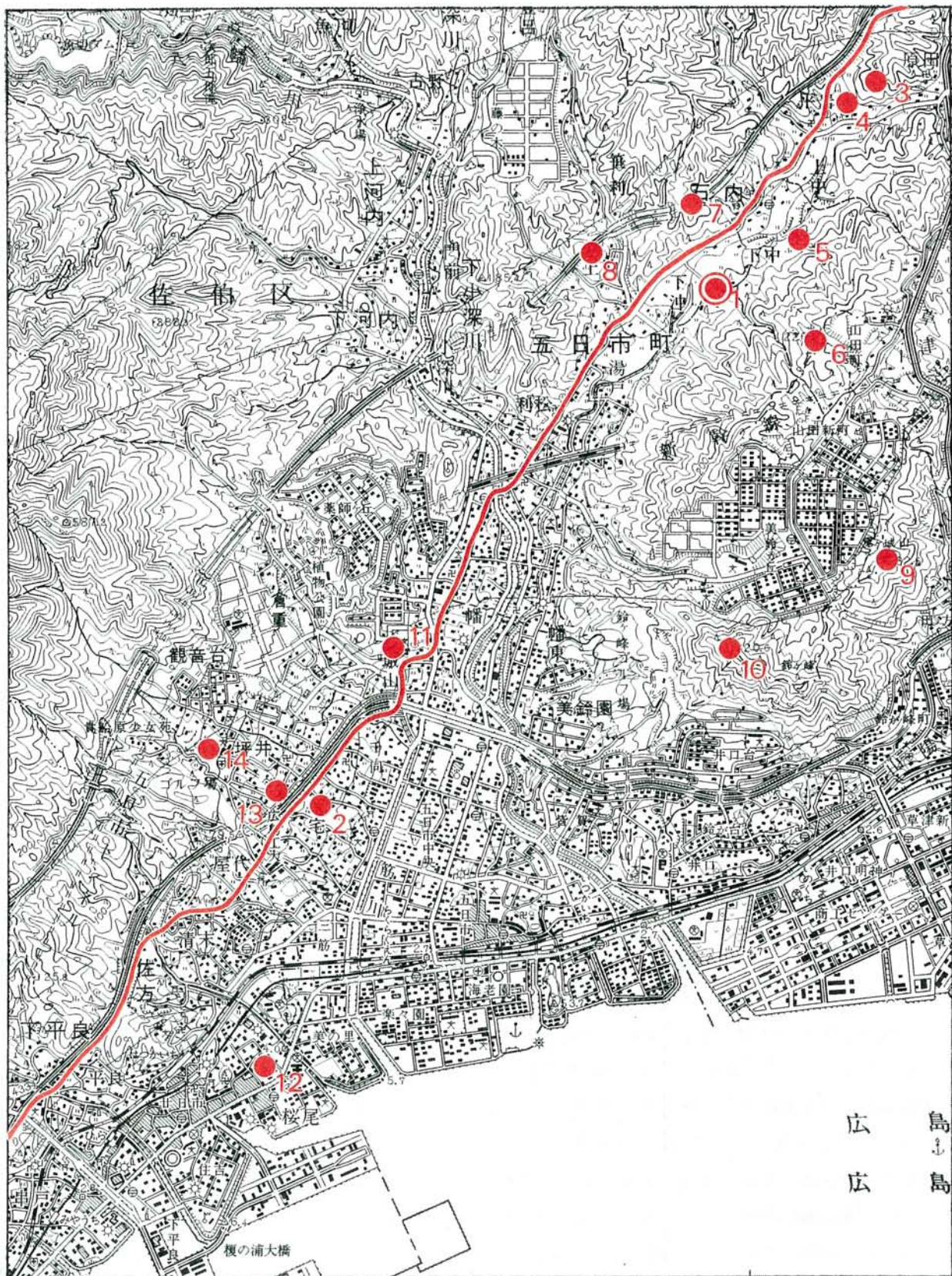
さて右内地区においては、下沖5号遺跡でナイフ形石器が出土していることから¹⁾、旧石器時代に人が住んでいたと推定されるが²⁾、現在から約8,000年前の縄文時代早期の押型文土器を出土する遺跡が、下沖2号遺跡を含め、石内川流域の尾根上に幾例があることから³⁾、この頃には人が定住し始めたと推定される。しかしながら約6,000年頃前までは海水面が高く、海岸線は現在の二河川合流点付近まで入り込んでいたといわれている⁴⁾。そのごの海退現象の結果、沖積作用を生じ、弥生時代の開始期前後頃には、既に肥沃な沖積低地が形成されていたものと考えられる。そして現在よく知られているように弥生時代後期になると石内地区周辺の尾根上には集落跡が多く形成されるようになる⁵⁾。古墳時代になり丘陵上に古墳の造営が開始されると、和田1号遺跡の調査例⁶⁾のように集落は低地に下りるようであるが、現段階での発見例は多くない。

奈良時代頃には、律令国家体制にのっとって、安芸国の中の「佐伯郡」の一部となる。この佐伯郡は12郷を擁する国内唯一の上郡であった。現在の石内川に沿った右内から利松にかけては、官道七道のうちでも唯一の大路と呼ばれる、中央と九州の太宰府を結ぶ古代山陽道が通っていたとされる⁷⁾。この古代山陽道は『今集解既牧今』⁸⁾によると、通常三十里（古代山陽道の場合約10km）ごとに駅家が設置され、『延喜式』⁹⁾によれば、安芸国内には眞良・梨葉・都宇・鹿附・木綿・大山・荒山・安芸・伴部・大町・種篭・濃畠・遠管の13駅があったとされる。このうち安芸駅は安芸郡府中町に、伴部駅は安佐南区伴付附近に、大町駅は原田付近に、そして種篭駅は廿日市市平良とそれぞれ想定する意見もあるが¹⁰⁾、遺跡との対比がなされているのは安芸駅だけである¹¹⁾。また大町駅は、三宅地区で調査された中垣内遺跡を充てる考え方もある¹²⁾。また当地の前面には内海交通の重要な港であった厳島や草津を臨んでおり、古代以降陸海の交通の要衝となった。鎌倉期以降になると当地は厳島神社の神領となったが、立地的好条件から戦国期には中国地方に所在する豪族諸氏の領地拡張をめぐって戦場の地となり、文献上にもしばしば登場する。そのため右内地区周辺の尾根上には、幾つもの山城が形成され、当時の緊張の度合いを示している。

さて、このたび発掘調査を実施した下沖2号遺跡からは、縄文時代早期から中世鎌倉・室町時代頃にかけての遺物を確認しているが、その中心は奈良時代から平安時代と鎌倉・室町時代頃の遺物である。

五日市町内で、奈良時代から平安時代の遺物を出土する遺跡は多くはなく、管見する限りでは、現在2～3事例があるだけである。

中垣内遺跡は、大字三宅に所在し、標高約692mの極楽寺山東南麓の低丘陵に位置しているが、古く



第1図 周辺主要遺跡分布図 (広島, 1 : 50,000)

1. 下沖2号遺跡 2. 中垣内遺跡 3. 今市城跡 4. 串山城跡 5. 有井城跡
 6. 狐ヶ城跡 7. 水晶城跡 8. 長尾城跡 9. 鬼ヶ城跡 10. 鈴ヶ峰城跡
 11. 池田城跡 12. 桜尾城跡 13. 円明寺遺跡 14. 長野遺跡 ※太線は山陽道推定線

から古瓦が発見されていたことから寺院跡と推定されていた。昭和59（1984）年度旧五日市町教育委員会による13）、また昭和61（1986）年度広島市教育委員会による14）、2次にわたる発掘調査の結果、掘立柱建物跡や溝などの遺構とともに、安芸国分寺跡や安芸駅跡と推定されている安芸郡府中町下岡田遺跡と酷似した軒丸瓦と軒平瓦が出土している。そのことから、なんらかの官衙跡と推定され、一部では大町駅の可能性が高いと考えられている。ところが、次の種篋駅を現在の廿日市市平良と比定した場合、この種篋駅との距離が短くなることが指摘されている15）。

平成2（1990）年度財団法人広島市歴史科学教育事業団（以下、事業団とする）によって調査された稗畑遺跡からは、須恵器杯や底部に糸切り痕の残る土師器皿が柱穴内などから出土している16）。

なお利松付近には、「郡、古保理」の地名が残っていることから、佐伯郡街の存在が古くから推定され、またこの利松を中心とした地域においては、条里の存在が推定されている17）。

さて、鎌倉時代～室町時代の中世の遺跡には、城跡・寺院跡・古墓などがある。このうち城跡は20か所あまり知られており、石内川流域では、水晶城跡、長尾城跡、有井城跡、今市城跡、串山城跡などが知られ、それぞれ近年発掘調査がなされている。水晶城跡は、財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下、県埋文センターとする）によって昭和57（1982）年度一58（1983）年度に山陽自動車道建設工事に伴って調査され、段や通路状遺構、柵状遺構が見つかった18）。長尾城跡は、水晶城跡と同様県埋文センターによって昭和56（1981）年度に山陽自動車道建設工事に伴って調査された19）。明確な城郭としての造作は確認できなかったものの、中世陶器片や土師質土器の出土があり、自然地形を巧みに利用した山城とされている。有井城跡は、平成3（1991）年度事業団によって、県道のバイパス建設に伴って調査され、五つの郭と、城を取つ巻くように掘られた堀がめぐり、2郭とした平坦面には館跡と井戸跡が検出されるなど、館的な性格をもった城跡であることが確認された20）。さらに通路状遺構が2郭と3郭の間に縦堀状に掘られ、その通路に沿って石垣が構築されているなど、特徴を具えている。今市城跡は、平成4（1992）年度に事業団によって流通団地建設に伴って調査され、四つの郭からなる山城であることが確認された21）。また土留用の礫群、通路状遺構及び階段状遺構が確認された。また今市城跡に隣接する串山城跡についても、同開発に伴い、平成5（1993）年度事業団によって調査を実施している22）。

また、五日市町内でのその外の中世遺跡の調査例には、鎌倉時代の瓦が出土した円明寺遺跡23）、毛利氏の家臣坂新五左衛門の屋敷跡とも推定されている長野遺跡24）などが知られている。

以上のように、本遺跡が位置する石内地区は、古代から中世にかけて、古代山陽道の存在やその地理的環境から、陸海交通の要衝であった。本遺跡はこの古代山陽道推定ラインから約300m、また佐伯郡衙推定地と考えられている利松地区からも約1.5kmといった近距離の位置にある。そのため、古代から中世にかけて、特に古代の遺物が多く出土しており、市域でもあまり調査事例のなかった古代の様相を窺える貴重な資料が得られた。さらに歴史的・地理的環境からいえば、この周辺の同様な地形上には、同時期の遺跡が散在する可能性がある。

注

1. 高田正剛・若島一則1988「下沖5号遺跡」「広島市佐伯区五日市町所在一般県道原田五日市線（石内バイパス）道路改良工事事業地内遺跡群発掘調査報告」（広島市の文化財第41集）広島市教育委員会
2. 高井遺跡や倉重2号遺跡からも、それぞれ有舌尖頭器、舟底形尖頭器が出土している。
今田三哲 1974「五日市のあけぼの」「広島県五日市町誌」上巻五日市町誌編集委員会
藤田広幸 1987「倉重2号遺跡」「月見城跡」（広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第54集）

財団法人広島県埋蔵文化財調査センター

3. 川越哲志 1968「広島県佐伯郡五日市町利松住吉遺跡の調査」『広島大学文学部紀要』第28巻第1号
篠原芳秀 1973「利松遺跡」『山陽新幹線建設地内遺跡発掘調査報告』広島県教育委員会などの調査例がある。
4. 武永健一郎・辰野誠次ほか 1974「五日市の自然と環境」『広島県五日市町誌』上巻五日市町誌編集委員会
5. 石内地区でいえば、下沖3号遺跡、下沖5号遺跡、水晶城遺跡、浄安寺遺跡などの調査事例がある。
 - a；岡野幸夫・岡野孝子1988「下沖3号遺跡」『注1前掲文献』
 - b；注1に同じ
 - c；松村昌彦・辻満久ほか 1986「水晶城遺跡」『山陽自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』Ⅲ（広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第47集）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター
 - d；梅本健治 1986「浄安寺遺跡」『同上文献』
6. 高田正剛・若島一則 1988「和田1号遺跡」『注1前掲文献』
7. 福尾猛市郎 1980「V（律令政治の展開）一五山陽道と瀬戸内海」『広島県史』原始・古代広島県
8. 「新訂増補国史大系」今集解後編 1955
9. 「新訂増補国史大系」延喜式後編 1974
10. 注7に同じ
11. 河瀬正利 1993「広島県下岡田遺跡の古代建物群をめぐって」『考古論集』潮見浩先生退官記念事業会
12. 小都隆ほか 1985「中垣内遺跡試掘調査概要」五日市町教育委員会
13. 注12に同じ
14. 阿部滋・幸圀淳ほか 1987「広島市佐伯区五日市町所在中垣内遺跡第2次発掘調査概報」（広島市の文化財第38集）広島市教育委員会
15. 佐竹 昭 1989「概説編広島のあゆみ原始・古代四」『図説広島市史』広島市
16. 福原茂樹 1992「広島市佐伯区五日市町所在稗畑遺跡調査報告」（財団法人広島市歴史科学教育事業団調査報告書第4集）財団法人広島市歴史科学教育事業団
17. 米倉二郎 1980「V（律令政治の展開）一四 条里制の分布」『広島県史』原始・古代広島県
18. 注5cに同じ
19. 青山透・向田裕始 1986「長尾城遺跡」『注5c前掲文献』
20. 稲葉瑞穂・脇阪伯史 1993「広島市佐伯区五日市町所在有井城跡調査報告」（財団法人広島市歴史科学教育事業団調査報告書第8集）財団法人広島市歴史科学教育事業団
21. 宮田浩二 1993「広島市佐伯区五日市町所在今市城跡発掘調査報告」（財団法人広島市歴史科学教育事業団調査報告書第10集）財団法人広島市歴史科学教育事業団
22. 平成6（1994）年度まで調査を実施予定である。
23. 河瀬正利・伊吹尚ほか 1971「円明寺（延命寺）遺跡発掘調査報告」広島県教育委員会
24. 奥田泰将・是光吉基ほか 1985「長野遺跡一発掘調査概報一」五日市町教育委員会



第2図 遺跡周辺の地形図 (S=1,500)

III 遺構と遺物

1. 調査の概要

下沖2号遺跡は、標高約22.6mの山塊から派生する尾根と尾根との間に形成された、扇状地状の沖積地上に立地する。標高は約30mで、遺跡の眼下を流れる石内川に沿う沖積底地との比高は6～8mである。

調査地の現状は民家と水田であるが、立地的にみて、調査地周辺の沖積地約5～6m四方についても、本遺跡の範囲と考えられる。

調査区全体は、耕作地化されており、旧地形をほとんど残していない。そのため、遺構は床土および整地土の除去後に確認できたが、ほとんどが削平されていた。

発掘調査は、調査範囲の長軸の中心に任意に基準線を設け、10mメッシュで調査区を設定して実施した。なお、道路から北側の調査区（以下、便宜的に「北調査区」とする）については、水田と隣接していることから、水田使用期間中の調査は不可能となった。また調査区のほぼ中央を横断する市道下の調査についても迂回路の設置が必要であった。このことから、まず道路から南側の調査区（以下、便宜的に「南調査区」とする）、次に「北調査区」そして最後に道路下、といった三段階で調査を実施した。「南調査区」では、整地土除去後、現地表下約1mで遺構を確認した。この面はその包含層及び遺構面の遺物から中世の段階と考えられる。さらに0.8～1mの整地土及び包含層を除去後、別の遺構面を確認した。この面は包含層及び遺構面の遺物から古代の段階と考えられる。一方、「北調査区」では、前者の面は存在せず、後者のみの確認となったが、場所によって包含層中に時期の異なる遺物が存在し、かつ、遺構検出にあたっては同一遺構面に時期の異なる遺構が存在した。この面の遺構の時期比定については、柱穴内の遺物及び、それらと関連のある遺構を材料として決定した。

調査の結果、遺構内（柱穴内など）や包含層から出土した土器から奈良時代から平安時代にかけてと、鎌倉時代の後半頃に、断続的に営まれた複合遺跡であると判明した。確認された前者の遺構は、掘立柱建物跡が8棟、土坑35基（うち性格不明の土坑32基）、溝状遺構が1条である。後者の遺構では、掘立柱建物跡が4棟である。その他、ピット群を「北調査区」北西部において検出した。

また、「北調査区」において自然流路を三箇所確認した。そのうち遺存状態の良好であった流路内から弥生土器片が出土している。

出土した遺物には、上記時期の土器類や鉄製品などのほか、縄文時代早期、弥生時代中期初頭から中期後半、弥生時代後期中葉から後半頃の土器があるほか、右鍬、土錘、鉄滓などがある。また青銅武器の切先破片1点が見つまっている。

このことから、この遺跡の周辺には、縄文時代から鎌倉時代まで長期にわたり、断続的ではあるが、遺跡が形成されていたことが窺われる。

2. 遺構の概要

まず、古代、すなわち奈良時代から平安時代の遺構について概述し、そのあと中世、すなわち鎌倉時代後半期の遺構について記述する。

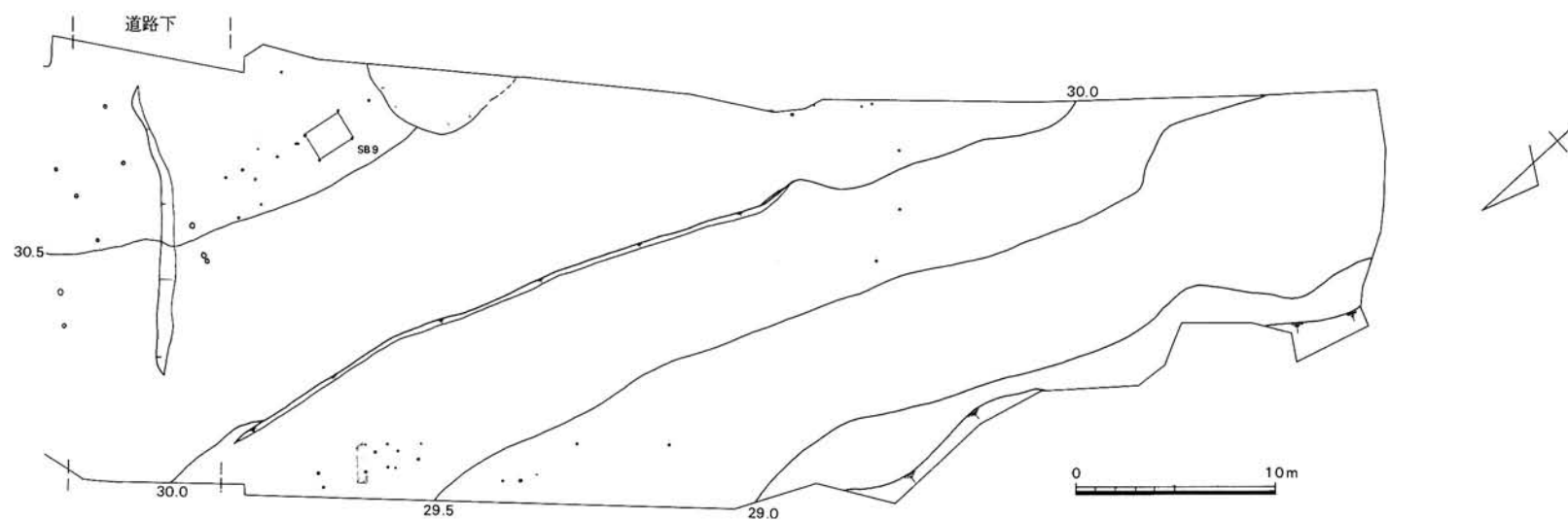
I 古代の遺構

A 掘立柱建物跡（SB）

1 第1号掘立柱建物跡（SB1）[第5図・図版IV-a・b]



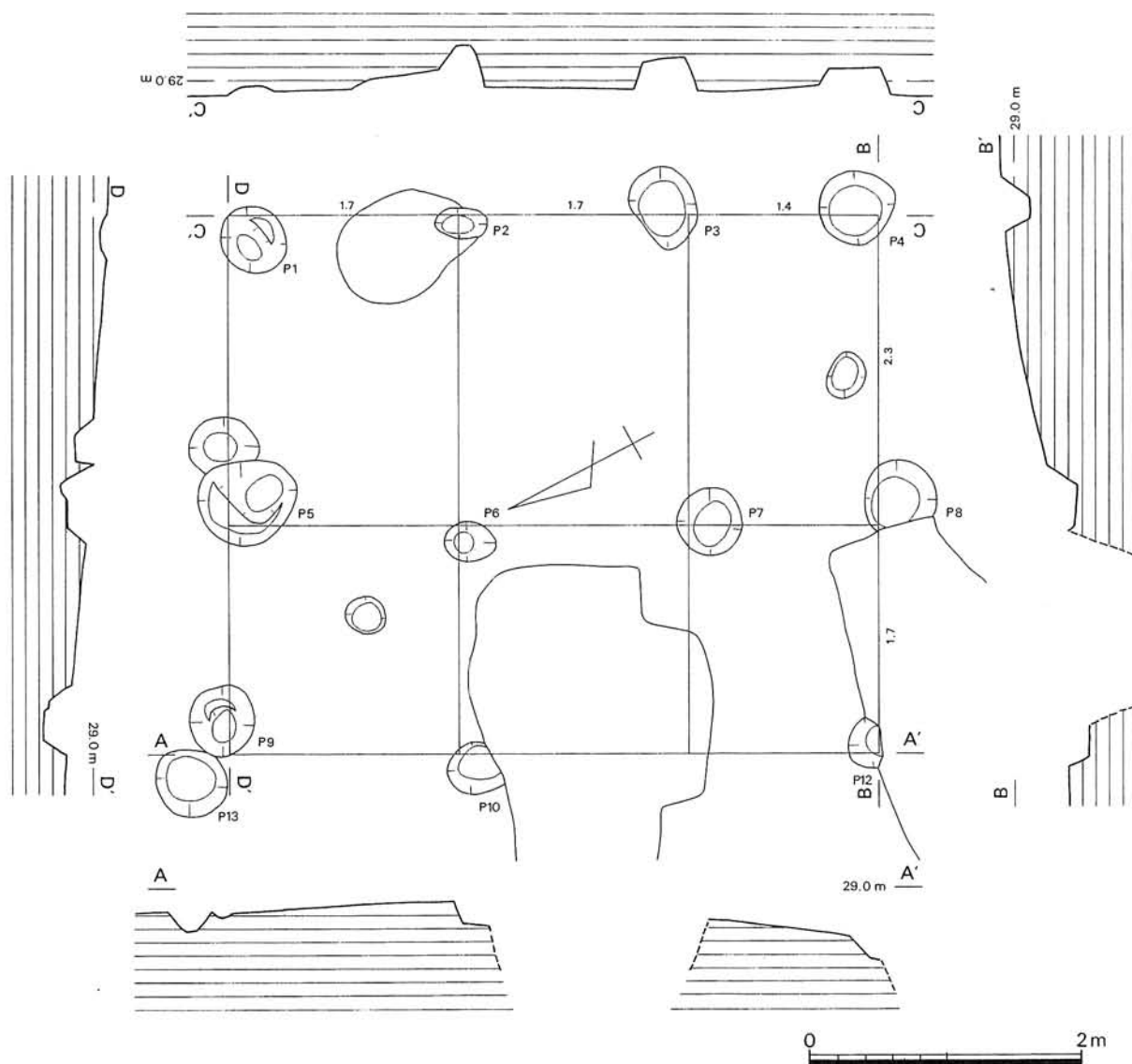
第3図 遺構配置図(1)古代遺構面 (S = 1 : 300) ※赤色は中世以降の遺構



第4図 遺構配置図(2)中世遺構面 (S = 1 : 300)

「南調査区」のほぼ中央付近で確認した。上面の遺存状況はあまり良くなく、また性格不明の土坑2基と切り合い関係にある。検出状況から判断して、土坑の方が新しい。規模は、南北3間(約4.8m)×東西2間(約4m)である。桁行の柱間寸法は、P1-P2間、P2-P3間ともに約1.7m、P3-P4間が約1.4m、梁行の柱間寸法は、P1-P5間が約2.3m、P5-P9間が約1.7mである。桁行の軸方向はN28°Eである。柱穴の規模は、上面での直径は、総じて40~50cmとあまり大きいものではない。現状の深さは20~25cmである。柱の規模は、柱痕跡が確認できなかったので、不明である。

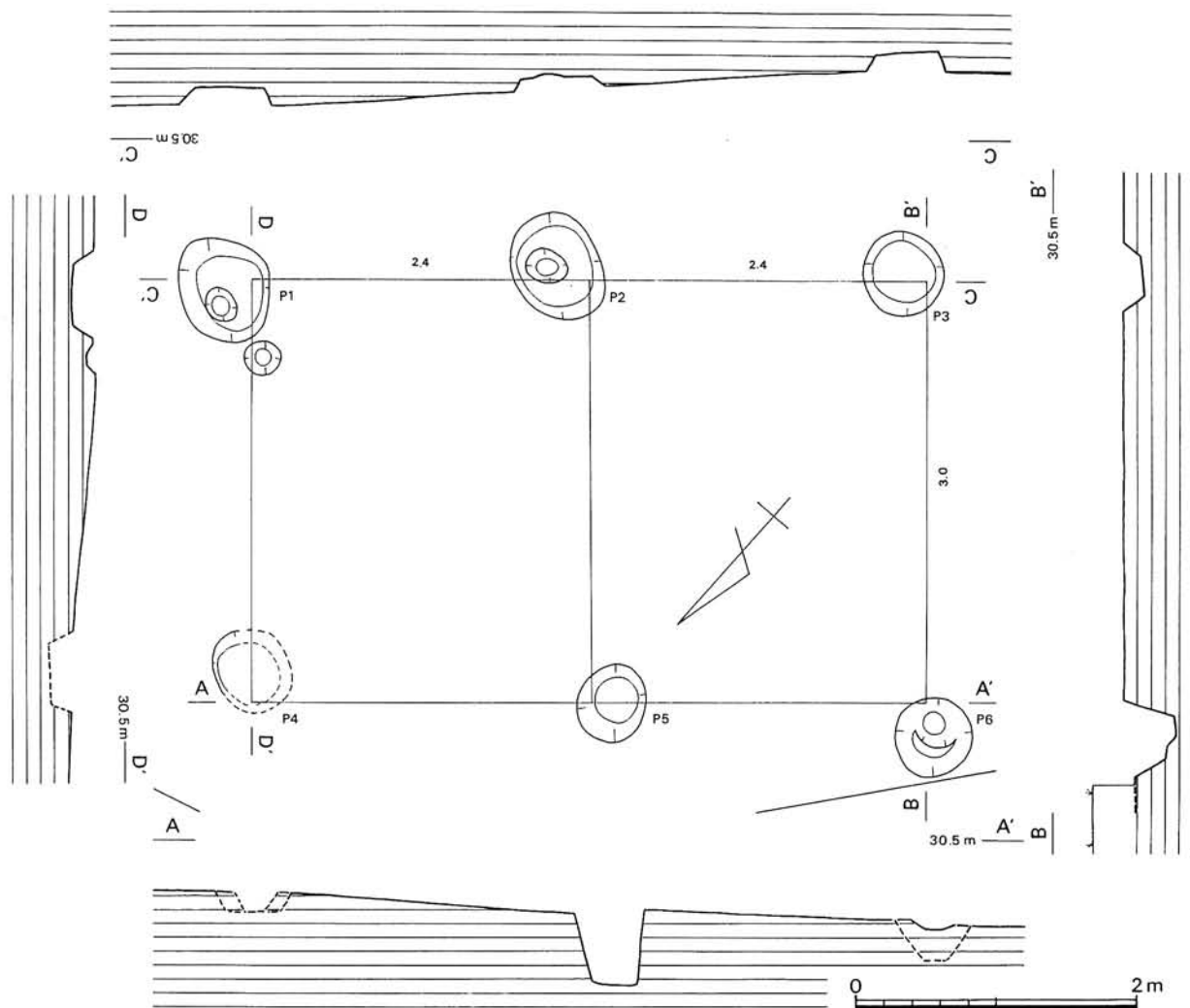
P3とP12から、また周辺のP13からも土器片が出土しているが、小片のため図示はできなかった。



第5図 第1号掘立柱建物跡実測図 (S=1:60)

2 第2号掘立柱建物跡 (SB2) [第6図・図版IV-c/V-a]

「北調査区」の南西側、調査区全体でいえば、ほぼ中央において確認した。上面は削平を受けていることから、遺存状況はあまり良くなかった。規模は、南北2間(約4.8m)×東西1間(約3m)である。桁行の柱間寸法は、P1-P2間、P2-P3間ともに約2.4mである。梁行の柱間寸法は、P1-P4間は約3mで



第6図 第2号掘立柱建物跡実測図 (S = 1 : 60)

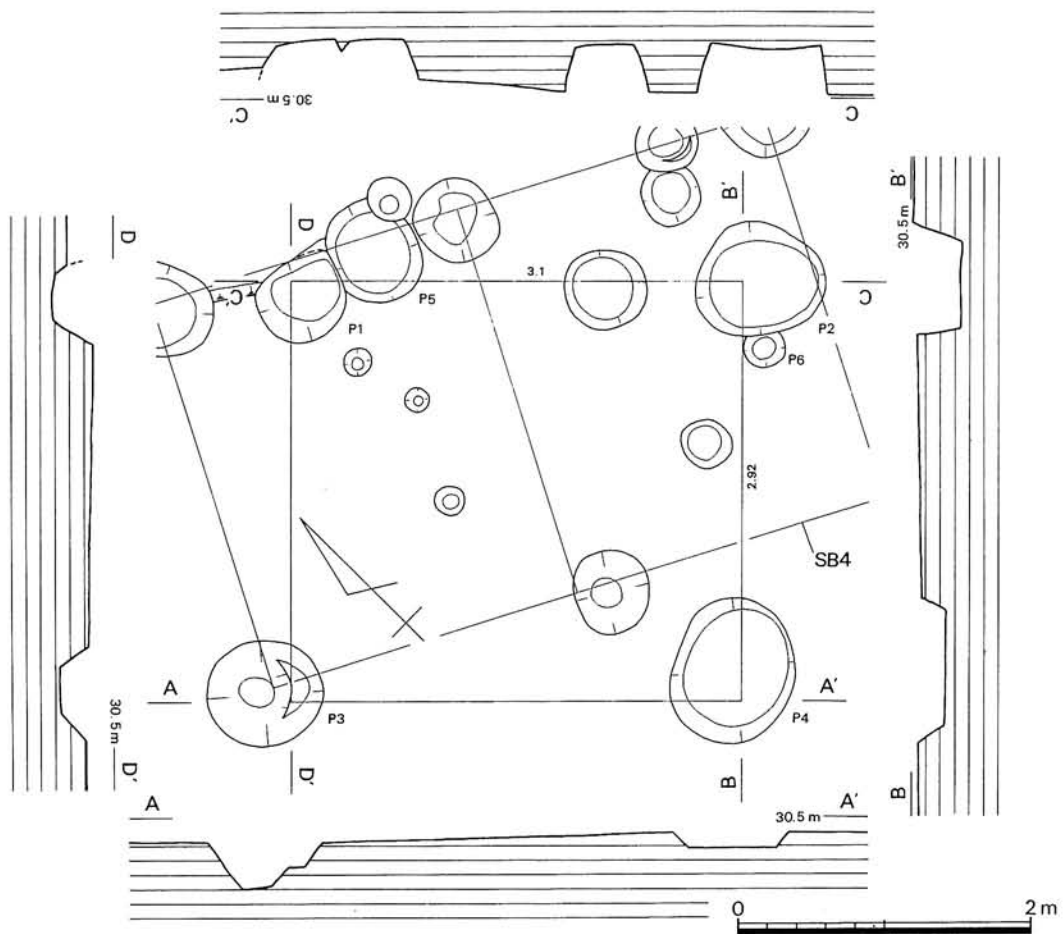
ある。桁行の軸方向は、 $N49^{\circ}E$ である。柱穴の規模は、上面で直径約50～70cmで、深さは現状で15～50cmである。

P1～P3, P5・P6から土器片が出土しているが、細片のため、図化できなかった。またP5からは鉄滓が出土している。

3 第3号掘立柱建物跡 (SB3) [第7図・図版V-a・b・c]

「北調査区」の南西側、調査区全体でいえば、ほぼ中央において検出した。SB2の約2m南東方向に位置する。上面の遺存状況はあまり良くない。規模は、南北1間(約2.92m)×東西1間(約3.1m)である。桁行の軸方向は $N44^{\circ}W$ で、SB2の桁行の軸方向とほぼ直角を示している。柱穴の規模は、上面での直径が60～100cmと多少ばらつきがある。現状の深さは15～30cmである。柱の規模は柱痕跡が確認できていないことから、不明である。軸方向からみて、SB2とは何らかの関連が想定される。

周辺のP6から須恵器の杯身(第21図1)が出土している。またP1～P4, 及び周辺のP5からも土器片が出土しているが、小片のため図化できなかった。またP5から鉄滓が出土している。



第7図 第3号掘立柱建物跡実測図 (S = 1 : 60)

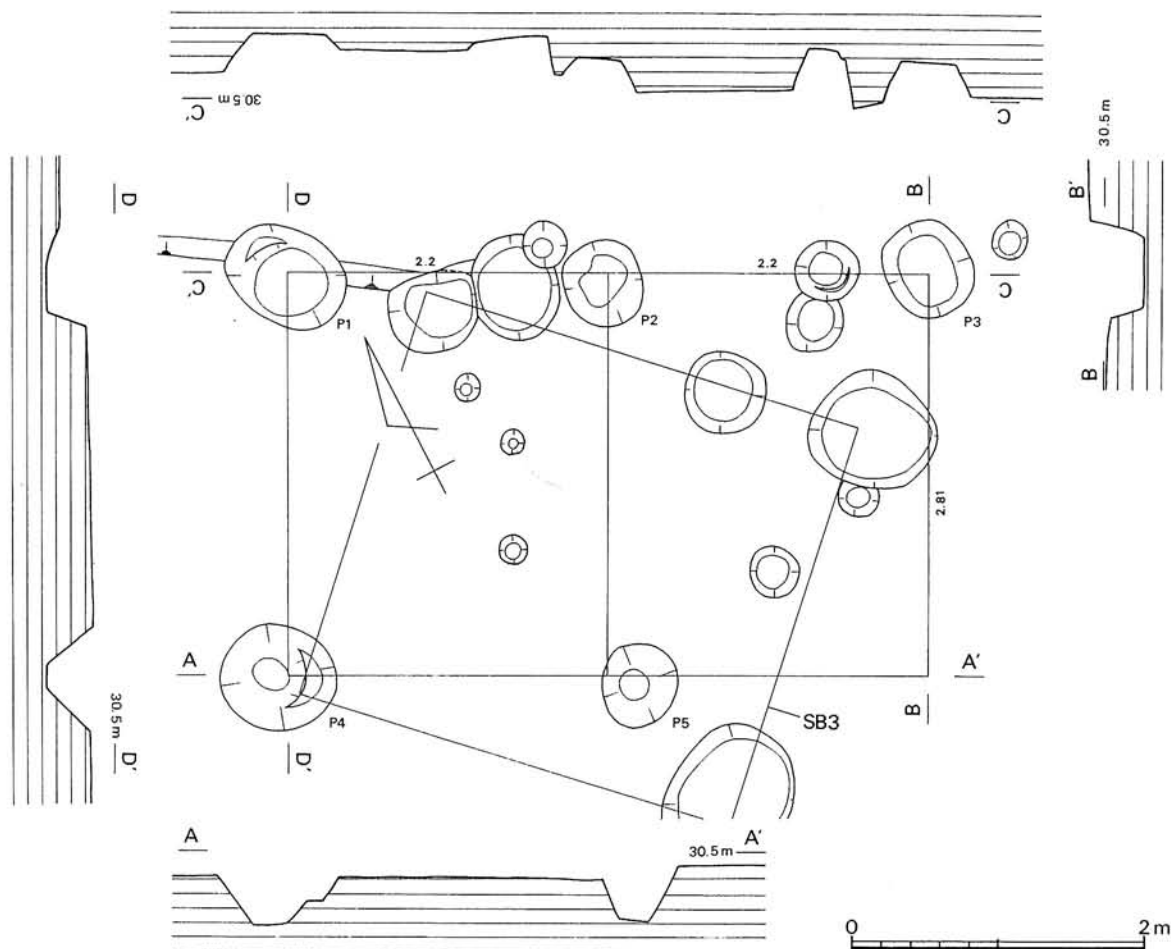
4 第4号掘立柱建物跡 (SB4) [第8図・図版V-b・c]

「北調査区」の南西側，調査区全体でいえば，ほぼ中央において確認した。SB3と位置的に重複し，P4は共有している。この建物跡も上面の遺存状況はあまり良くない。規模は，南北1間(約2.81m)×東西2間(約4.4m)である。桁行の柱間寸法は，P1-P2間，P2-P3間ともに，約2.2mである。梁行の柱間寸法は，P1-P4間は約2.81mである。桁行の軸方向は，N61°Wである。柱穴の規模は，上面での直径が50~80cmである。現状の深さは30~40cmである。柱の規模は柱痕跡が確認できていないことから，不明である。

P1~P5の埋土中から土器片が出土しているが，小片のため図化できなかった。

5 第5号掘立柱建物跡 (SB5) [第9図・図版VI-a]

「北調査区」の南西側，調査区全体でいえば，ほぼ中央において確認した。SB4の約1.3m東に位置する。上面の遺存状況はあまり良くなく，柱穴も2か所が確認できなかった。規模は，南北1間(約2.1m)×東西2間(約4.4m)である。桁行の柱間寸法は，P1-P2間，P2-P3間ともに約2.2mである。梁行の柱間寸法は約2.1mである。桁行の軸方向はN67°Wで，第4号掘立柱建物跡の桁行の軸方向とほぼ平行関係を示している。柱穴の規模は，上面での直径が総じて15~20cmとあまり大きいものではない。現状の深さは約15



第8図 第4号掘立柱建物跡実測図 (S = 1 : 60)

～20cmである。柱の規模は柱痕跡が確認できていないことから、不明である。

P 1 から、また周辺の P 7 ・ P 8 から土器片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

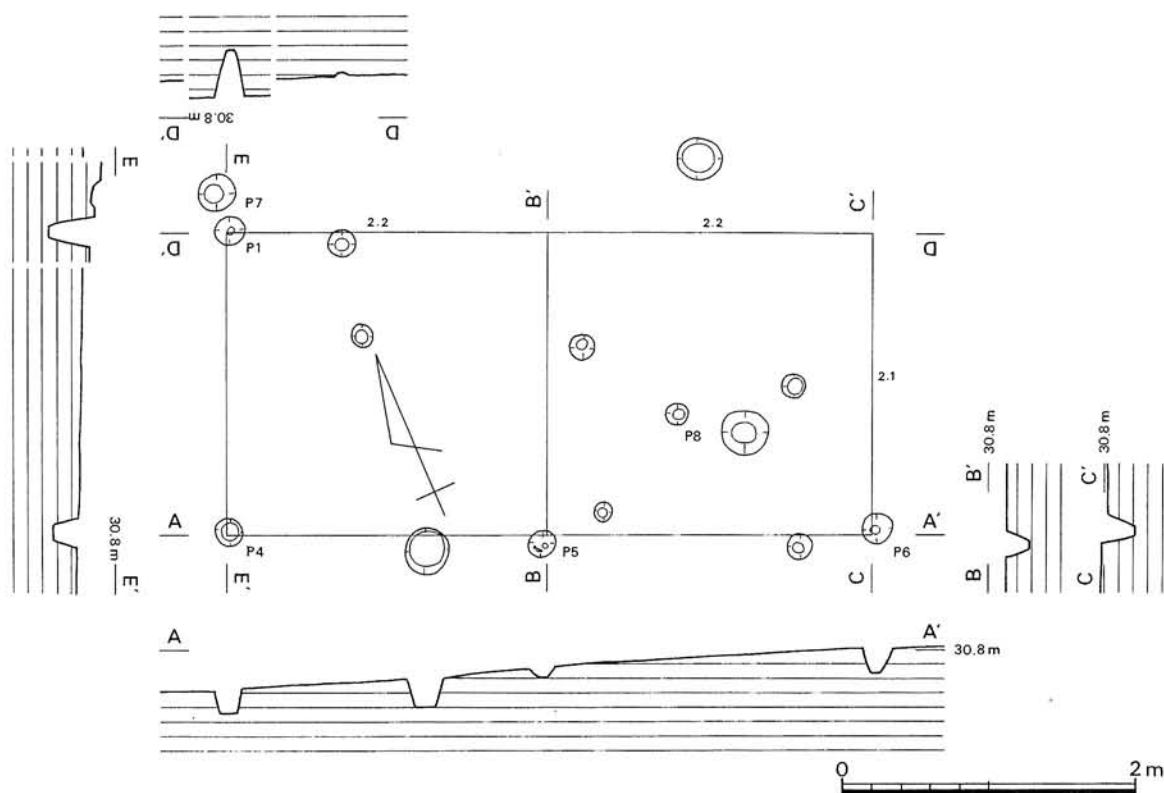
6 第6号掘立柱建物跡 (SB 6) [第10図]

「北調査区」の南西側、調査区全体でいえば、ほぼ中央において確認した。SB 3 及び SB 4 から約1.5m 北東方向に位置する。上面の遺存状況はあまり良くなく、また柱穴は一箇所欠損する。規模は、南北1間(約2.5m)×東西1間(約2.5m)である。桁行(梁行)の軸方向は、N 9°E である。柱穴の規模は、上面での直径が20～30cmとあまり大きいものではない。現状の深さは10～30cmである。柱の規模は柱痕跡が確認できなかったことから、不明である。

P 2 から土器片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

7 第7号掘立柱建物跡 (SB 7) [第10図・図版VI-b・c]

「北調査区」の南西側、調査区全体でいえば、ほぼ中央において確認した。SB 3 及び SB 4 から約2m 北方向に位置する。位置的に、SB 8 と重複関係にある。上面の遺存状況はあまり良くなく、現状の深さを考慮すれば、削平を受けていると考えられる。規模は、南北1間(約3m)×東西1間(約2.4m)である。



第9図 第5号掘立柱建物跡実測図 (S = 1 : 60)

桁行の柱間寸法は、約3m、梁行の柱間寸法は、約2.4mである。桁行の軸方向は、N5°Eである。柱穴の規模は、上面での直径が総じて23~40cmとあまり大きいものではない。現状の深さは13~25cmである。柱の規模は柱痕跡が確認できていないことから、不明である。建物の軸方向からみれば、SB6と平行関係にあり、両建物の関連性が指摘できる。

P1・P2から土器片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

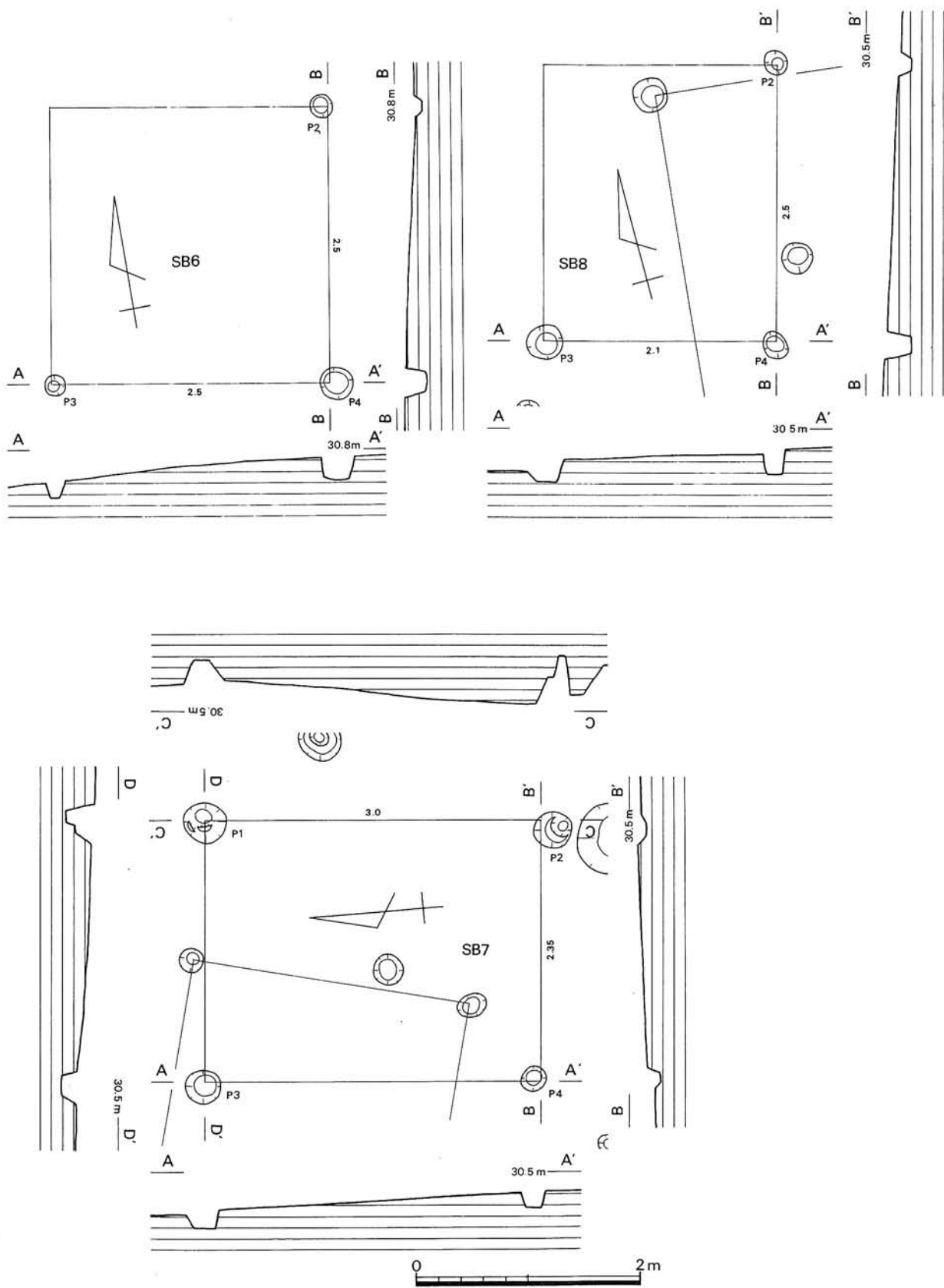
8 第8号掘立柱建物跡 (SB8) [第10図・図版VI-b・c]

「北調査区」の南西側、調査区全体でいえば、ほぼ中央において確認した。SB3及びSB4から約2m北方向に位置し、立地的にSB7と重複している。上面の遺存状況は削平されているため、あまり良好ではなく、また柱穴も北隅部の1箇所欠損していた。規模は、南北1間(約2.5m)×東西1間(約2.1m)である。桁行の柱間寸法は、約2.5m、梁行の柱間寸法は、約2.1mである。桁行の軸方向は、N14°Eである。柱穴の規模は、上面での直径が総じて20~30cmとあまり大きいものではない。現状の深さは15~20cmである。柱の規模は柱痕跡が確認できていないことから、不明である。

P2から土器片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

B 土坑 (SK)

本遺跡の調査区内から、特に「南調査区」を中心に、土坑が35基確認された。そのうち、掘り方は確認できても、床面や側面が不明確になるなどのものが、大半を占めていた。これについては何らかの意図をもって掘られた可能性が考えられるが、ここでは、ある程度推測可能なものや埋土中に遺物が出土したものにつ



第10図 第6・7・8号掘立柱建物跡実測図 (S = 1 : 60)

いてのみ報告する。

1 第1号土坑（SK1）[第11図・図版VII-a]

「南調査区」のやや南西方向で確認した。西半部は調査範囲外にあたり、確認できなかった。平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、現状検出上面で、長さ0.9m以上×幅約1.1m、深さ25～35cmである。床面の規模は、長さ0.7m以上×幅約0.8mである。本土坑の長軸方向は、N105°Eである。土層観察によれば、側板の痕跡が窺え、木棺を埋置していたと考えられる。このことから、本土坑は墳墓と推定される。木棺の規模は、長さは不明であるが、幅は約0.6mと推定される。

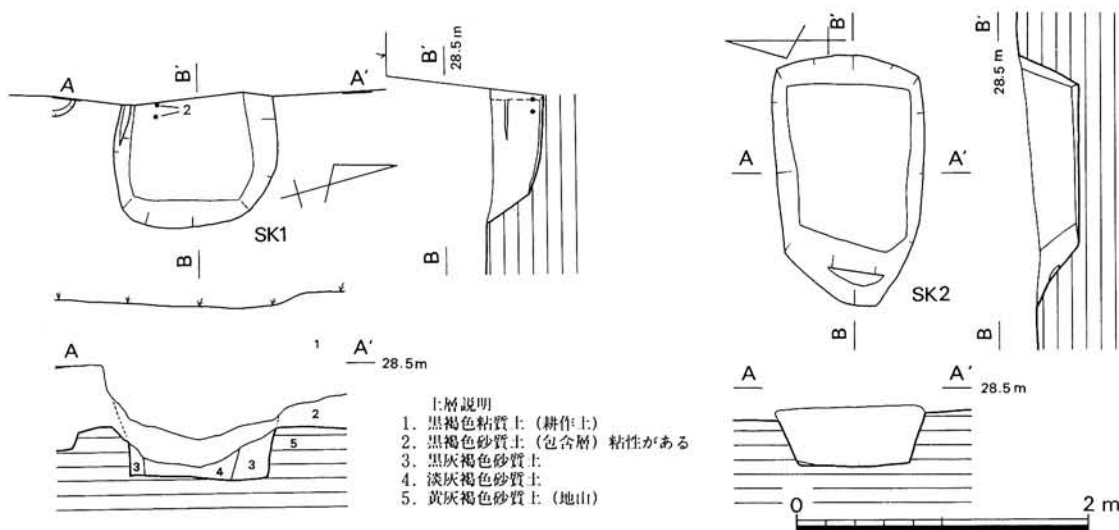
遺物は、土坑内調査区境界付近から須恵器の杯蓋の破片（第21図2）が出土している。

2 第2号土坑（SK2）[第11図・図版VII-b]

「南調査区」のやや南西方向で確認した。SK1の約0.8m東方向に位置する。平面形は、やや変形であるが、隅丸長方形を呈している。

西側小口は、二段掘り込み状を呈する。規模は、現状検出面で、長さ約1.75m×幅約1m、深さ約30cmである。本土坑の長軸方向は、N90°Eである。土層観察では、SK1のように木棺などの埋葬施設の痕跡は確認できなかったが、SK1と形態的に類似すること、また近接して構築されていること、及び長軸方向がほぼ同一方向を指向していることから、同様な性格を推定したい。

遺物は、土坑の内外から、何も検出できなかった。



第11図 第1・2号土坑実測図（S=1:60） ※・は遺物出土位置

3 第3号土坑（SK3）[第12図・図版VII-c]

「北調査区」の南東側において確認した。上面は削平されており、また西小口部については、「北調査区」の中央を流れる水路の構築に伴って、攪乱・欠損している。平面形は、長方形を呈している。規模は、現状上面の長さ約1.15m×幅約0.5m、深さ最大10cmである。床面の規模は、長さ約1.1m×幅0.45mである。

本土坑の長軸方向は、N100°Eである。土層観察では、木棺の痕跡などは確認できなかったが、土坑内か

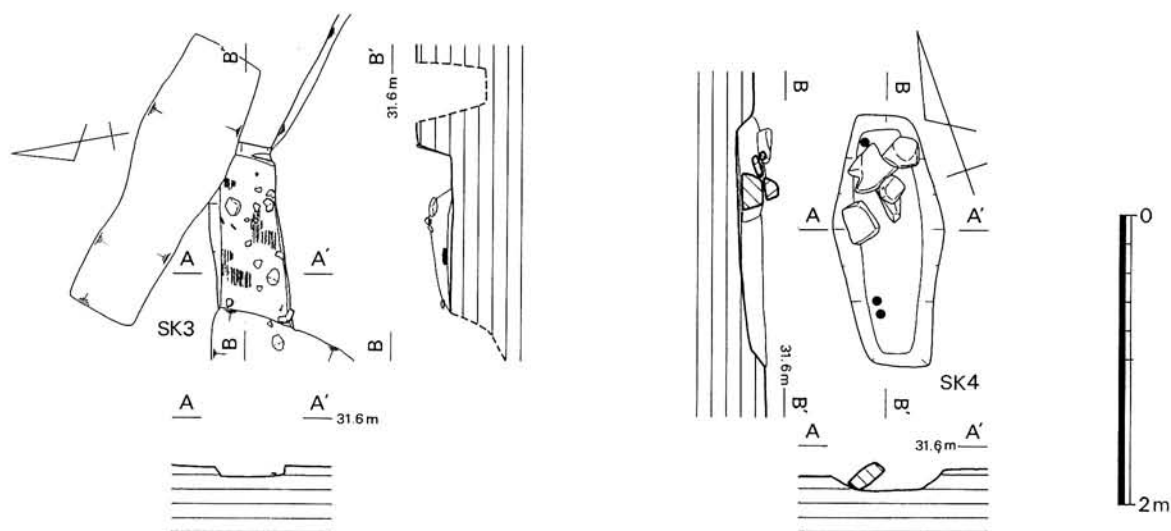
から炭化物が確認された。

遺物は、土坑上方から須恵器の短頸壺の破片（第21図3）が出土している。

4 第4号土坑（SK4）[第12図]

「北調査区」のやや南東方向で確認した。平面形は長方形を呈し、中央部がやや膨らむ。規模は、現状検出上面で、長さ約1.95m×最大幅約0.75m、深さは12～15cmである。床面の規模は、約1.55m×約0.4mである。本土坑の長軸方向は、N19°Eである。なお、土坑内北側には、20～30cm大の礫を5個確認した。これらに混じって、須恵器の甕破片1点と土師器の破片2点が出土している。この土坑の性格は不明であるが、その形態から墓壇の可能性も考えられる。

なお出土遺物は細片のため、図化できなかった。



第12図 第3・4号土坑実測図（S = 1 : 60） ※・は遺物出土位置

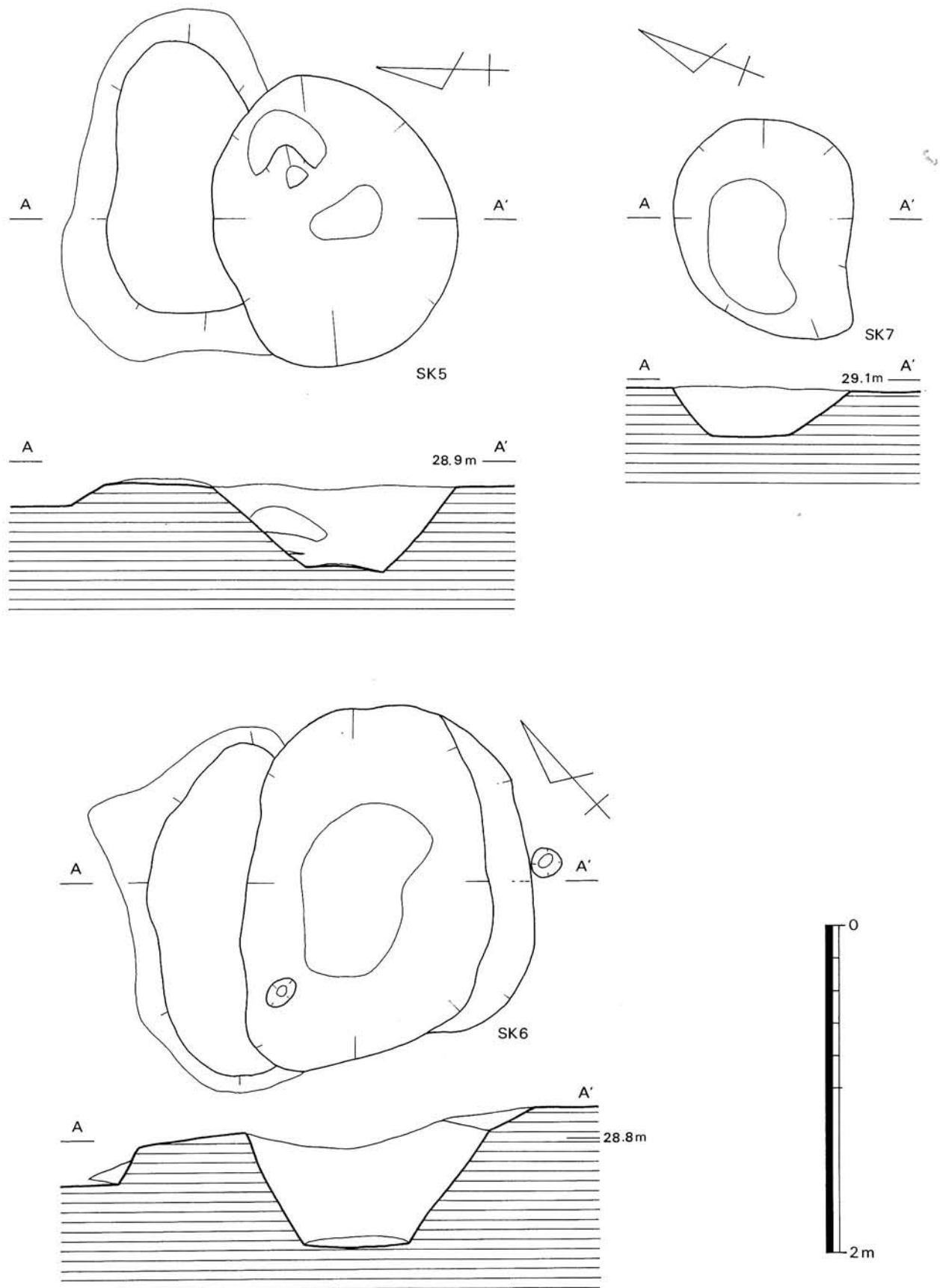
5 第5号土坑（SK5）[第13図・図版Ⅷ-a]

「南調査区」のやや南側で確認した。平面形は、楕円形を呈する。規模は、現状検出面で、直径南北約1.5m、東西約1.7m、深さ約0.5mである。土坑の北側には、堀り方に沿うように約2.1×0.6m、高さ15cmの高まりがみられた。この高まりは、本土坑に伴うことは明白であるが、本土坑とともに、その性格は不明である。土坑内埋土中から、土器片が出土しているが、細片のため図化できなかった。

6 第6号土坑（SK6）[第13図・図版Ⅷ-b]

「南調査区」の中央よりやや南よりで確認した。平面形は、長方形を呈する。規模は、現状検出面で、南北約4.4m、東西約3m、深さ約1.2mである。SK5同様に、土坑の北西側には、堀り方に沿うように約4×1.2m、高さ50cmの高まりがみられた。この高まりは、本土坑に伴うことは明白であるが、本土坑とともに、その性格は不明である。土坑床面近くの西壁から、約40cm×30cmのピットを確認した。土坑内埋土中から、土器片が出土しているが、細片のため図化できなかった。

7 第7号土坑（SK7）[第13図・図版Ⅷ-c]



第13図 第5号～第7号土坑実測図 (S=1:40) ※SK6はS=1:80

「南調査区」の中央部，S B 1 の南東側において，確認した。平面形は，不整の楕円形を呈する。規模は，現状検出面で，直径東西約 1.3 m，南北約 1.1 m，深さ約 0.3 m である。土坑埋土中から，土器片が出土しているが，細片のため図化できなかった。

C 溝状遺構（S D 1）[第 14 図・図版 I X－a・b]

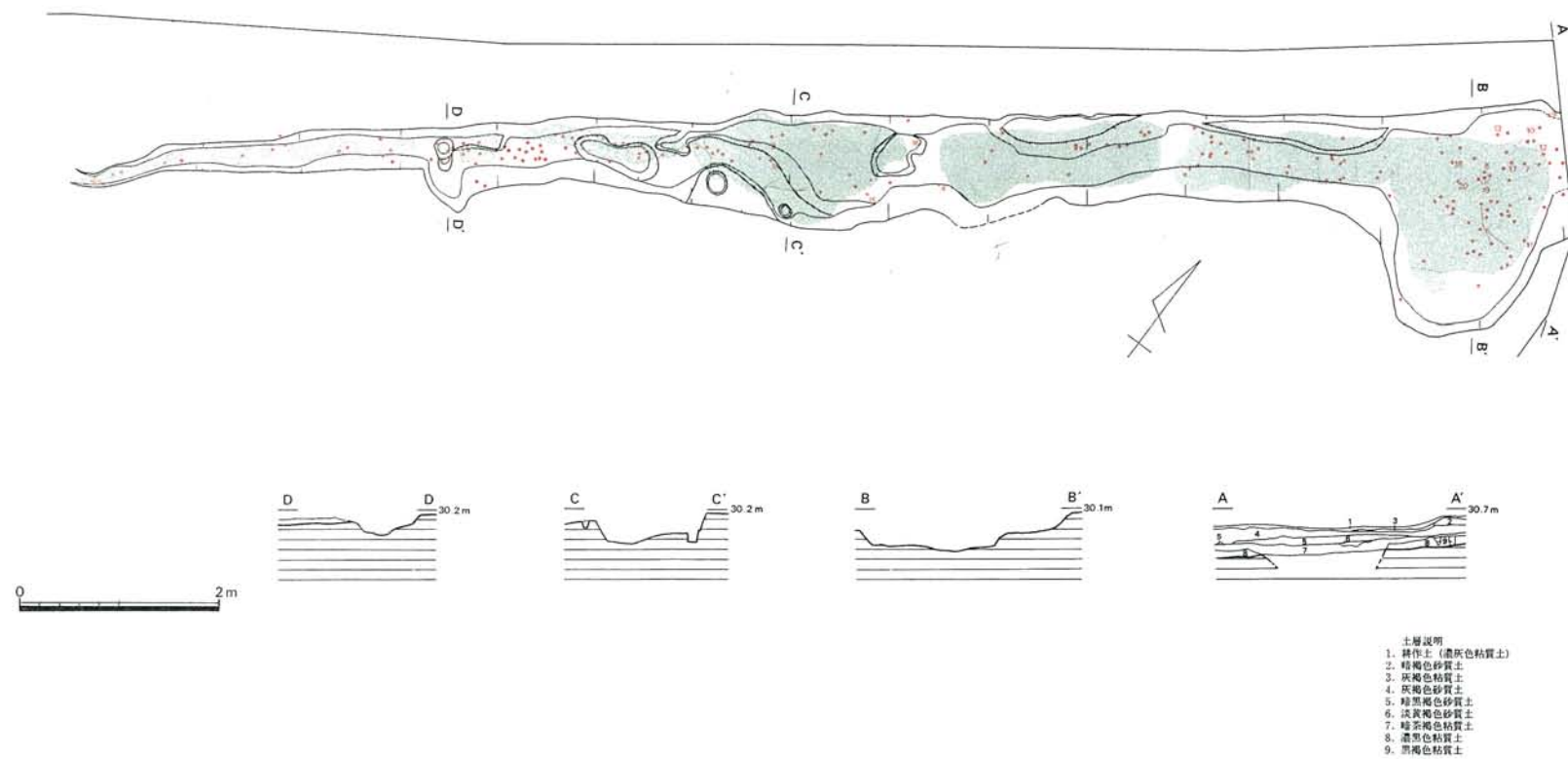
「北調査区」の西端付近，中央部から北端にかけて確認した。東側掘り方はあまりそろっていないが，西側掘り方は，ほぼ直線的となっている。このラインは等高線とほぼ並行しており，何らかの意図をもって構築されたと考えられる。

北側は，調査区外に延び，また南側は「北調査区」中央を分断する水路付近で消滅する。本遺構の上面，特に南側上面については，その検出状況から幾らか削平されていると考えられる。規模は，現状上面で，長さ約 38 m である。幅は，場所によってばらつきがあるが，概ね 0.5～0.8 m で，北端から約 1 m から約 6 m のところまでは，大きく東側が弧を描くように拡がり，最大幅は約 2.3 m となる。深さは，南側は浅く，北に向かうほど深くなる傾向にあり，最深部では，約 0.6 m である。

溝内には，埋土に混じって，拳大から人頭大の礫が，南端から北側約 30 m の位置まで，場所により粗・密はあるが，確認された。これらの礫は，意図的に，また整然と設置しているかように窺える箇所もあったが，全体的な傾向から言えば，これらの礫は，無意識に投棄されたものと考えられる。

溝内には，須恵器・土師器の破片などが出土している（第 21・22 図 4～20）。また，これらの土器に混じって平丸片，土錘，鉄滓が数点出土している。土器の破片は小破片であったり，水流で磨滅しているものがほとんどであった。この土器の様相からいえば，掘削年代は不明であるが，土師器甕（18・19）や須恵器杯（4）などから概ね建物跡と時期的には大きくかけはなれていない時期に使用されていたと考えられる。また遺物のなかには，10 世紀を前後する時期に位置付けられる 12 や 15 のような土師器杯や黒色土器（A 類／9・17・18）や白色系土師器碗（10）など 11 世紀から 12 世紀代の土器が出土している。このことから，少なくとも平安時代のおわり頃までは使用されていたと考えられる。

なお，埋められた年代については，後述するように上面において出土した遺物群（第 22 図 24～29）をみれば，亀山焼系の甕や天目茶碗の破片などがあり，また土師質土器などの特徴から，13 世紀後半～14 世紀代頃のものとは比定されるものであることから，この時期までには完全に埋められ，整地されたと考えられる。

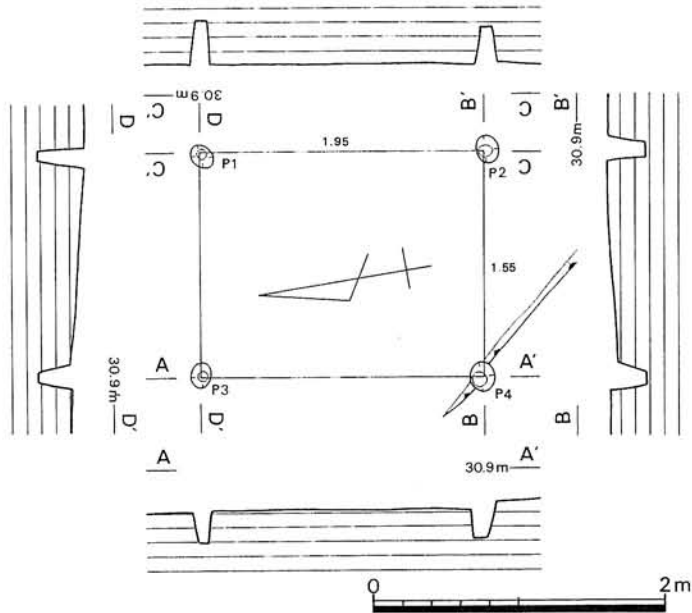


第14図 溝状遺構実測図（S = 1 : 150） ※・は遺物出土位置

II 中世の遺構

A 掘立柱建物跡 (SB)

1 第9号掘立柱建物跡 (SB9) [第15図・図版X-a]

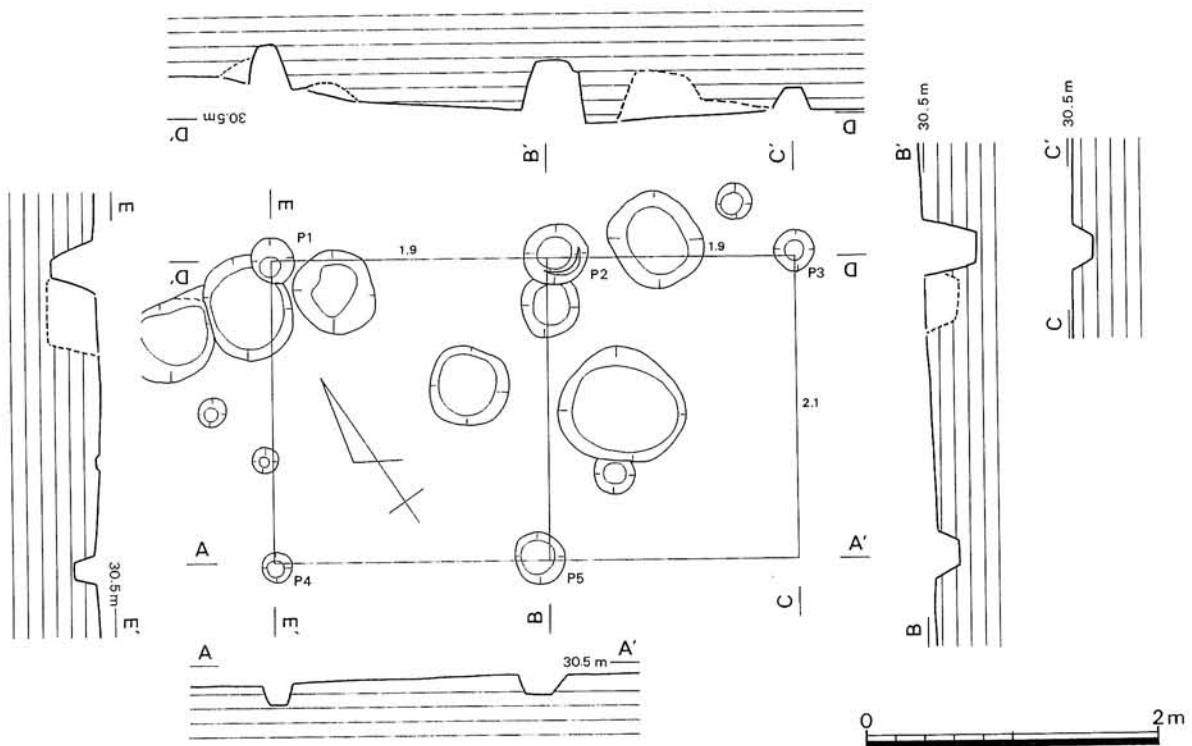


「南調査区」の北半部において確認した。規模は、南北1間(約1.95m)×東西1間(約1.55m)である。桁行の軸方向は、 $N10^{\circ}E$ である。柱穴の規模は上面での直径は総じて約15cm程度で、あまり大きいものではない。現状の深さは、10～30cmである。柱の規模は、柱痕跡が確認できていないことから不明である。

柱穴からは遺物は出土していない。

第15図 第9号掘立柱建物跡実測図 (S = 1 : 60)

2 第10号掘立柱建物跡 (SB10) [第16図・図版V-b]



第16図 第10号掘立柱建物跡実測図 (S = 1 : 60)

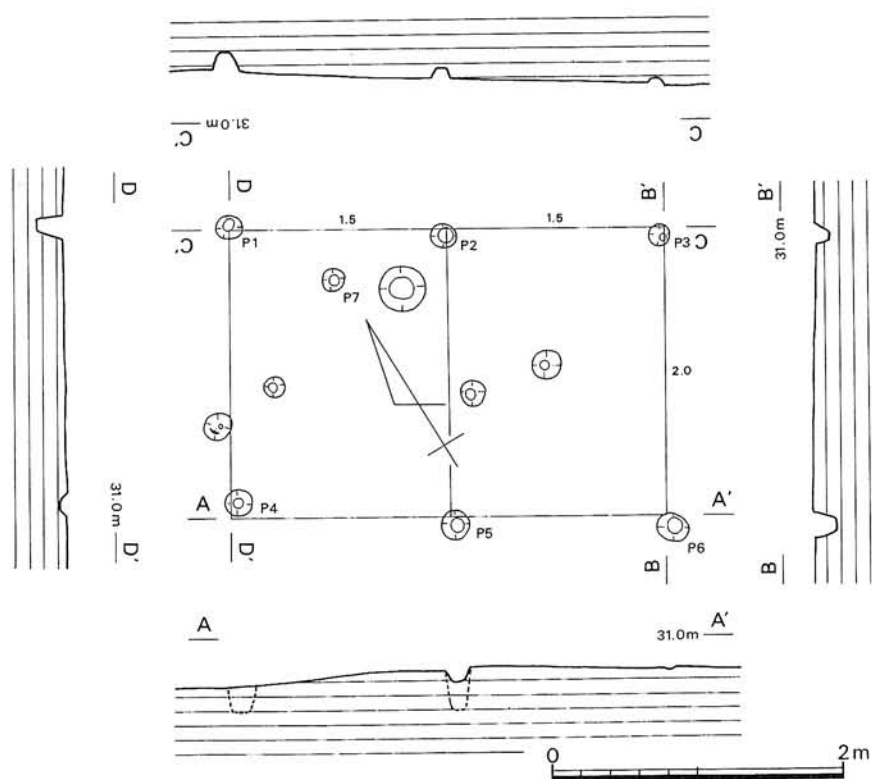
「北調査区」の南端部において確認した。確認面としては、古代の遺構面と同一であり、立地的にSB3及びSB4と重複する。また、SB4においてP6とした柱穴と切り合い関係にある。P1、P3及びP5から出土した遺物から、この建物跡の方が新しい。

上面の遺存状況はあまり良くなく、また南西隅部一箇所の柱穴は欠損している。規模は、南北1間(約2.1m)×東西2間(約3.6m)である。桁行の柱間寸法は、P1-P2間が約1.9m、P2-P3間が約1.7mである。梁行の柱間寸法は、P1-P4間が約2.1mである。桁行の軸方向はN57°Wである。柱穴の規模は、上面での直径が総じて30~40cmとあまり大きいものではない。現状の深さは15~30cmである。柱の規模は、痕跡が確認できていないことから不明である。

P1から瓦器の破片(20)、P3からは土師質土器の皿(19)が出土している。またP2、P5から土器片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

3 第11号掘立柱建物跡(SB11)[第17図・図版X-b]

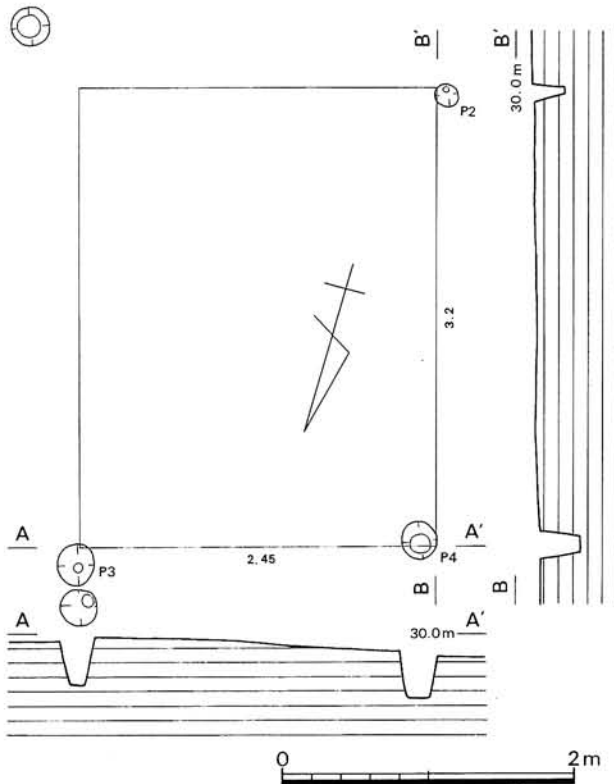
「北調査区」の南側で確認した。SB10から約4m東方向に位置する。上面は削平を受けており、遺構の遺存状況はあまり良くなかった。規模は、南北1間(約2m)×東西2間(3m)である。桁行の柱間寸法は、P1-2間、P2-P3間ともに、約1.5mである。梁行の柱間寸法は、P1-P4間は、約2mである。桁行の軸方向は、N59°Wである。第10号掘立柱建物跡の桁行の軸方向とは、ほぼ直角となっており、これら2棟の建物の関連を示すものと考えられる。柱穴の規模は、上面での直径が総じて15~20cmとあまり大きいものではない。現状の深さは15~20cmである。柱の規模は柱痕跡が確認できていないことから、不明である。



第17図 第11号掘立柱建物跡実測図 (S = 1 : 60)

P 7 から土器片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

4 第12号掘立柱建物跡 (S B12) [第18図]



「北調査区」の北側で確認した。S B10・S B11の位置する場所からは約40m北方向に位置する。柱穴から遺物は何も出土していないが、同一遺構面から土師質土器片が出土したピットがあり、またP 3は、S D 1の埋土上面から掘り方が確認できていることから、中世の遺構と判断した。

上面は削平を受けており、遺構の遺存状況はあまり良くなかった。規模は、南北1間(約3.2m)×東西1間(2.4m)である。桁行の軸方向は、N15°Wである。柱穴の規模は、上面での直径が総じて15~25cmとあまり大きいものではない。現状の深さは15~20cmである。柱の規模は柱痕跡が確認できていないことから、不明である。

柱穴からは、遺物は出土していない。

第18図 第12号掘立柱建物跡実測図 (S = 1 : 60)

「北調査区」ピット群と土器群 [第19図・図版X-b]

S D 1の上面及びその周辺においては、柱穴と考えられるピット群と土器群が多少まとまって確認した。ピット群については、上記のようにS B12を確認するにとどまった。それ以外のピットは散在しており、決して建物が立てられるものではなかったが、地形的なことを考慮すれば、北西側の調査区外にも、ピット群は広がっていると推測され、周辺の調査によっては将来増加する可能性もある。なお、S P 1からは、土師質土器の土鍋の破片が出土し、S B12が中世期の構築と推定されるとともに、これらのピット群は、中世期のものと考えられる。

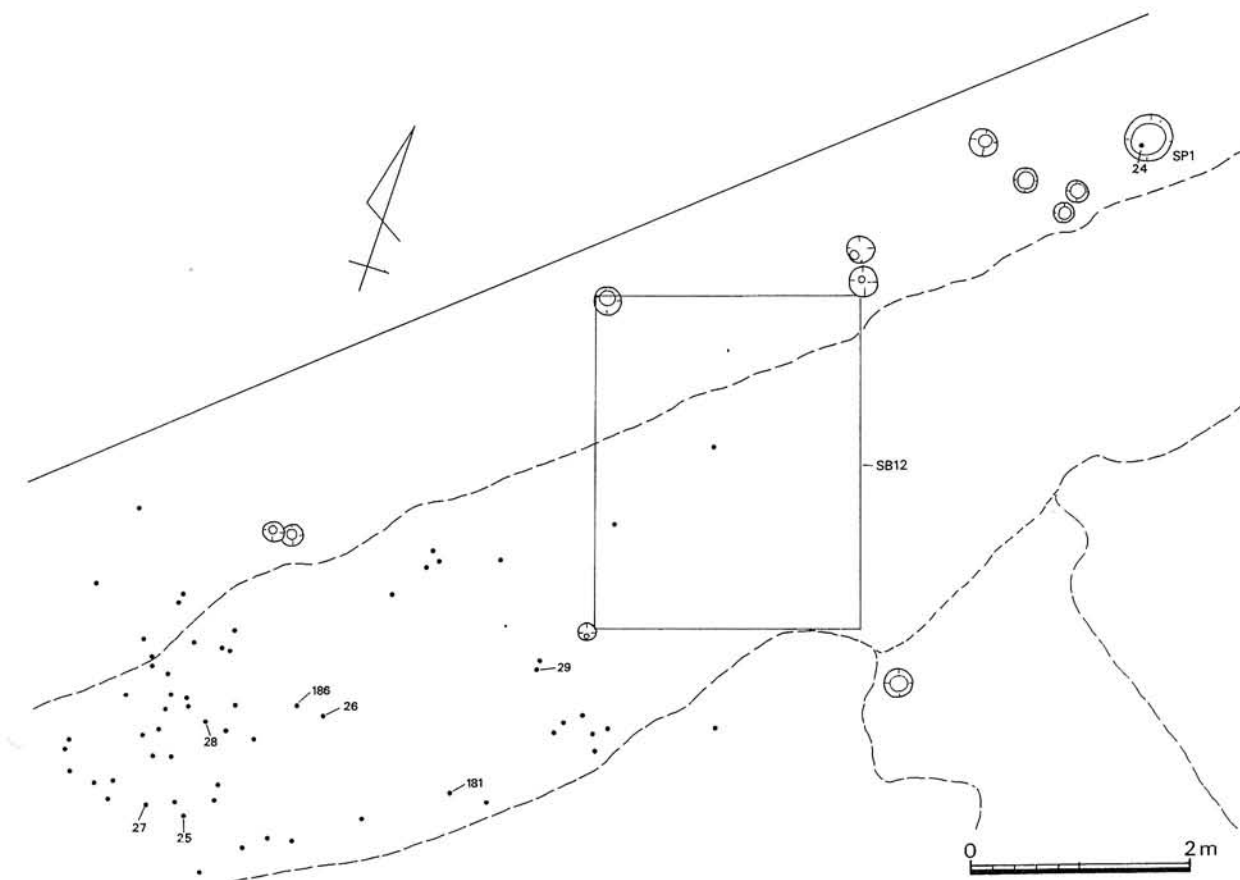
また、ピット群の周辺や、南側においては、包含層及び溝状遺構の埋土上端部にかけて、多くの土器片が出土している。ほとんど細片であったので、図示しえたものは多くはないが、碗・杯・鍋などの土師質土器の他、亀山焼系の甕(28)や天目茶碗(29)等がある。これらの土器群の年代は、概ね13世紀後半から14世紀代に比定され、上記S P 1から出土した遺物の年代に近いものであり、またその他の調査区内の包含層から出土した遺物の年代とも、大きなひらきはない。このことから、S D 1の埋没後には、ある程度整地したのち中世の遺構面として使用されたと考えられる。

III 自然流路 [第20図・図版X I - c]

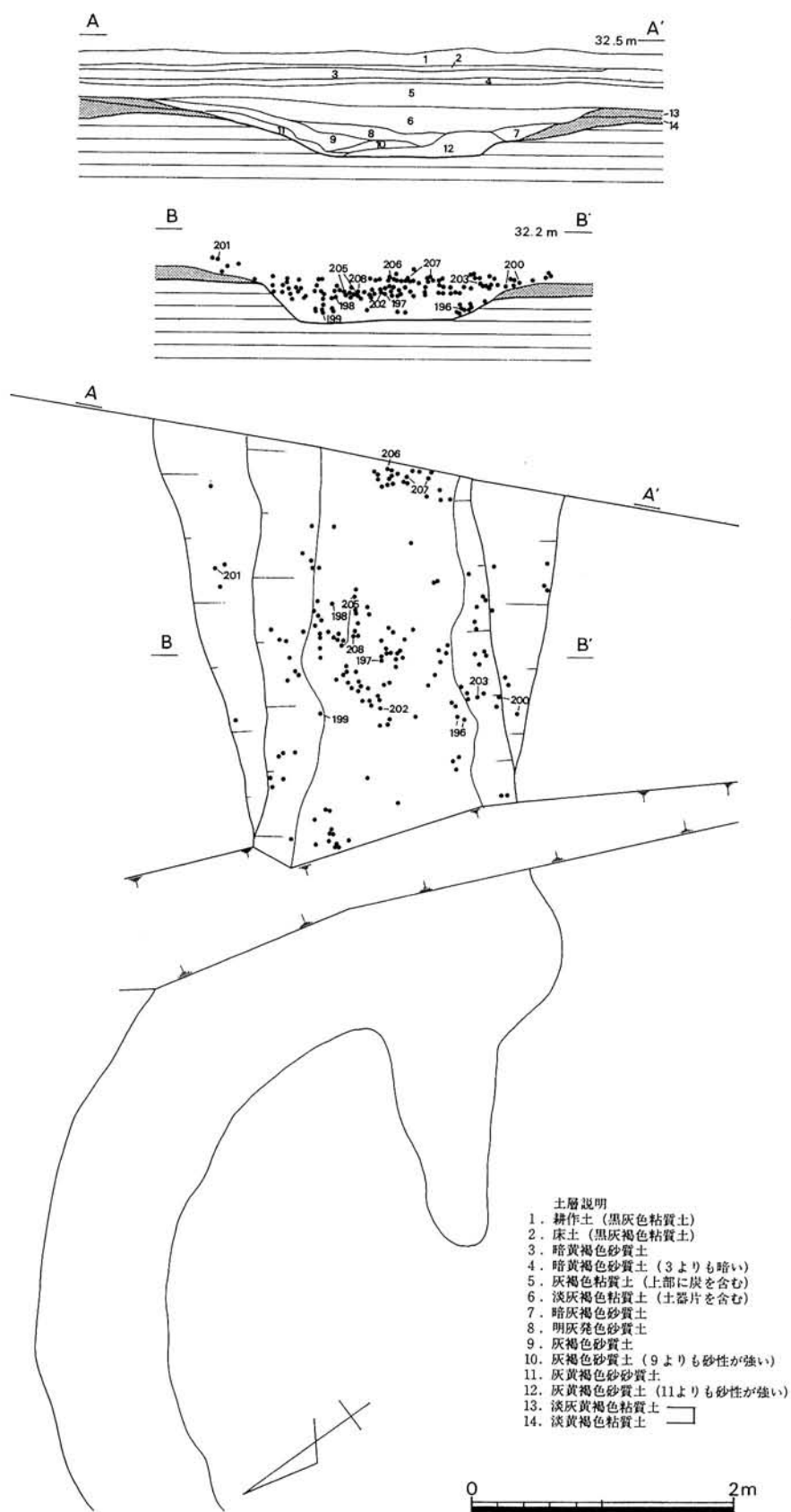
自然流路は「北調査区」のやや南半部に調査区を横断するように確認した。このような流路の跡は、更に「北調査区」の中央及び北半部にも認められたが、これらはすでに削平されており、わずかに痕跡を確認するにとどまった。

ところで、この南半部で確認した流路内からは弥生時代の土器片が出土している。水流のため小破片が多く器形を明確にできるものは多くはなく、またその土器群にも時期的なばらつきがあったが、概ね弥生時代中期初頭から中期後半頃に属するものであった(第35図196~208)。一方調査区を縦断する水路以西は削平を受けていたが、砂堆積層を面的に追うことができ、底面を確認できた。その砂層中からも土器片が出土している。これらの自然流路内の埋土中からは、先節までみてきた古代及び中世の遺物は混じっておらず、流路埋土上面(5層)からは弥生時代後期の土器が出土している。

このことから、弥生時代中期以降は自然河川として東から西へ、即ち山側から石内川へと注ぎ込んでいたものと思われるが、遺物の出土状況からいえば、古い様相の土器(196~199)は下層から、新しい様相のものは上層(第6層)(200~207)から出土していることから、徐々に自然的に埋もれていったと推定できる。しかしながら、第6層からはほぼ同時期の遺物が比較的まとまって出土している状況からいえば、ある段階に意図的に埋められたとも解釈することができる。このことについては、下層が砂質土層であるが、上層(第6層)は粘質土という土層観察からも窺うことができる。いずれにせよ少なくとも弥生時代中期後半もしくは後期のはじめごろには、この自然流路の姿は消滅したと考えられる。



第19図 「北調査区」ピット群実測図 (S = 1 : 80) ※・は遺物出土位置



第20図 自然流路実測図 (一部) (S = 1 : 120)

3. 遺物

本遺跡から出土した遺物の多くは、各遺構面に関連した、包含層中からのものである。古代の遺構面の包含層は暗灰褐色砂質土層で、その中でも「北調査区」を中心に出土している。特にS B 1の周囲約10mの範囲からの出土が多い。また中世の包含層は、暗褐色粘質土層である。また、わずかに、遺構内及び遺構検出面上からも出土している。

古代の遺構面及び包含層からは、土師器・須恵器のほか、瓦、土錘、鉄製品などが出土している。また中世の遺構面及び包含層からは、土師質土器、瓦質土器のほか、陶器、貿易陶磁器、古銭などが出土している。また両包含層から、縄文から弥生時代の土器・石器、青銅製品等も出土しているが、ほとんどは二次堆積をしたものと考えられる。

A. 遺構に伴う遺物

1 古代の遺構面

遺構に伴うものは少なく、特に建物跡に伴うものは少ない。小破片が多く、図化しえた遺物は須恵器杯(1)のみで、陶邑中村編年によれば1)、概ね8世紀代に比定される。また土坑から出土した須恵器は7世紀後半頃のものであろう。

溝状遺構から出土した遺物は、土師器、須恵器、平瓦、土錘、鉄滓などがある。建物跡に伴うと考えられる杯(1)とはほぼ同時期のものもあるが、10世紀代を前後する土師器杯や11世紀代に属すると考えられる黒色土器A類2)や白色系土器碗3)が存在する。

土器類〔第21図・第22図19・20／図版XIII〕

1は柱穴(S B 3周辺のP 6)からの出土である。須恵器の杯である。口径は11.1cmである。ナデ調整で、体部は外反気味に立ち上がる。端部は丸味をもつ。色調は淡灰色、胎土は精微、焼成は良好である。2はS K 1出土である。須恵器の杯蓋で、口径は11.3cmである。天井部外面には、ヘラケズリ痕跡が残る。それ以外は内外面ともナデ調整仕上げである。口縁部は、やや直線的になり、端部はやや屈折させる。色調は青灰色、胎土は精緻、焼成は良好である。3はS K 3出土である。須恵器の短頸壺で、ハの字状に外反する口縁をもつ。肩はあまり張らず、なだらかにおりる。口径は9.4cm、胴部最大径は17.2cm、器高は13.2cmである。胴部最大径のやや上には一条の沈線が巡る。胴部最大径下2cm以下はヘラケズリを施し、その他はナデ調整である。色調は青灰色、胎土は精緻、焼成は良好である。4～20はS D 1埋土中からの出土である。4～8は須恵器である外は、すべて土師器である。4は杯で、口径は13.7cmである。内外面ともナデ調整で、底部外面はヘラ切り後横ナデをする。体部は外反気味に立ち上がる。色調は暗灰色、胎土は精緻、焼成は良好である。5は碗で、断面三角形の高台をもつ。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁端部は若干肥厚させて、丸味をもって終わる。内外面ともナデ調整である。底部はヘラ切り離し後横ナデをする。口径は15.6cm、高台径は7.4cm、器高は5.9cmである。焼成は暗青灰色、胎土は微砂粒を僅かに含み、焼成は良好である。6は短頸壺の口縁部から肩部の破片で、口縁部はハの字状に外反し、なだらかなあまりはらない肩部をもつ。口径は9.6cmである。ナデ調整である。色調は淡灰色、胎土は精緻、焼成は良好である。7は碗の高台の破片で、体部外面及び高台はヘラケズリ、内面はナデ調整である。形態や調整手法は灰釉陶器に類似するが、まったく釉薬は施されいない。内面には、暗文状にヘラミガキがなされている。色調は淡灰色、胎土は精緻、焼成は良好である。8は碗の破片で、断面台形の高台が貼り付けられている。体部は内彎気味立ち上がる。高台径は9.3cmである。内外面ともナデ調整である。色調は青灰色、胎土は細砂粒を多く含み、焼成は良好である。

9, 16, 17は碗の破片で、口縁部外面から内面は黒色化されており、いわゆる内面黒色土器（A類）である。9は口径は13.3cmである。内彎気味に立ち上がり、端部は強く外反させる。色調は外面は淡灰褐色で、胎土は微砂粒を多く含み、焼成は良好である。16は高台の破片で、断面台形の高台をつける。高台径は8.4cmである。体部は内彎気味に立ち上がる。色調は淡灰褐色、胎土は精緻、焼成は良好である。17はやや細長い逆台形の高台をつける。高台径は7.4cmである。色調は外面は黒褐色、胎土は微砂粒を多く含み、焼成は良好である。10は碗で、若干内傾する断面台形の高台をもち、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁端部は若干外反する。口径は15.2cm、高台径は7.8cmで、器高は6.7cmである。色調は淡黄褐色、胎土は精緻、焼成は良好である。11は碗の口縁部の破片で、口径は14.8cmである。直線的に体部は立ち上がり、端部は尖る。色調は淡灰色、胎土は細砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。12, 15は碗で、内湾気味に立ち上がり、端部は若干尖り気味におわる。円盤状の底部をもつ。回転ナデ仕上げで、底部はヘラ切りである。12は、口径は11.2cmで、底径は6.6cm、器高は5.3cmである。色調は暗黄褐色、胎土は砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。15は、底径は5.9cmである。色調は淡灰褐色、胎土は細砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。13は皿で、内彎気味に立ち上がり、端部は外側に屈折させる。口径は11.2cm、底径は8.8cmである。色調は黒褐色、胎土は細砂粒を多く含み、焼成は良好である。14は赤色塗彩の皿で、小破片のため口径は復元不可能である。体部は外反気味に立ち上がらせ、端部は外側に屈折させる。色調は淡黄褐色、胎土は微砂粒を多く含み、焼成は良好である。18, 19は甕である。内傾気味に八字状に外反させ、端部は丸いながらも、面を持つ。体部の残る18は、口縁内外面及び胴部内面はナデ調整、胴部外面は、口縁屈折部下に一条の凹線状のナデを巡らし、その下に粗いハケメ調整である。口径は24.1cmである。色調は暗褐色、胎土は1～3mm大の砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。19は口径27.6cmである。色調は暗茶褐色、胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好である。20は羽釜の破片である。口径は25cmである。やや尖り気味の口縁部直下に、断面台形の凸帯を巡らせる。凸帯先端面はナデて若干へこみ、また下面も強くナデている。内外面ともナデ調整で、胴部外面には指ナデの痕跡がみられ、また僅かにハケメがみられる。色調は、外面黒褐色、内面暗黄褐色、胎土は1mm大の砂粒を多く含み、焼成は良好である。

平瓦 [第34図173／図版XXII]

凹面は布目痕、凸面には縦方向の縄タタキメが残る。色調は淡黄灰色、胎土は細砂粒が多く、焼成は良好である。

土錐 [第34図187・188／図版XXIII]

両者とも溝状遺構埋土中から出土した。いわゆる棒状土錐で、両端に貫通孔を穿ったタイプであるが、片方は欠損する。ナデ痕跡が著しい。187は現存長は3.8cm、幅は1.2cm、円孔径は0.4cmである。色調は暗黄褐色、胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好である。188は現存長は3.9cm、幅は1.5cm、円孔径は0.5cmである。色調は暗黄灰色、胎土は精緻、焼成は良好である。

II 中世の遺構面

建物跡に伴うものは少ないが、出土した遺物は、瓦器碗の破片から13世紀後半から14世紀前半に属するものと考えられる4)。また「北調査区」ピット群付近の包含層からまとまって出土しており、ここから出土した土器は、土師質土器や天目茶碗5) などから、概ね14世紀代に比定できよう。

土器類 [第22図21～29／図版XIV]

21はSB10のP3からの出土で、土師器の皿である。口径は8.1cmである。底径6cmである。体部は内傾気味に立ち上がる。底部はヘラ切り離しである。色調は淡灰褐色、胎土は細砂粒を多く含み、焼

成はやや不良である。22はSB10のP1からの出土で、瓦器の椀の破片である。高台は形骸化し、わずかに残るのみである。体部は内彎気味に立ち上がる。高台径は3.2cmである。外面にはナデ痕跡が顕著で、内面には暗文状のミガキ痕跡がある。色調は暗灰色、胎土は精緻、焼成は良好である。23は「北調査区」ピット群のうちのSP1からの出土である。土師質土器の鍋の破片で小片のため、口径は復元できない。外反する口縁部を内彎させる。胴部は直立する。口縁部内外面ともナデ調整で、胴部は、外面は横ナデ、内面は横方向のハケメ調整である。屈折部以下には、格子状のタタキ痕がみられる。色調は、外面暗黄褐色、内面乳褐色、胎土は精緻、焼成は良好である。24～29は溝状遺構埋土上端面中からまわって出土したものである。24は土師器の皿で、直径5.2cmの円盤上にわずか3mmの立ち上がりがつく。底部は静止糸切り離しである。色調は暗黒褐色、胎土は細砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。25、26は土師質土器の土鍋の破片で、体部から口縁部にかけて、直線的に開き、端部外面には、粘土帯を貼り付け横方向に拡張させる。内外面ともナデ調整で、26の内面には、一部ハケメが施される。25は口径26.4cmである。色調は、外面黒褐色、内面灰褐色、胎土は精緻、焼成は良好である。26は口径28.4cmである。色調は、外面黒褐色、内面灰褐色、胎土は細砂粒を多く含み、焼成は良好である。27は、瓦質土器の鍋の破片である。小片のため、口径は復元できない。外面はナデ調整、内面は横方向の刷毛目調整である。色調は、外面黒色、内面淡黄褐色、胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好である。28は天目茶碗で、恐らく美濃焼であろう。削り出しの台形の高台をもち、内傾気味に立ち上がり、端部は屈折させる。口径は12cm、高台径は4.6cm、器高は6.5cmである。素地は青黄灰色で、暗茶色の釉薬を施す。胎土は精教で、焼成は良好である。29は須恵器系甕もしくは壺の底部の破片である。底径は15cmである。体部は直線的に立ち上がる。色調は赤銅色、胎土は1mm大の砂粒を多く含み、焼成は良好である。

鉄製品 [第34図181／図版XIII]

その形態から刀子と考えられるが、刃部の厚さは最大0.2mmと比較的薄い。基部と考えられる箇所は、厚く均等になっていることから鉄の柄と考えられる。現存長は12.5cm、刃部長5.7cm、刃部幅0.9cmである。重量・は16.8gである。

砥石 [第34図186／図版XXIII]

流紋岩製で、現存長7.8cm、幅最大で3.5cm、厚さ最大で3.2cmである。断面方形の方柱状を呈する。小口の一方は欠損する。広口面の三面が使用されている。

B. 遺構に伴わない遺物 [第23図～第34図／図版XV～XXIII]

I 古代の遺 --- 構面

古代の遺構面からは、土師器、須恵器、緑釉陶器、黒色土器、瓦類などが出土している。推定される年代は、概ね7世紀前半頃から10世紀後半頃であるが、11世紀～12世紀代の遺物も少なくない。それぞれの遺物の詳細については、別表の遺物観察表にまとめるとして、ここでは概要についてまとめた。

土師器では、杯類と甕の出土が多い。杯の中では、外面を赤色顔料を塗るもの(30～33)やいわゆる畿内系土師器(36～42)がある。後者では、胎土や器形などの特徴から、搬入品と推定されるものと、模倣してつくられたと考えられるものがある。39は、胎土では砂粒を含み、色調も茶褐色を呈しており、その外が精緻で、明橙褐色を呈しているのと比較して異質である。この土器は後者と促えられる。これらの畿内系土師器の年代については、平城宮での編年によれば6)、40が飛鳥III一IV期に位置付けられると考えられる外は、概ね平城III期を前後する時期と推定され、主に8世紀中頃と比定される。

また甕類では、66のように球形の胴部をもち、口縁部は外反し、端部をつまみ上げるタイプもあるが、多くは長胴形を呈するタイプで、口縁部の形態や調整方法で、幾つかに分類可能である。a類は、43のように八の字状に外反するタイプである。口縁端部の違いで、さらに分けられるであろう。b類は、64のように内彎しながらしな端部が肥厚するタイプである。このタイプは体部外面に粗いハケメを施す。口縁部と体部との境界外面は強く横ナデして凹線状を呈し、内面も稜をなしているものである。c類は、69のように口縁部はやや内彎気味にひらき、端部上下を拡張して面をつくるタイプで、これも体部外面に粗いハケメが見られる。これら三つの相違は、他地域の出土例を参考にすれば7)、時間差と考えられ、a類のタイプは、7世紀後半から8世紀後半頃に概ね位置付けられ、b類のタイプは、8世紀後半から9世紀前半頃に位置付けられ、c類のタイプは、9世紀前半に位置付けられる。

須恵器では、杯身・杯蓋類、壺、甕、鉢、硯などが出土している。そのほとんどは杯身・杯蓋類である。その時期は、陶邑中村編年によれば8)、Ⅱ型式5段階からⅢ型式2段階に比定され、7世紀前半から中頃に位置付けられるものや、10世紀後半頃に位置付けられるもの(127, 128)があるが、ほとんどはⅣ型式3段階からⅤ型式段階に比定され、8世紀中頃から9世紀前半に位置付けられるものである。その外の器種も概ね8世紀前半から9世紀代に位置付けられるものである。その中で、特徴的な器種として114の長頸壺があるが、このタイプは太宰府などで出土例9)があり、九州の肥後地域を中心に分布しているという10)。また硯が2個体分出土しているが、同タイプのものと考えられ、方形の透かしをもつ円面硯である。

緑釉陶器は計3点が出土しているが、小破片である。胎土では、土師質のもの(131, 132)と須恵質のもの(133)がある。

黒色土器は、内面のみ黒色化をするA類(136)と両面を黒色化するB類(134, 135)がある。

瓦類(166～172)は、ほとんどは丸瓦である。胎土や調整などから少なくとも6個体以上を確認したが、ほとんど小破片であった。外面はタタキで、内面は布目圧痕がみられた。外面のタタキは磨り消しているものもある。その外では軒丸瓦と平瓦は小破片ながら1点ずつ出土している。その外の古代の遺物としては、鉄製品(174～185／一部中世のものも含む)、土製品(189～191)等がある。鉄製品は直刃鎌、手斧、紡錘車、刀子、平根式鎌などがある。177と178は摘鎌と考えられる。

土製品はすべて土錘である。いわゆる棒状土錘で、両端に田孔を穿つタイプであるが、すべて片方は欠損する。

Ⅱ 中世の遺構面

中世の遺構面からは、土師質土器や瓦質土器、瓦器、古銭、輸入磁器などが出土している。土師質土器は、小破片であるが、土鍋の破片がある。瓦質土器には、羽釜などがある。

瓦器は各所から出土している(138～148)。個体数でいえば、口縁部の破片から少なくとも11個体以上出土している。高台が判明できる個体のうち、138以外は、ミミズ腫れ状の形骸化したものがつくタイプである。これらの瓦器は和泉産タイプで、高台の形態から13世紀後半から14世紀前半頃に位置付けられる11)。

その外、古銭が5枚出土している。遺存状況はあまりよくないため、銘字が判読可能でないものもあるが、192は皇宋通宝(初鑄年代は宝元二年〔1039年〕)、193は紹聖元宝(初鑄年代は紹聖元年〔1094年〕)、194は洪武通宝(初鑄年代は洪武元年〔1368年〕)が出土している。また無紋の銅銭がある。

輸入陶磁器では、白磁(158～165)と青磁(149～157)がある。碗及び皿が出土している。碗ないしは皿の口縁は、玉縁のタイプと鳥嘴状のタイプがある。北宋後半代の白磁と考えられるが、これ

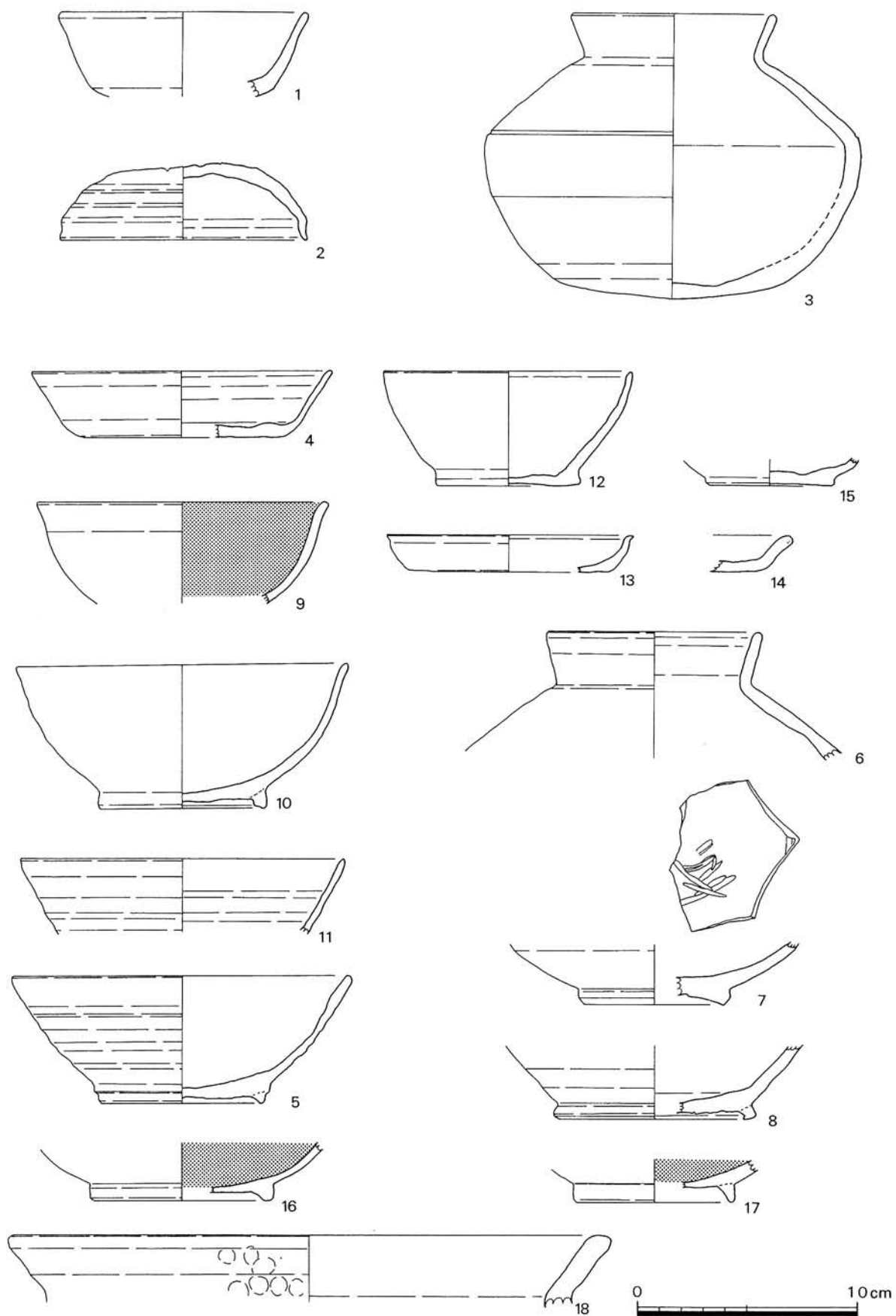
らの日本で出土する年代は、太宰府において上限が11世紀後半から12世紀初頭と推定されている(12)。
瀬戸内海沿岸地域での出土事例からみれば、12世紀後半から13世紀前半頃の出土例が多いことが指摘
されていることから、本遺跡出土のこれらの白磁の時期については、概ね12世紀後半代から13世紀前
半に比定しておきたい。また青磁についても碗及び皿が出土している。前者では端反碗、蓮弁文碗、及び
劃花文碗がある。いわゆる龍泉窯系の青磁である。これらの日本で出土する年代は、太宰府において13
世紀後半から14世紀代と推定されている(13)。これらの青磁も概ねこれらの時期にあてはまるものと考
えられる。

III そのほか

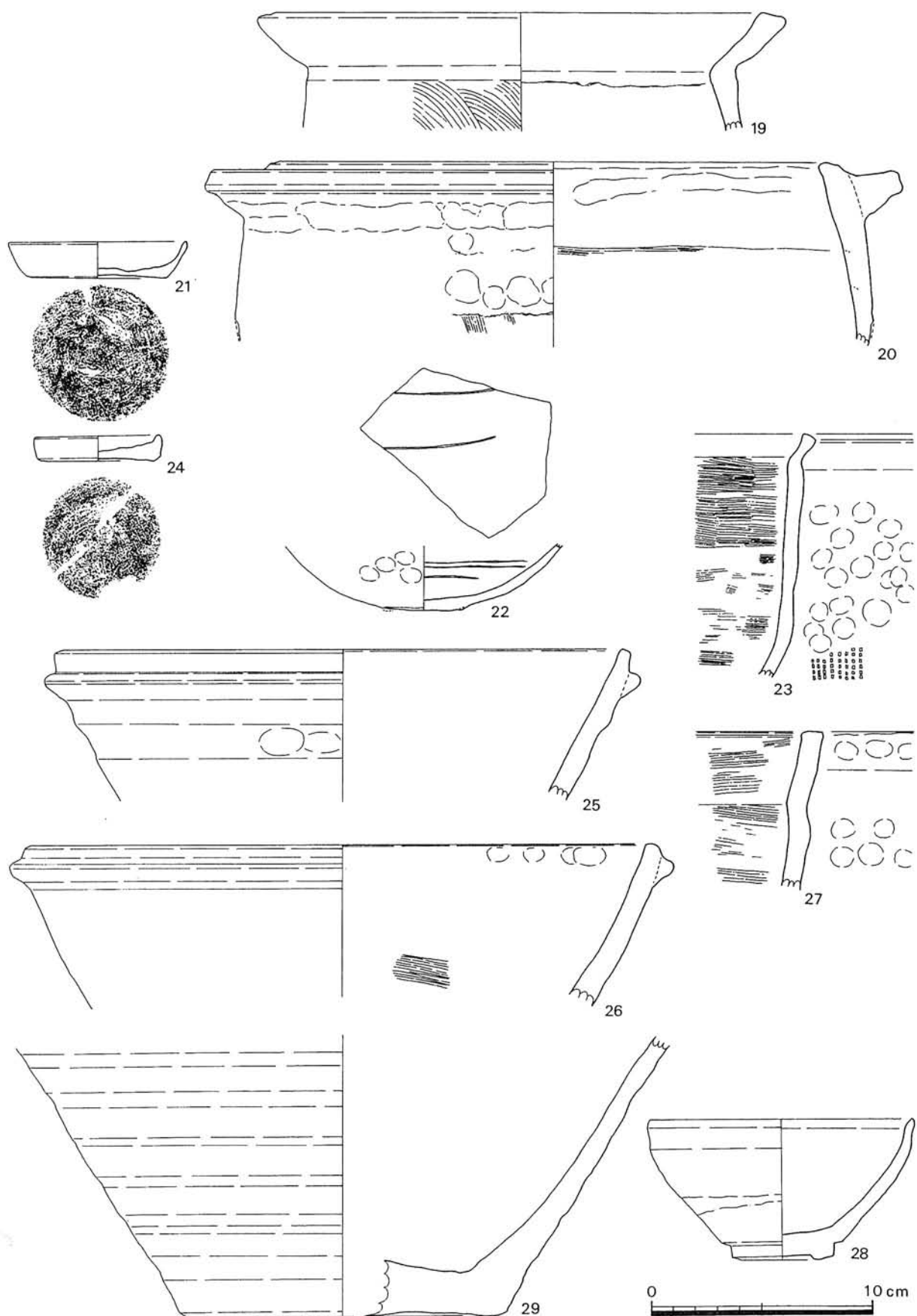
青銅武器(195)の切先片が出土している。遺存状況及び湯まわりが悪いためか、刃先は消失してい
るが、両面には樋と鎬が観察できる。現存長約5.9cm, 幅約2.1cm, 最大厚約0.5cmである。
淡青緑色を呈している。

注

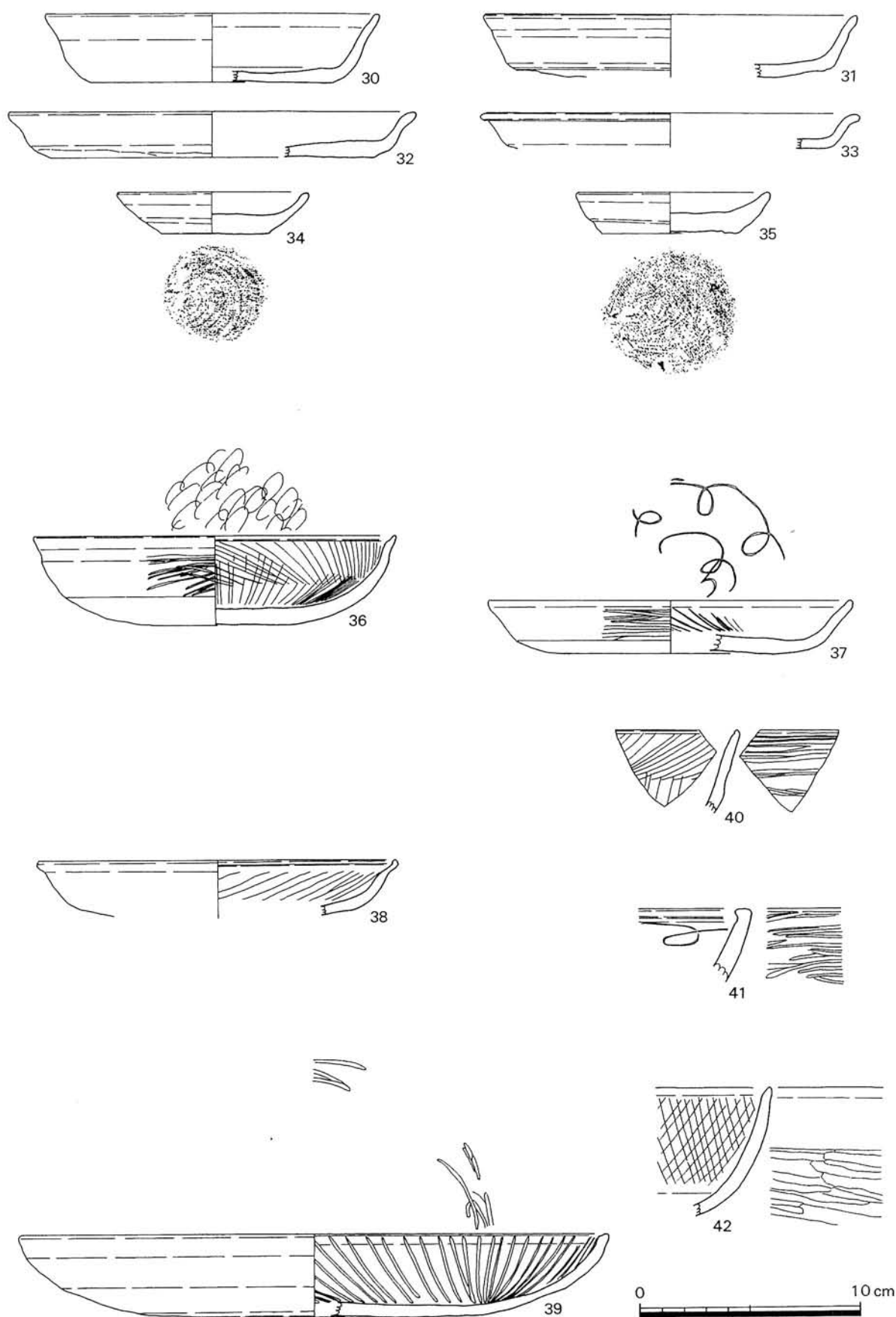
1. 中村 浩 1978「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑』III(大阪府文化財調査報告書第30輯),
大阪府教育委員会(1981『和泉陶邑窯の研究』柏書房に再録)
2. 森 隆 1990～1991「西日本の黒色土器生産」『考古学研究』第37巻第2～4号, 考古学研究会
3. 四国中国中世土器検討会・財団法人東広島市教育文化振興事業団主催 1993『11世紀頃の瀬戸
内白色系土器碗出現前後の土器様相』資料集
4. 尾上 実 1983「南河内の瓦器碗」『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』藤澤一夫先生古稀言千
念論集刊行会
5. 折尾学・森本朝子 1987「天目茶碗再考―出土遺物からみたその変遷―」『東アジアの考古と歴史』
(岡崎敬先生退官記念論集) 同朋社1987
6. 西 弘海 1975「平城宮出土土器の編年とその性格」『平城宮発掘調査報告』VII 奈良国立文化財
研究所(1986『土器様式の成立とその背景』真陽社に再録)
7. 佐藤浩司 1987「奈良時代の須恵器と土師器―旧豊前国を中心として―」『東アジアの考古と歴史』
下(岡崎敬先生退官記念論集) 同朋社
- 宇野慎敏 1989「仮称勝円式土器小考」『横山浩一先生退官記念論文集I 生産と流通の考古学』1
横山浩一先生退官記念事業会
- 桑田俊明・是光吉基ほか1979『大宮遺跡第2次発掘調査概報』広島県教育委員会ほか
8. 注1前掲文献
9. 山本信夫 1992「北部九州の7～9世紀中頃の土器」『古代の土器研究会第1回シンポジウム古代
の土器研究―律今土器様式の東・西―』資料集古代の土器研究会
10. 注7佐藤論文
11. 注4前掲文献
12. 富田賢次郎・森田勉 1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について―形式分類と編年を中心
にして―」『九州歴史資料館研究論集』4 福岡県立九州歴史資料館
13. 注12前掲文献



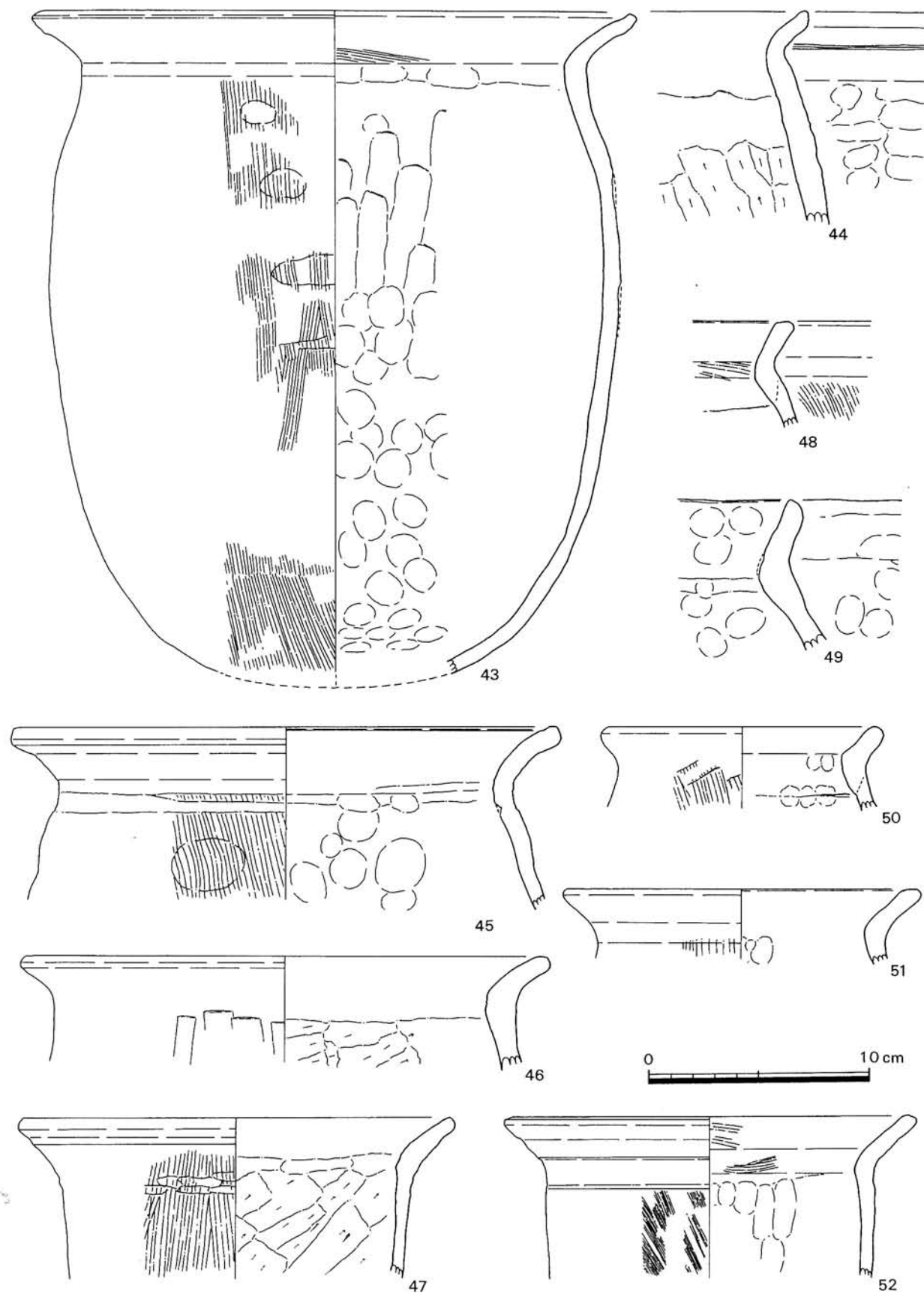
第21図 遺構内出土遺物実測図(1) (S = 1 : 3)



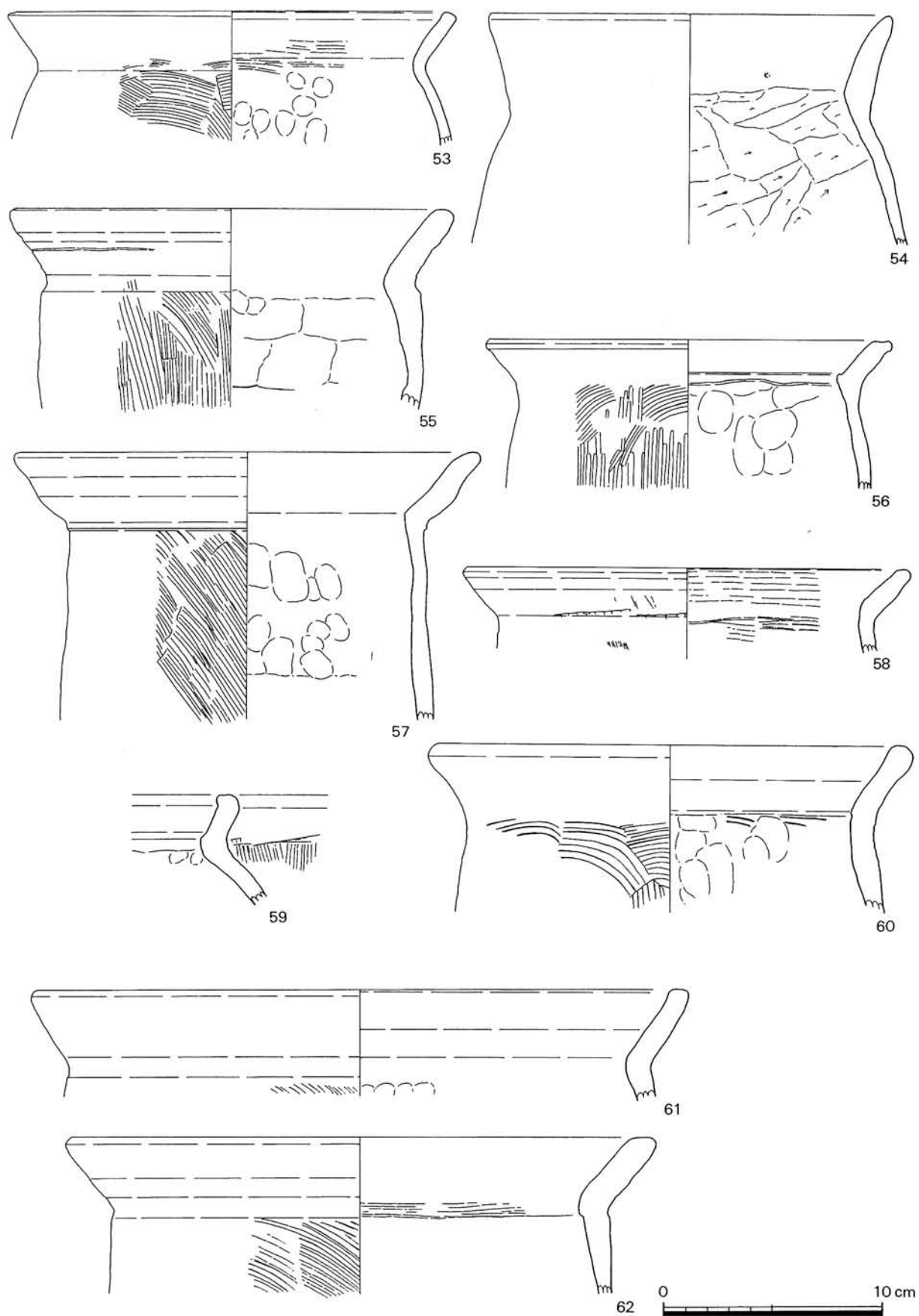
第22図 遺構内出土遺物実測図(2) (S = 1 : 3)



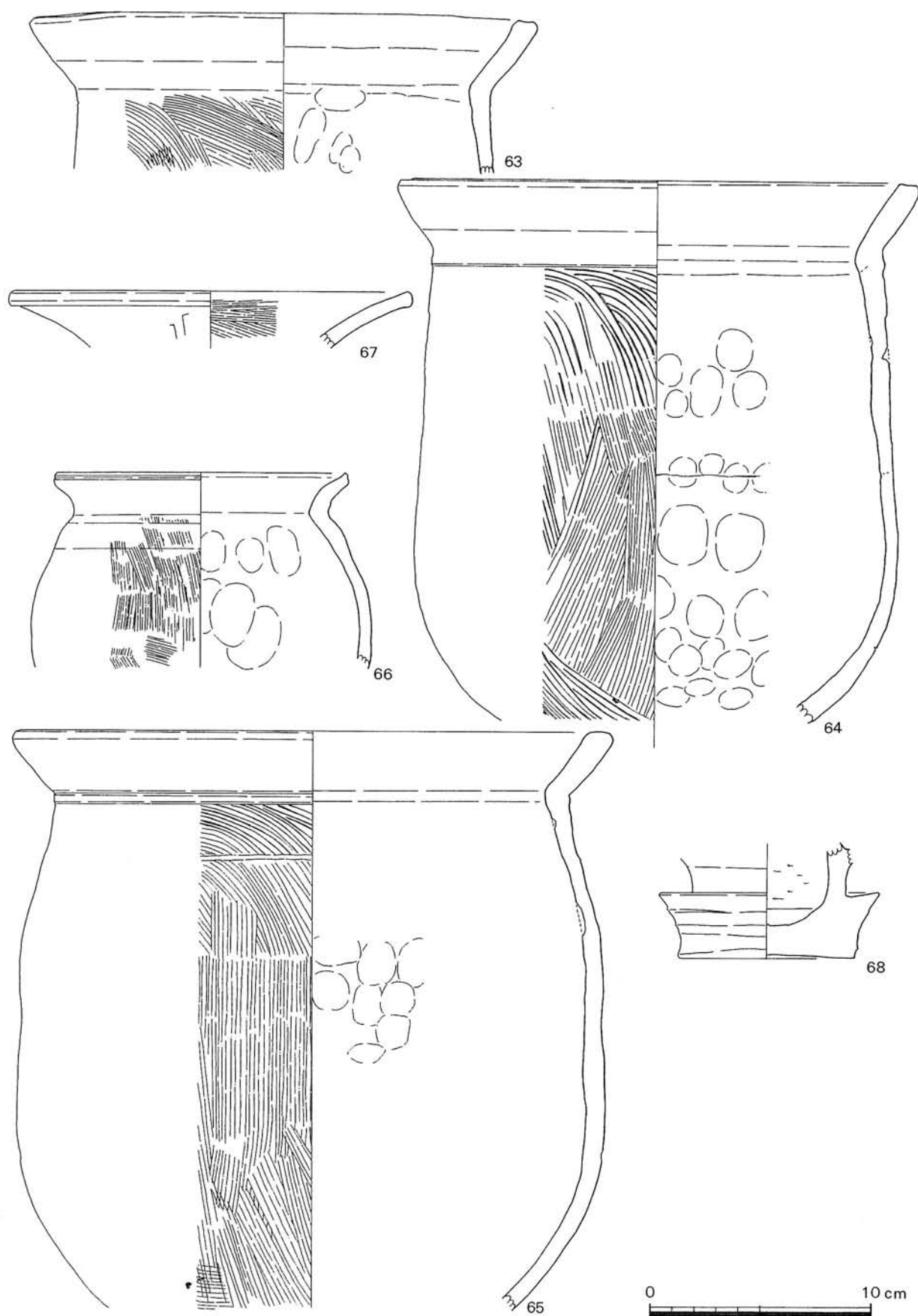
第23図 包含層出土遺物実測図(1) (S = 1 : 3)



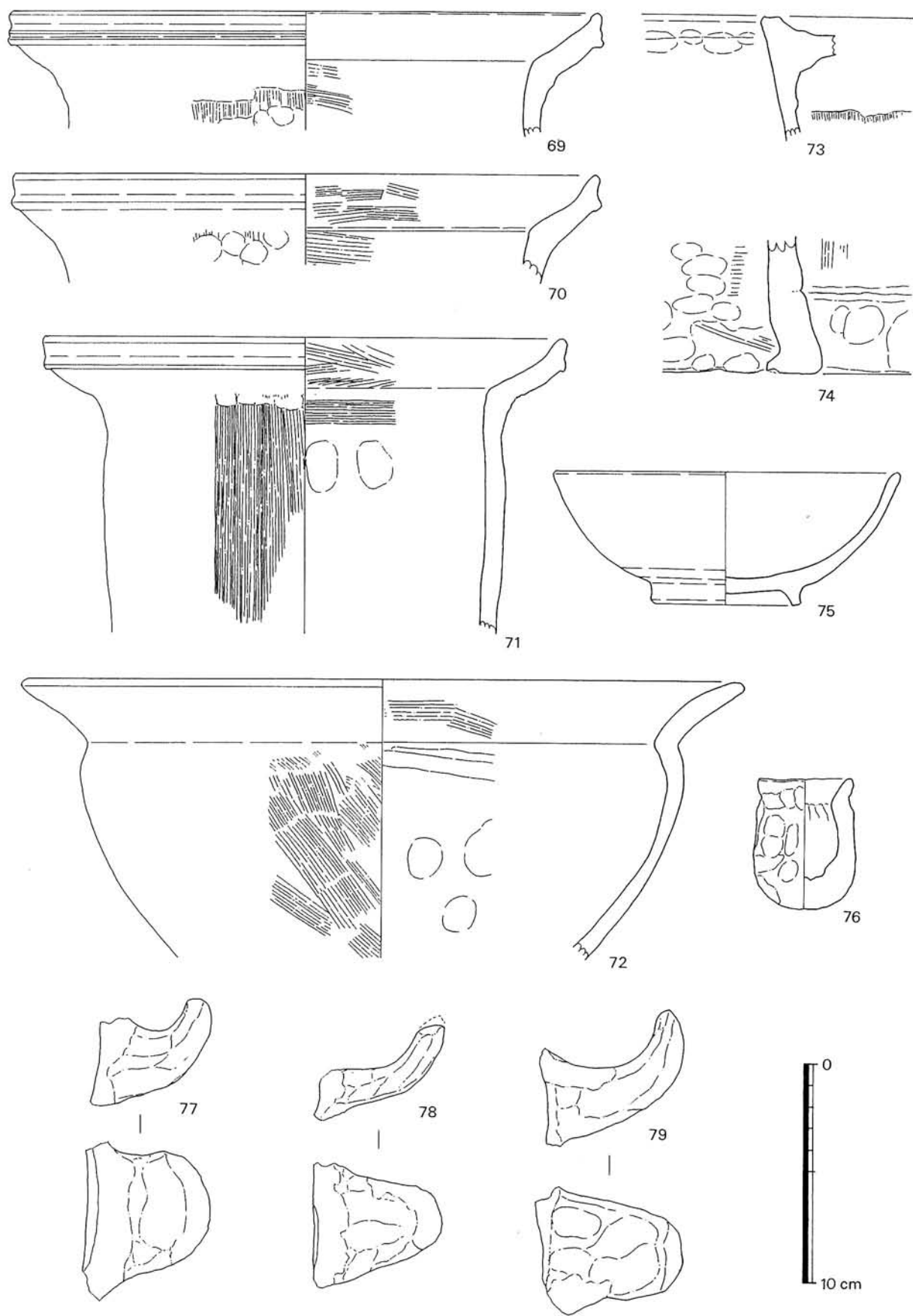
第24図 包含層出土遺物実測図(2) (S = 1 : 3)



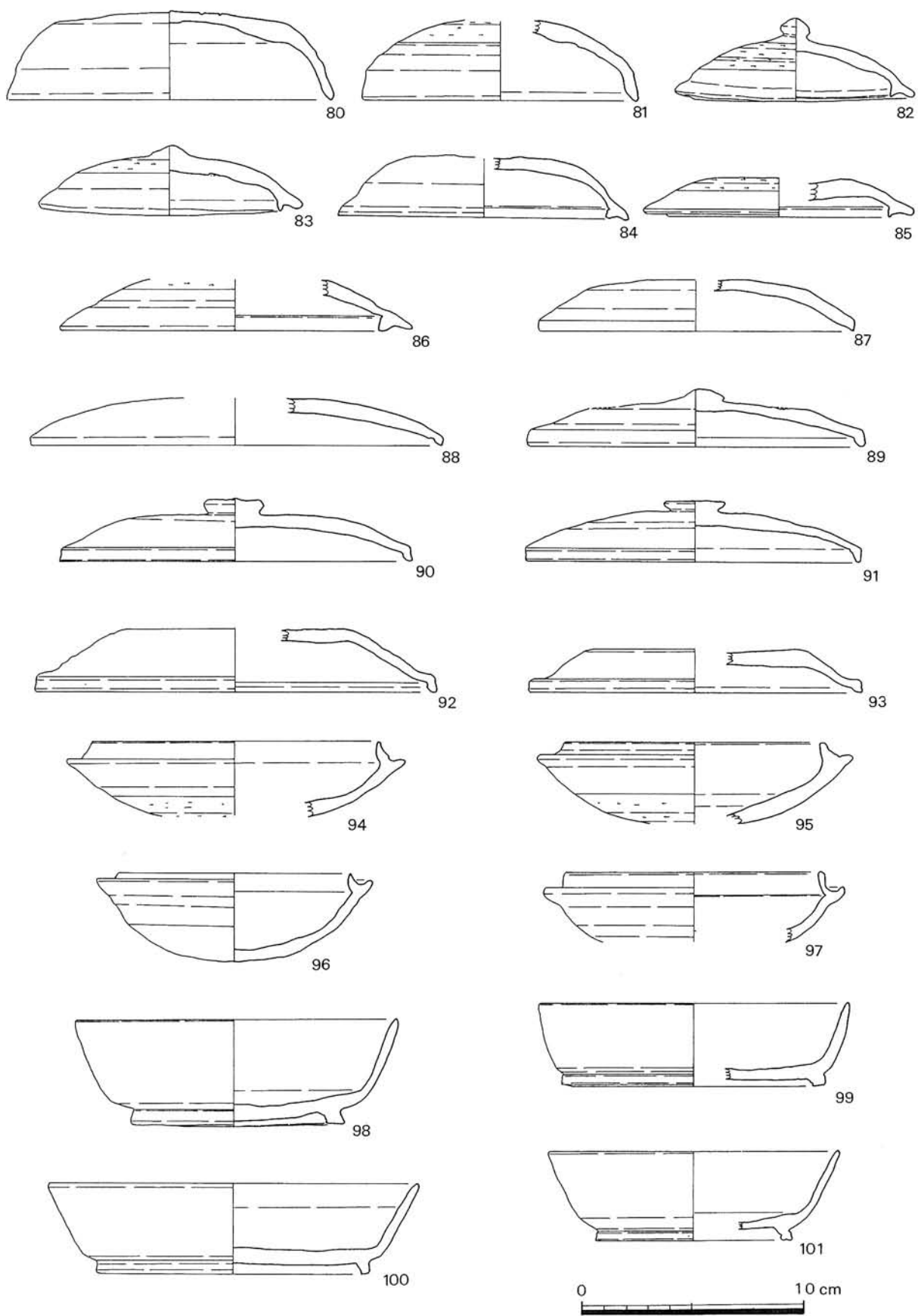
第25図 包含層出土遺物実測図(3) (S = 1 : 3)



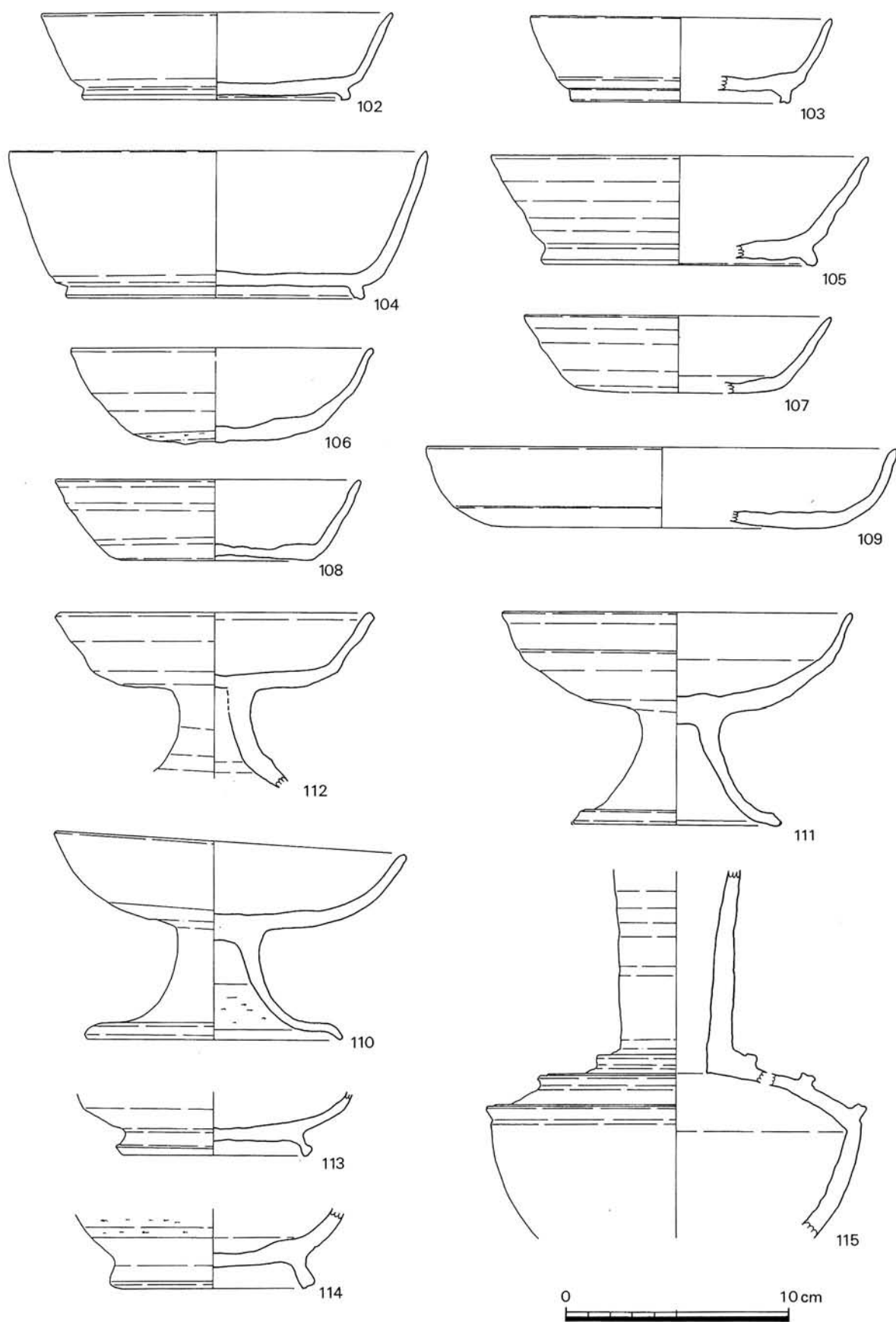
第26図 包含層出土遺物実測図(4) (S = 1 : 3)



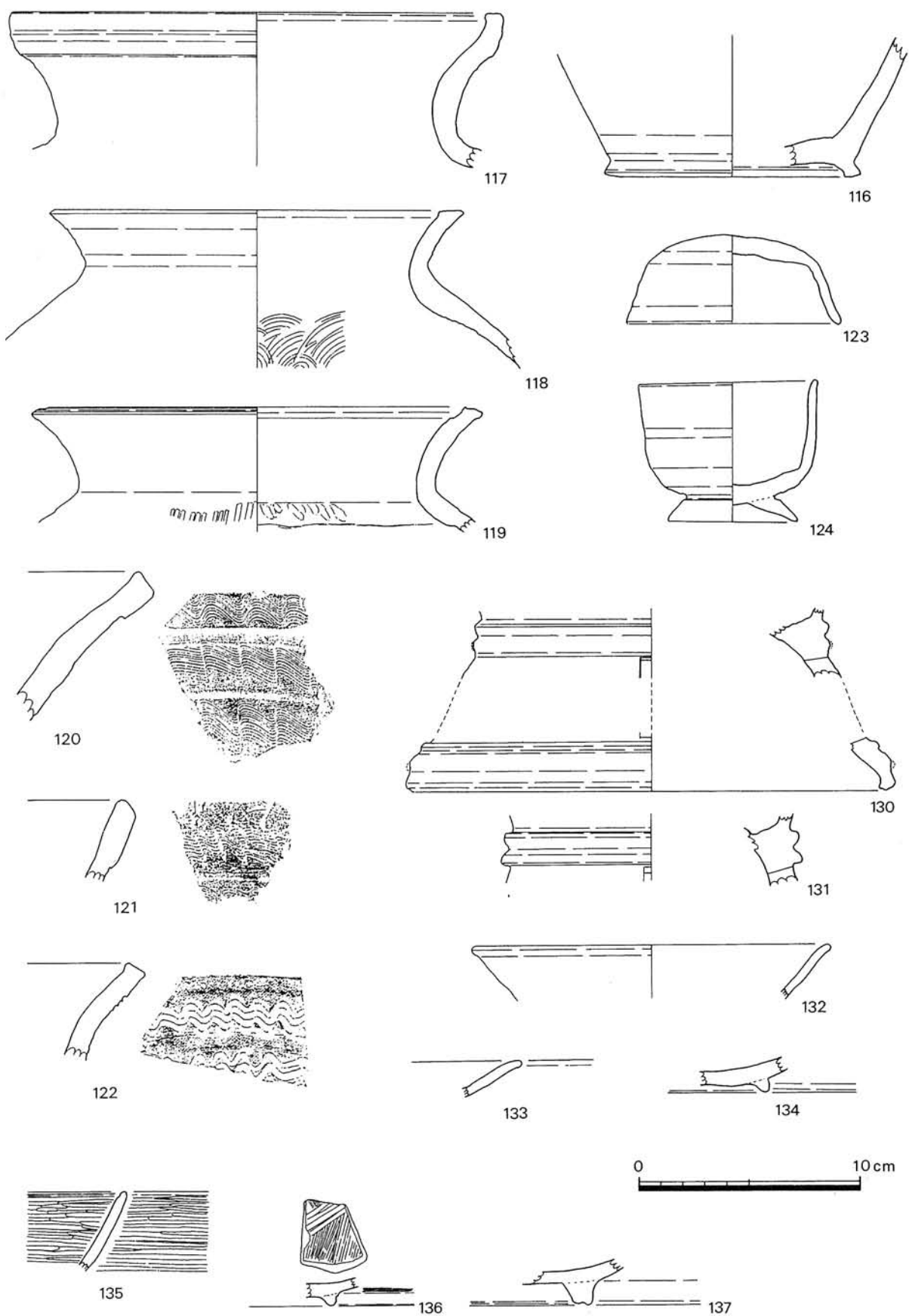
第27図 包含層出土遺物実測図(5) (S = 1 : 3)



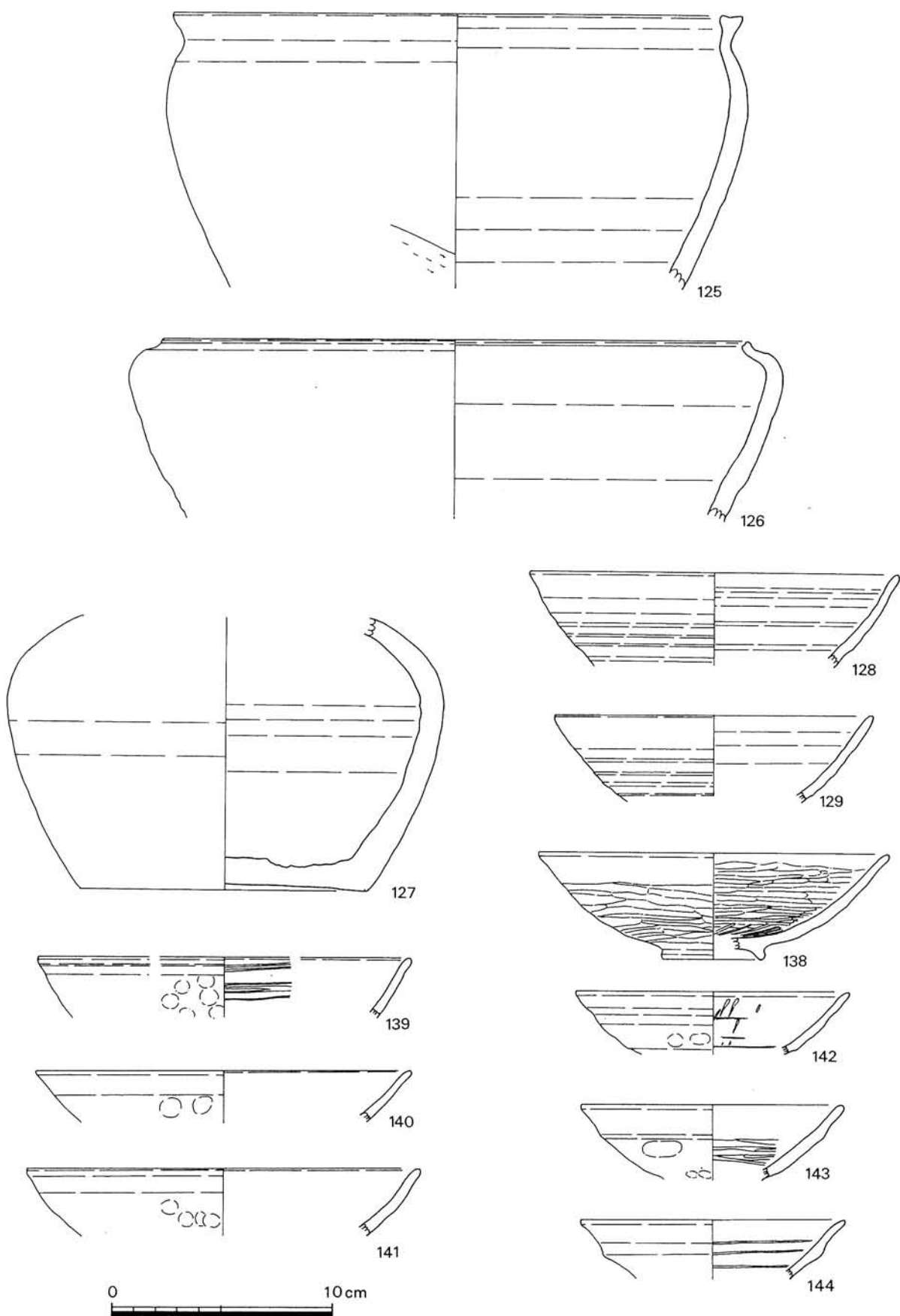
第28図 包含層出土遺物実測図(6) (S = 1 : 3)



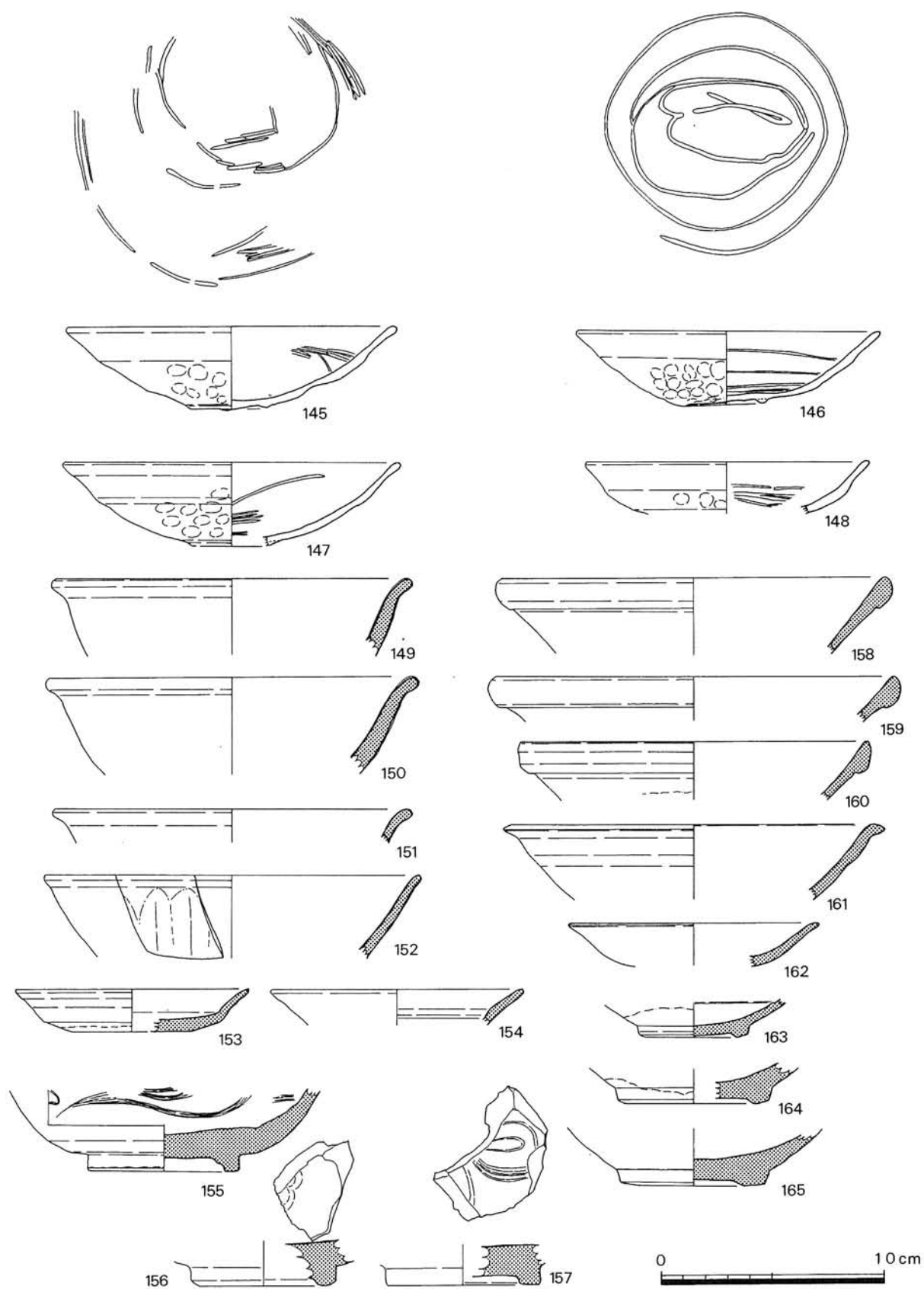
第29図 包含層出土遺物実測図(7) (S = 1 : 3)



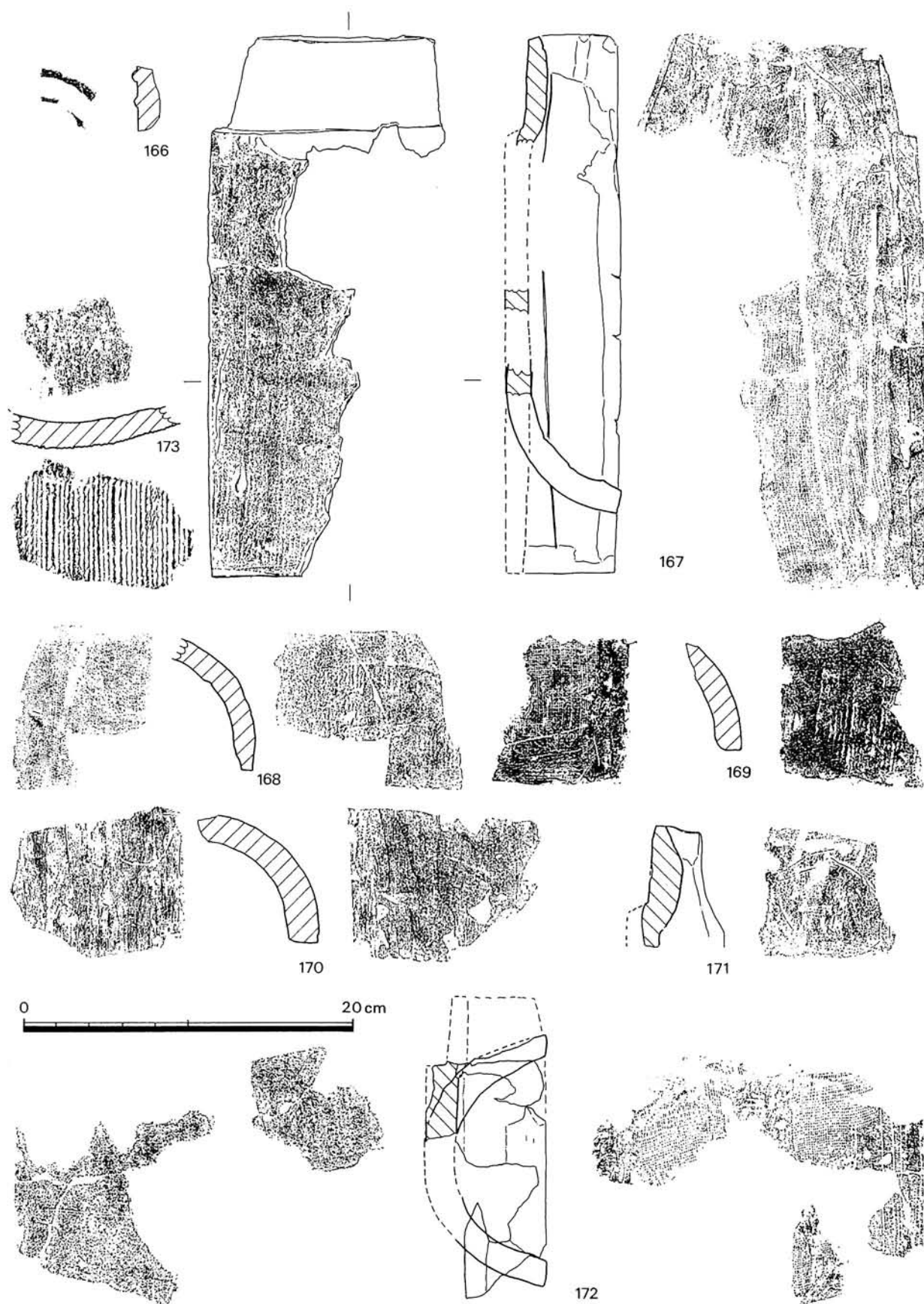
第30図 包含層出土遺物実測図(8) (S = 1 : 3)



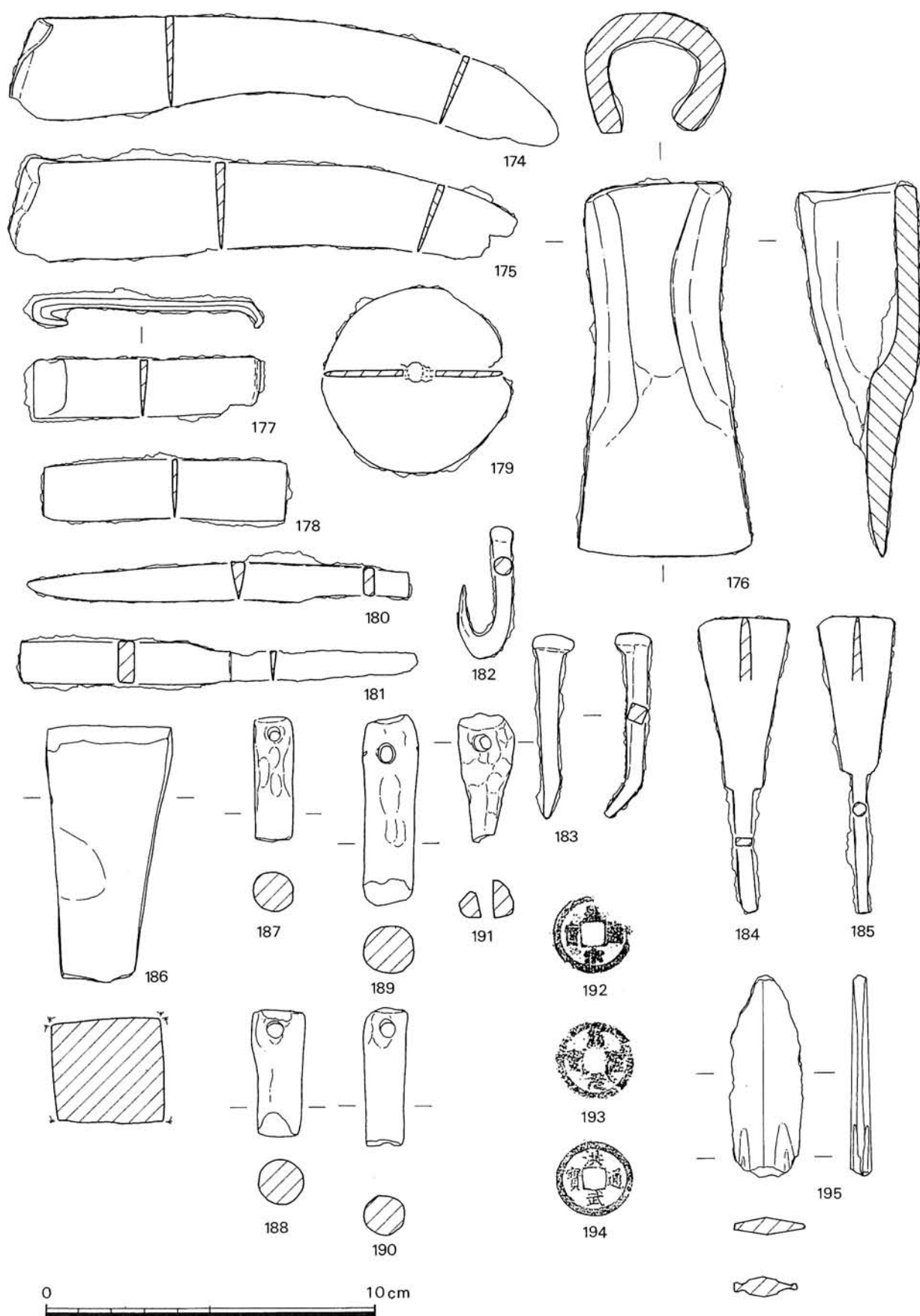
第31図 包含層出土遺物実測図(9) (S = 1 : 3)



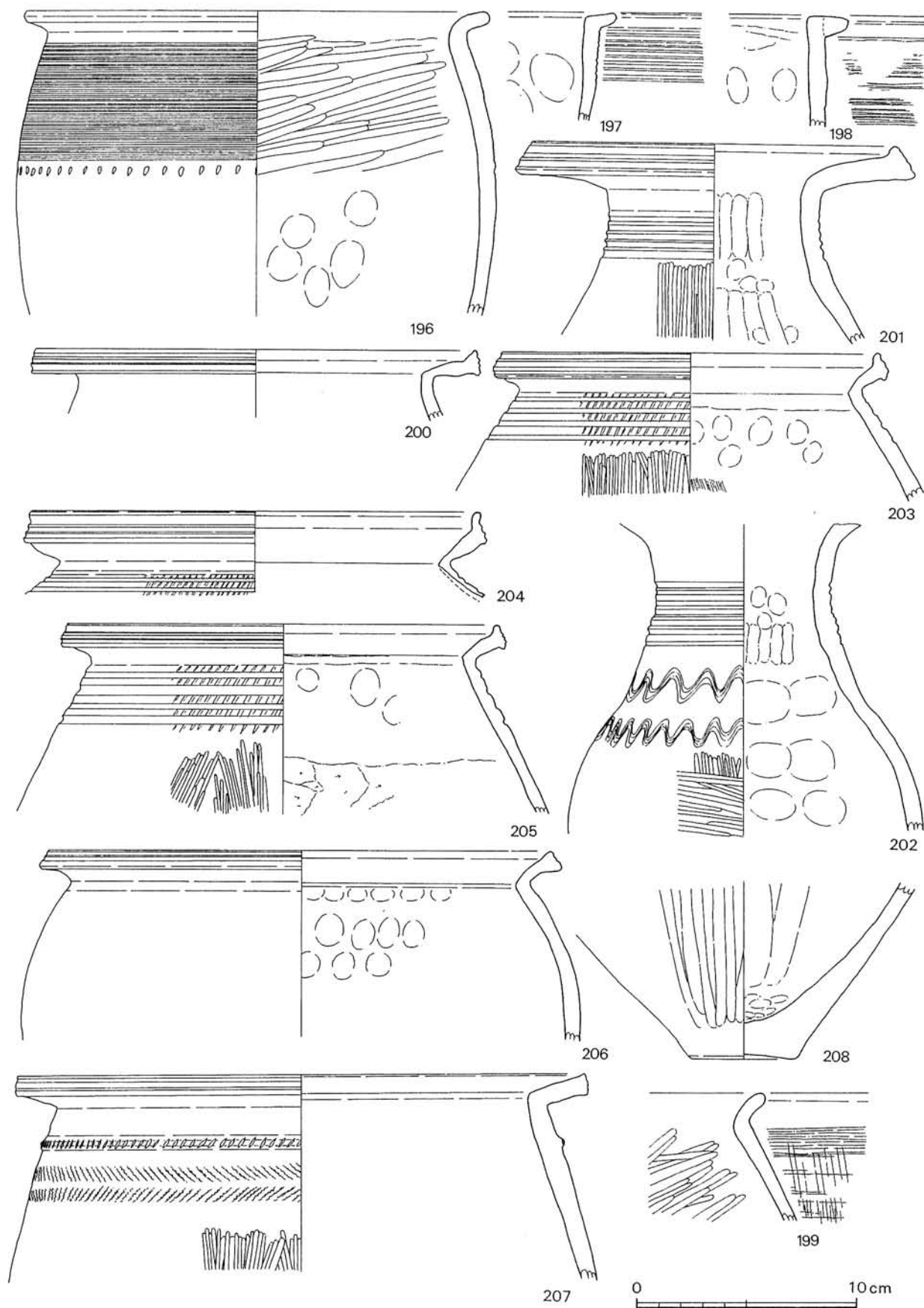
第32図 包含層出土遺物実測図(10) (S = 1 : 3)



第33図 包含層出土遺物実測図(11) (S = 1 : 4)



第34図 包含層出土遺物実測図(12) (S = 1 : 2)



第35図 自然流路出土遺物実測図 (S = 1 : 3)

包含層出土遺物観察表

*土師器類

No.	器種	寸法 (cm)	器形・調整	観 察
30	杯	口径14.6 底径10.6 器高3.1	体部は平坦な底部から緩やかに内彎して立ち上がり，口縁端部は若干外反する。調整は内外面ともナデ。内外には赤色顔料を塗布。	色調 淡橙褐色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
31	杯	口径16.2 底径13.6 器高2.8	体部は平坦な底部から緩やかに内彎して立ち上がり，口縁端部は若干外反する。調整は内外面ともナデ。内外には赤色顔料を塗布。	色調 赤橙褐色 胎土 精良 焼成 やや不良
32	皿	口径18.6 底径14.8 器高2.1	体部平坦な底部から短く緩やかに外彎して立ち上がり，口縁端部は強く外反する。調整は内外面ともナデ。内外には赤色顔料を塗布。	色調 橙褐色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
33	皿	口径17.4 底径14.0 器高1.6	体部は平坦な底部から短く緩やかに外彎して立ち上がり，口縁端部は強く外反する。調整は内外面ともナデ。内外には赤色顔料を塗布。	色調 橙褐色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
34	皿	口径8・3 底径4・7 器高1.85	体部は平坦な底部から内傾して短く立ち上がり，口縁部は尖り気味におわる。底部は糸切り。調整は内外面ともナデ。	色調 黒灰褐色 胎土 細砂粒多 焼成 やや不良
35	皿	口径8.3 底径6.1 器高1.85	体部は平坦な底部から内傾して短く立ち上がり，口縁部は尖り気味におわる。底部は糸切り。調整は内外面ともナデ。	色調 黒灰褐色 胎土 砂粒多 焼成 やや不良
36	碗	口径15.9 底径6.0 器高4.0	体部は緩やかに内彎して立ち上がり，口縁端部は若干外反させ，内面には段をつける。内面に二段の放射状暗文，見込みに螺旋状暗文。調整は外面がヘラミガキ，底部はヘラケズリ。	色調 橙褐色 胎土 精緻 焼成 良好
37	皿	口径16.0 底径9.6 器高2.4	底部は平坦で，体部は外傾してひらき，端部は若干内傾しつつ尖り気味におわる。内面に放射状暗文，見込みに螺旋状暗文。調整は外面がヘラミガキ，底部はヘラケズリ後ナデ。	色調 暗橙褐色 胎土 精緻 焼成 良好
38	皿	口径15.7 底径9・4 器高2・6	体部は内傾して立ち上がり，口縁部は強く外反し，端部は上方へつまみ上げる。内面は放射状の暗文。調整は外面は丁寧なナデ。	色調 暗橙褐色 胎土 精緻 焼成 良好
39	皿	口径25.8 底径13.2 器高3.6	体部は平坦な底部から内彎して短く立ち上がる。口縁部は若干内傾して平坦な面をもっておわる。内面に放射状暗文，見込みに螺旋状暗文。調整は外面は丁寧なナデ，底部はヘラケズリ後ナデ。	色調 暗橙褐色 胎土 精微 焼成 良好

No.	器種	寸法 (cm)	器形・調整	観 察
40	碗		口縁端部は内側に若干肥厚する。内面に二段の放射状暗文。調整は外面がヘラミガキ。	色調 橙褐色 胎土 精緻 焼成 良好
41	碗		口縁端部は内側をくぼませ、肥厚する。内面に螺旋状暗文。調整は外面がヘラミガキ。	色調 暗橙褐色 胎土 精緻 焼成 良好
42	碗		体部は内彎気味に立ち上がり、口縁端部は屈折しながらやや尖り気味におわる。内面に格子状暗文。調整は体部外面下半がヘラミガキ。	色調 暗橙褐色 胎土 精緻 焼成 良好
43	甕	口径26・1 器高30.1 胴径25.1	口縁部が八字状に外反し、端部は内傾する。体部は長胴形を呈し、底部は丸い。調整は、体部外面は粗いハケメ、内面はナデ。口縁部内面に横方向のハケメ。	色調 暗黄褐色 胎土 砂粒多 焼成 良好
44	甕		口縁部が短く八字状に外反する。頸部屈曲部に三条の沈線がめぐり。調整は外面がナデ、内面が体部上半部以下はケズリ。	色調 暗黄褐色 胎土 砂粒多 焼成 良好
45	甕	口径23.8	口縁部がハ字状に外反し、面をもっておわる。端部内側は若干くぼむ。屈曲外面はハケメ調整後二条の強いナデが巡る。調整は体部外面に荒いハケメ、内面には横ナデ。	色調 暗黄褐色 胎土 砂粒僅 焼成 やや不良
46	甕	口径23.0	口縁部がハ字状に外反し若干丸味をもっておわる。調整は、体部外面は縦方向のヘラミガキ、内面はヘラケズリ。	色調 暗橙褐色 胎土 砂粒僅か 焼成 良好
47	甕	口径18.7	口縁部はハ字状に直線的にひらく。体部は直線的な胴部を呈する。調整は、体部外面はハケメ、内面はヘラケズリ。頸部外面付近はヘラ状工具による押圧痕。	色調 黄橙褐色 胎土 砂粒多 焼成 良好
48	甕		口縁部はハ字状に外反し、端部は上方に面をもつ。調整は体部外面が粗いハケメ、内面がナデ。頸部内面には横方向のハケメ。	色調 黒褐色 胎土 砂粒多 焼成 良好
49	甕		口縁部はハ字状に外反し、端部は尖り気味におわる。調整は口縁部・頸部とも内外面横ナデ。	色調 暗黄褐色 胎土 砂粒多 焼成 良好
50	甕	口径11.7	口縁部は短くハ字状に外反し、端部は面をもっておわる。調整は肩部が粗いハケメ、口縁部、体部内面が横ナデ。	色調 淡赤褐色 胎土 砂粒多 焼成 やや不良

No.	器種	寸法 (cm)	器形・調整	観 察
51	甕	口径15.3	口縁部はハ字状に外反し、端部は上方に面をもっておわる。調整は体部外面が粗いハケメ、内面が横ナデ。	色調 橙褐色 胎土 砂粒僅 焼成 良好
52	甕	口径17.3	体部は長胴形を呈する。口縁部はハの字状にひらき、面をもっておわる。調整は体部外面は粗いハケメ、内面はナデ。口縁部内面は横方向のハケメ。	色調 暗橙褐色 胎土 砂粒多 焼成 良好
53	甕	口径18.8	口縁部はハの字状にひらき、面をもっておわる。端部内側は若干内傾する。調整は体部外面が粗いハケメ、内面はナデ。頸部屈曲部内面は横方向のハケメ。	色調 暗黒褐色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
54	甕	口径17.6	口縁部はハ字状にやや直線的にひらき、尖り気味におわる。端部若干外方に屈折する。調整は体部外面が丁寧なナデ、内面にはヘラケズリ。	色調 暗橙褐色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
55	甕	口径18.5	口縁部はハ字状にひらき、上方に面をもっておわる。体部は長胴形を呈する。調整は体部外面が粗いハケメ、内面は横方向の強いナデ。	色調 黒褐色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
56	甕	口径17.6	口縁部はハ字状に外反し、上方に面をもっておわる。上下指で押さえて外側へ肥厚する。頸部内面に明瞭な段を有する。調整は、体部外面が粗いハケメの後ヘラ状工具による縦方向の条痕。内面は横ナデ。	色調 淡橙褐色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
57	甕	口径19.8	体部は長胴形を呈する。口縁部は若干内彎して外上方に伸び、端部はやや外反して尖り気味におわる。胴部との境界は鋭く屈曲し、外面は強くナデて段をなす。調整は体部外面が粗いハケメ、内面はナデ。	色調 黒褐色 胎土 砂粒多 焼成 良好
58	甕	口径19.4	口縁部はハ字状に外反し、上方に面をもつ。調整は口縁部外内面は横ナデ、体部外面にはハケメ。	色調 黒褐色 胎土 砂粒多 焼成 良好
59	甕	口径11.7	口縁部はハ字状にひらき、口縁内側は横方向に肥厚する。調整は体部外面にハケメ。	色調 濃橙褐色 胎土 砂粒多 焼成 良好
60	甕	口径20.2	口縁部は内彎して立ち上がり、端部若干肥厚して面をもっておわる。胴部との境界は鋭く屈曲する。調整は、体部外面は粗いハケメ。内面は頸部付近に横方向のハケメ以外は横ナデ。	色調 暗黄褐色 胎土 砂粒多 焼成 良好

No.	器種	寸法 (cm)	器形・調整	観 察
61	甕	口径29.0	口縁部は内彎して立ち上がり,上方に面をもっておわる。胴部との境界はややゆるく屈曲する。調整は体部外面は粗いハケメ,内面は横ナデ。	色調 橙褐色 胎土 砂粒多 焼成 やや不良
62	甕	口径25.4	口縁部は内彎して立ち上がり,上方に面をもっておわる。胴部との境界は段を有する。調整は体部外面は粗いハケメ,頸部屈曲付近は横方向のハケメ。	色調 暗黒褐色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
63	甕	口径22.0	口縁部は内彎して立ち上がり,端部は若干肥厚して面をもっておわる。胴部との境界は鋭く屈曲する。調整は,体部外面は粗いハケメ,内面には横ナデ。	色調 暗橙褐色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
64	甕	口径22.9 胴最大径21.3	体部は長胴形を呈し,底部付近に胴部最大径がくる。丸底を呈する。口縁部は内彎気味に立ち上がり,上方に面をもっておわる。頸部外面屈曲部は強くナデる。調整は,体部外面は粗いハケメ。口縁部及び頸部内面は横方向のハケメ。体部内面は横ナデ。	色調 黒褐色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
65	甕	口径24.6 胴最大径25.9	体部は長胴形を呈し,底部付近に胴部最大径がくる。丸底を呈する。口縁部は内彎気味に立ち上がり,上方に面をもっておわる。頸部外面屈曲部は強くナデる。調整は体部外面が粗いハケメ。その外は横ナデ。	色調 淡橙褐色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
66	甕	口径12.7 胴最大径15.0	体部は球形を呈する。口縁部は外反して強くひらき,端部は上方につまみあげて面をつくる。その面に一条の沈線がめぐる。調整は体部外面が粗いハケメ,内面は横ナデ。	色調 淡黄褐色 胎土 砂粒僅 焼成 良好
67	高杯 ?	口径17.2	口縁部は強くハ字状にひらく。端部は面をもっておわる。調整は口縁部内面は横方向のハケメ,外面は丁寧なナデ。	色調 暗赤褐色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
68	不明	底径7.6	底部はヘラ切り。調整は外面はナデ,内面は,底部付近はナデ,それ以上はヘラケズリ。	色調 灰褐色 胎土 砂粒僅 焼成 良好
69	甕	口径25.6	体部は長胴形を呈する。口縁部は内傾しながら立ち上がり,端部は上下に拡張して面をもつ。その面には二条の凹線状のものがめぐる。調整は体部外面は粗いハケメの後,頸部に横ナデ。体部内面も横方向のハケメ。	色調 暗褐色 胎土 砂粒僅 焼成 良好

No.	器種	寸法 (cm)	器形・調整	観 察
70	甕	口径25.6	体部は長胴形を呈する。口縁部は内傾しながら立ち上がり、端部は上下に拡張して面をもつ。面は強くナデて、凹線状を呈する。調整は体部外面は粗いハケノの後、頸部に横ナデ。口縁部内面及び体部内面は横方向のハケメ。	色調 暗黄褐色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
71	甕	口径22.6	体部は長胴形を呈する。口縁部は内傾しながら立ち上がり、端部は上下に拡張して面をもつ。面は強くナデて、凹線状を呈する。調整は体部外面は粗いハケメの後、頸部に横ナデ。口縁部内面及び体部内面は横方向のハケメ。	色調 暗褐色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
72	鉢	口径31.4 胴最大径 26.6	口縁部はハの字状につよくひらき、端部はやや尖り気味におわる。胴部との境界は鋭く屈曲し、内面は稜をなす。調整は、体部外面及び口縁部内面はハケメ、その他はナデ。	色調 暗橙褐色 胎土 砂粒多 焼成 良好
73	羽釜		口縁部は僅かに立ち上がり、その直下に鱗状の粘土帯がつく。調整は、体部外面粘土帯下に粗いノハケメ。内面は丁寧なナデ。口縁部はナデ。	色調 黄橙褐色 胎土 精緻 焼成 良好
74	竈		脚部の破片で、接地面は内側に肥厚する。調整は、外面は縦方向のハケメとナデ、内面は横方向のハケメ後指ナデ。接地面はヘラによるナデ。	色調 暗橙褐色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
75	椀	口径15.5 高台径6.2 器高6.1	体部は内彎して立ち上がり、端部は外反する。台形状高台が付く。調整は、内外面ともナデ。底部はヘラ切り後ナデ。	色調 暗乳褐色 胎土 細砂粒僅 焼成 良好
76	手づくね 土器	口径4.0 器高5.8	体部は長胴形を呈し、丸底である。口縁部は、ゆるく外反してハの字状にひらく。調整は、内外面とも強い指ナデ。	色調 淡灰褐色 胎土 細砂粒僅 焼成 良好
77	把手		舌状を呈し、端部はやや丸い。調整は、外面は指ナデ、器種内面はヘラケズリ。	色調 淡黄橙色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
78	把手		舌状を呈し、端部はやや尖り気味におわる。調整は、外面は指ナデ、器種内面はナデ。	色調 暗橙褐色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
79	把手		舌状を呈し、端部はやや尖り気味におわる。調整は、外面は指ナデ、器種内面はナデ。	色調 淡黄褐色 胎土 細砂粒僅 焼成 やや不良

No.	器種	寸法 (cm)	器形・調整	観 察
80	杯蓋	口径14.3 器高3.9	天井部はやや平坦で、口縁部は外反気味にひらき、端部は丸味をもっておわる。調整は、天井部外面はヘラ切り後未調整、内面は横ナデ。その外は内外面とも回転ナデ。	色調 淡黒灰色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
81	杯蓋	口径12.1 器高3.5	天井部は丸味をもつ。口縁部は直立気味にひらき、端部は若干尖り気味におわる。調整は、天井部のヘラケズリは1/2未満、その外は回転ナデ。	色調 暗橙褐色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
82	杯蓋	口径10.5 底径8.3 器高3.65	やや丸味をもった天井部で、宝珠状のつまみがつく。内面には小さい断面三角形のかえりがつく。調整は、天井部外面の約1/2がヘラケズリ、内面は回転ナデ後ナデ仕上げ。その外は回転ナデ。	色調 暗黒灰色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
83	杯蓋	口径11.5 底径9.6 器高*3.05	やや丸味をもった天井部で、宝珠状のつまみがつく。内面には小さい断面三角形のかえりがつく。調整は、天井部外面のヘラケズリは約1/2未満、内面は回転ナデ後ナデ仕上げ。その外は回転ナデ。	色調 暗青灰色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
84	杯蓋	口径12.8 底径11.0 器高2.1	天井部はやや平坦で、口縁部がやや内傾気味ひらく。内面には小さい断面三角形のかえりがつく。調整は、天井部外面はヘラ切り未調整、内面は回転ナデ後ナデ仕上げ。その外は回転ナデ。	色調 暗灰色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
85	杯蓋	口径11.8 底径9.65 器高*1.7	天井部は平坦で、体部へはやや稜をなして移行する。内面には小さい断面三角形のかえりがつくが、口縁部より下方に突出する。調整は、天井部外面の約1/2がヘラケズリ、その外は回転ナデ。	色調 暗黒灰色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
86	杯蓋	口径15.3 底径12.6	やや丸味をもった天井部である。内面には断面三角形のかえりがつく。調整は、天井部外面のヘラケズリは1/2未満、その外は回転ナデ。	色調 淡灰色 胎土 細砂粒多 焼成 やや不良
87	杯蓋	口径13.7 器高*2.3	やや平坦な天井部を呈し、体部へは稜をなさずなだらかに移行する。端部は若干つまみ出して口縁とする。調整は、内外面とも回転ナデ。	色調 淡黄灰色 胎土 細砂粒僅 焼成 やや不良
88	杯蓋	口径18.0 器高*2.1	やや丸味をもった天井部で、なだらかに口縁部へと移行する。口縁は内面を窪ませ、断面鳥嘴状にしている。調整は、天井部内面は回転ナデ後ナデ仕上げ。その外は内外面とも回転ナデ。	色調 暗灰色 胎土 細砂粒多 焼成 良好

No.	器種	寸法 (cm)	器形・調整	観 察
89	杯蓋	口径14.9 器高*2.6	やや平坦な天井部を呈し、体部へは稜をなさずなだらかに移行する。口縁部は断面鳥嘴状を呈する。調整は、内外面とも回転ナデ。表面の磨滅が顕著。	色調 青灰色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
90	杯蓋	口径15.3 器高2.7	やや平坦な天井部を呈し、体部へは稜をなさずなだらかに移行する。口縁部は断面鳥嘴状を呈する。天井部には偏平なつまみがつく。調整は、天井部内面は回転ナデ後ナデ仕上げ。その外内外面とも回転ナデ。	色調 淡灰色 胎土 細砂粒多 焼成 やや不良
91	杯蓋	口径14.8 器高2.8	やや平坦な天井部を呈し、体部へは稜をなさずなだらかに移行する。口縁部は断面鳥嘴状を呈する。天井部には偏平なつまみがつく。調整は、天井部内面は回転ナデ後ナデ仕上げ。その外内外面とも回転ナデ。	色調 青灰色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
92	杯蓋	口径17.4	平坦な天井部をもち、体部はやや稜をなして移行する。口縁部は断面鳥嘴状を呈する。調整は、天井部外面は横ナデ、その外内外面とも回転ナデ。	色調 暗灰色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
93	杯蓋	口径14.6	平坦な天井部をもち、体部はやや稜をなして移行する。口縁部は断面鳥嘴状を呈する。調整は、天井部内面は回転ナデ後ナデ仕上げ、その外は内外面とも回転ナデ。	色調 青灰色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
94	杯身	口径12.5 受径14.8	やや丸味をもった底部をもつ。たちあがりは短く内傾気味で尖る。調整は、底部の約1/2がヘラケズリ、その外は回転ナデ。	色調 暗青灰色 胎土 細砂粒僅 焼成 良好
95	杯身	口径11.2 受径13.8	やや丸味をもった底部をもつ。たちあがりは短く内傾気味で端部は丸くおわる。調整は、底部の約1/2がヘラケズリ、その外は回転ナデ。	色調 灰褐色 胎土 精緻 焼成 やや不良
96	杯身	口径10.0 受径12.0 器高3.9	球形の体部で、たちあがりは短く内傾気味で尖る。調整は、底部内面は横ナデ、外面は粗いナデ。その外は回転ナデ。	色調 濃灰色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
97	杯身	口径11.2 受径13.0	たちあがりは短く、内傾する。端部は尖る。調整は、底部外面は未調整、その外は内外面とも回転ナデ。	色調 暗灰色 胎土 細砂粒僅 焼成 良好
98	杯身	口径14.1 高台径9.2 器高4.7	底部は平坦で体部との境界には明瞭な稜をもつ。その内側にはやや外びらきの断面台形の高台がつく。体部は外反気味に立ち上がり、端部は尖り気味におわる。調整は底部は未調整、その外は回転ナデ。	色調 淡青灰色 胎土 細砂粒多 焼成 良好

No.	器種	寸法 (cm)	器形・調整	観 察
99	杯身	口径3.6 高台径11.5 器高3.65	底部は平坦で体部との境界には明瞭な稜をもつ。その内側にはやや外びらきの断面台形の高台がつく。体部は内彎気味に立ち上がり、端部は尖り気味におわる。調整は底部はヘラケズリ、内面は横ナデ、その外は回転ナデ。	色調 暗灰色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
100	杯身	口径16.0 高台径11.8 器高4.0	底部は平坦で体部との境界には明瞭な稜をもつ。その内側にはやや外びらきの断面台形の高台がつく。体部は外反気味に立ち上がり、端部は尖り気味におわる。調整は底部はヘラケズリ、その外は回転ナデ。	色調 暗灰色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
101	杯身	口径12.8 高台径8.6 器高3.95	底部は平坦で体部との境界には明瞭な稜をもつ。その内側にはやや外びらきの断面台形の高台がつく。体部は外反気味に立ち上がり、端部は尖り気味におわる。調整は底部はヘラ切り後ナデ、その外は回転ナデ。	色調 暗灰色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
102	杯身	口径15.1 高台径3.8 器高11.6	底部は平坦で体部との境界には明瞭な稜をもつ。その内側にはやや外びらきの断面台形の高台がつく。体部は外反気味に立ち上がり、端部は尖り気味におわる。調整は底部はヘラケズリ、その外は回転ナデ。	色調 淡灰色 胎土 細砂粒多 焼成 やや不良
103	杯身	口径13.1 高台径9.6 器高3.75	底部は平坦で体部との境界には明瞭な稜をもつ。直立気味の断面台形の高台がつく。体部は高台から張出し稜をつくる。体部は内彎気味に立ち上がり、端部は尖り気味におわる。調整は底部はヘラ切り後ナデ、その外は回転ナデ。	色調 淡灰色 胎土 細砂粒住 焼成 良好
104	杯身	口径18.2 高台径13.0 器高6.5	底部にヘラ記号あり。底部は平坦で体部との境界には明瞭な稜をもつ。その内側にはやや外びらきの断面台形の高台がつく。体部は内彎気味に立ち上がり、端部は尖り気味におわる。調整は底部はヘラ切り後未調整、その外は回転ナデ。	色調 暗灰色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
105	杯身	口径16.4 高台径12.0 器高4.85	底部は平坦で、体部との境界には明瞭な稜をもつ。その直下に外びらきの断面三角形の高台がつく。体部は内彎気味に立ち上がり、端部は尖り気味におわる。調整は底部はヘラ切り後未調整、内面は横ナデ。その外は回転ナデ。	色調 淡黒灰色 胎土 細砂粒僅 焼成 やや不良
106	椀	口径12.8 器高4.2	底部はやや丸味をもつ。口縁部は外反気味にひらき、端部は丸味をもっておわる。調整は、底部はケラケズリ後軽いナデ、その他は回転ナデ。	色調 青灰色 胎土 細砂粒多 焼成 良好

No.	器種	寸法 (cm)	器形・調整	観 察
107	椀	口径13.7 底径8.7 器高3.1	底部は平坦で体部は直線的に外反しながら立ち上がる。調整は底部はヘラ切り後横ナデ，その外内外面とも回転ナデ。	色調 暗灰色 胎土 微砂粒多 焼成 良好
108	椀	口径13.8 底径8.7 器高3.7	底部は平坦で体部は直線的に外反しながら立ち上がる。口縁部はやや尖り気味におわる。調整は底部はヘラ切り後横ナデ，その外内外面とも回転ナデ。	色調 淡灰色 胎土 精緻 焼成 良好
109	皿	口径20.5 底径14.7 器高3.5	底部はやや平坦で体部は内彎して，直立気味に立ち上がる。調整は底部は外面はヘラ切り後ナデ，内面は横ナデ。体部内外面は回転ナデ。	色調 暗灰色 胎土 精緻 焼成 良好
110	高杯	口径15.1 脚径11.0 器高8.7	杯部は丸みをもった底部をもち，体部は内彎して立ち上がる。脚部はハの字状に強くひらき，端部は鳥嘴状を呈す。調整は杯部の底部はヘラケズリ，その外は回転ナデ。脚部内面は上半はナデ，下半はヘラケズリ。端部内面及び外面は回転ナデ。	色調 淡灰色 胎土 細砂粒僅 焼成 良好
111	高杯	口径15.0 脚径9.1 器高9.4	杯部は丸みをもった底部をもち，体部は内彎して立ち上がる。脚部はハの字状に強くひらき，端部は鳥嘴状を呈す。調整は杯部の内外面は回転ナデ。底部内面は横ナデ。脚部は内外面とも回転ナデ。	色調 淡灰色 胎土 精緻 焼成 良好
112	高杯	口径13.5	底部はやや平坦で体部は直線的に外反しながら立ち上がる。脚部はハの字状に強くひらく。調整は杯部の内外面とも回転ナデ，脚部は外面は回転ナデ，内面はナデ。	色調 暗青灰色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
113		高台径7.8	ハの字状にひらくやや細めの高台が付く。体部は内彎気味に立ち上がり，若干屈折する。調整は底部内面は横ナデ，外面はナデ。体部外面は回転ナデ。底部と高台との境にヘラ状工具によるキズ(?)が巡る。	色調 暗青灰色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
114		高台径7.9	ハの字状にひらくやや長めの高台が付く。体部は内彎気味に立ち上がる。調整は体部外面はヘラケズリ。底部内外面及び体部内面は回転ナデ。	色調 暗青灰色 胎土 細砂粒僅 焼成 やや不良

No.	器種	寸法 (cm)	器形・調整	観 察
115	長頸壺	胴最大径 16.0	体部はくの字状を呈する。なだらかな肩部から頸部までに三条の凸帯を貼り付ける。頸部はやや直立気味に立ち上がる。調整は、体部下半外面はタタキ後横ナデ、内面は回転ナデ。頸部外面はカキメ後間隔をおいて横ナデ、内面は横ナデ。	色調 暗青灰色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
116	壺	高台径11.2	ハの字状にひらく高台がつき、体部は上方に直線的に立ち上がる。調整は底部はヘラ切り、体部内外面とも回転ナデ。	色調 青灰色 胎土 精緻 焼成 良好
117	甕	口径22.0	口縁部は口縁端部が直立して外側に面をもたせる、いわば複合口縁状を呈する。調整は底部はヘラ切り後横ナデ、その外内外面とも回転ナデ。	色調 青灰色 胎土 精緻 焼成 良好
118	甕	口径17.7	口縁部はハの字状に外反し、端部は上方に面をもつ。調整は口縁部は内外面回転ナデ、体部外面はタタキ後スリケシ、内面は青海波文。	色調 黒灰色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
119	甕	口径15.1	口縁部はハの字状に外反し、端部は上方に面をもつ。口縁端部内面は強くナデてへこむ。調整は口縁部内外面とも回転ナデ、肩部外面は平行タタキ、内面はナデ。	色調 暗灰色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
120	甕		口縁端部が肥厚する。口縁部外面に二条及び肥厚部に一条、櫛歯状工具による波状文がめぐる。調整は内面は横ナデ。	色調 淡灰色 胎土 精緻 焼成 良好
121	甕		口縁端部が肥厚する。口縁部外面及び肥厚部に櫛歯状工具による波状文がめぐり、端部上面には櫛歯状工具の列点文。調整は内面は回転ナデ。	色調 黒灰色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
122	甕	高台径7.8	口縁端部は肥厚しない。外面には相い櫛歯状工具による波状文がめぐる。調整は内面は回転ナデ。	色調 暗黒灰色 胎土 精緻 焼成 良好
123	蓋	高台径7.9	やや丸みをもった天井部をもち口縁部は外反気味にひらく。調整は天井部はヘラ切り未調整、その外は回転ナデ。	色調 暗青灰色 胎土 細砂粒僅 焼成 やや不良
124	脚付杯	口径7.8 脚径5.7 器高6.1	杯体部は直立して立ち上がる。脚部はハの字状に強くひらき、端部は尖る。調整は、杯部内外面とも回転ナデ、脚部は内外面とも回転ナデ。底部は未調整。	色調 暗青灰色 胎土 細砂粒多 焼成 良好

No.	器種	寸法 (cm)	器形・調整	観 察
125	甕	口径23.0	頸部くびれから口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は内外に肥厚する。調整は体部下部はヘラケズリ、その外内外面とも回転ナデ。	色調 暗灰色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
126	甕	口径25.6	短い肩部からわずかに上方につまみあげて口縁とする。調整は外面は回転ナデ、内面は口縁部は回転ナデ、その外は横ナデ。	色調 青灰色 胎土 精緻 焼成 良好
127	壺	底径12.7 胴最大径19.3	底部は平坦で、胴張りの体部を呈す。調整は底部は末調整、体部外面はヘラ成形後ナデ、内面は底部ともナデ。	色調 黒灰色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
128	杯	口径16.8	口縁部はハの字状に外反し、端部は尖り気味におわる。調整は内外面とも回転ナデ。	色調 暗青灰色 胎土 精緻 焼成 良好
129	杯	口径14.6	口縁部はハの字状に外反し、端部は尖り気味におわる。調整は内外面とも回転ナデ。	色調 暗青灰色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
130	硯	脚径20.6	脚部上端及び下端にそれぞれ二条の凸帯がめぐる。長方形の透かしが入る。陸部は欠損し、海部のみ遺存。調整は外面は回転ナデ、内面は横ナデ。	色調 青灰色 胎土 精緻 焼成 良好
131	硯		形態的には129と同一。脚部上端部に二条の凸帯がめぐる。長方形の透かしが入る。調整は外面は同転ナデ、内面は横ナデ。	色調 淡青灰色 胎土 精緻 焼成 良好

＊緑釉陶器

No.	器種	寸法 (cm)	器形・調整	観 察
132	椀	口径7.8	胎土は土師質。口縁はハの字状にひらく。調整は内外面ともナデ。	色調 淡緑灰色 胎土 精緻 焼成 良好
133	皿		胎土は土師質。口縁は強く外反する。調整は内外面ともナデ。	色調 淡緑灰色 胎土 精緻 焼成 良好
134	椀		胎土は須恵質。短い断面台形状の高台が付く。調整は内外面とも回転ナデ。	色調 淡緑灰色 胎土 精緻 焼成 良好

＊黒色土器

No.	器種	寸法 (cm)	器形・調整	観 察
135	椀		内外面とも黒色化するいわゆるB類。口縁部はハの字状に外反する。端部は尖り気味におわり，内側は一条の沈線がめぐる。内外面とも平行の緻密なヘラミガキ痕が見られる。	色調 黒色 胎土 精緻 焼成 良好
136	椀		内外面とも黒色化するいわゆるB類。やや断面三角形の高台が付く。内面は緻密なヘラミガキの上にさらにそれに直行する粗いヘラミガキが施される。	色調 黒色 胎土 精緻 焼成 良好
137			内面黒色化する，いわゆるA類。やや大きめの内側に段を持つ高台が付く。外面はナデ，内面はヘラミガキ。	色調 外黒褐色 内黒色 胎土 精緻 焼成 良好

＊緑釉陶器

No.	器種	寸法 (cm)	器形・調整	観 察
138	椀	口径15.4 高台径4.4 器高4.7	体部は内彎気味に立ち上がり，端部は若干外反する。ややひらき気味の高台が付く。口縁部内外面はナデ整形後未調整。体部内外面はやや緻密なヘラミガキ。	色調 黒灰色 胎土 精緻 焼成 良好
139	椀		口縁部はハの字状に外反し，端部は若干外反する。調整は内面は回転ナデ後螺旋状の暗文，外面はナデ。	色調 暗灰色 胎土 精緻 焼成 良好
140	椀	口径16.4	口縁部はハの字状に外反し，端部は若干尖る。口縁部外面及び体部内面は回転ナデ。体部外面は横ナデ。	色調 黒灰色 胎土 精緻 焼成 良好
141	椀	口径17.2	口縁部はハの字状に内彎しながら立ち上がり，端部は若干外反する。調整は口縁部外面及び体部内面は回転ナデ。体部外面は横ナデ。	色調 黒灰色 胎土 細砂粒僅 焼成 不良
142	椀	口径12.1	口縁部はハの字状に内彎しながら立ち上がり，端部は尖り気味におわる。体部外面に稜をもち，それより口縁部外面及び内面は回転ナデ後，内面に螺旋状の暗文。体部下半は横ナデ。	色調 黒灰色 胎土 精緻 焼成 良好
143	椀	口径11.6	口縁部はハの字状に内彎しながら立ち上がり，端部は尖り気味におわる。体部外面に稜をもち，それより口縁部外面及び内面は回転ナデ後，内面に螺旋状の暗文。体部下半は横ナデ。	色調 暗黒灰色 胎土 精緻 焼成 良好

No.	器種	寸法 (cm)	器形・調整	観 察
144	椀	口径11.6	口縁部はハの字状に内彎しながら立ち上がり、端部は尖り気味におわる。体部外面に稜をもち、それより口縁部外面及び内面は回転ナデ後、内面に螺旋状の暗文。体部下半は横ナデ。	色調 淡黄灰色 胎土 精緻 焼成 良好
145	椀	口径14.4 高台径3.3 器高3.6	体部は内彎気味に立ち上がる。体部上半は回転ナデ。内面は回転ナデ後螺旋状の暗文。体部外面下半は横ナデ。	色調 暗黒灰色 胎土 精緻 焼成 良好
146	椀	口径13.1 高台径3.5 器高3.2	体部は内彎気味に立ち上がる。体部上半は回転ナデ。内面は回転ナデ後螺旋状の暗文。体部外面下半は横ナデ。	色調 暗黒灰色 胎土 精緻 焼成 良好
147	椀	口径14.7 高台径3.4 器高3.6	体部は内彎気味に立ち上がる。体部上半は回転ナデ。内面は回転ナデ後螺旋状の暗文。体部外面下半は横ナデ。	色調 青灰色 胎土 精緻 焼成 良好
148	椀	口径12.4	口縁部はハの字状に内彎しながら立ち上がり、端部は丸味をもつ。体部外面に稜をもち、それより口縁部外面及び内面は回転ナデ後、内面に螺旋状の暗文。体部下半は横ナデ。	色調 暗青灰色 胎土 精緻 焼成 良好

＊緑釉陶器

No.	器種	寸法 (cm)	器形・調整	観 察
149	青磁 椀	口径15.8	体部は内彎気味に立ち上がり、端部は外に屈曲する。	色調 灰緑色 胎土 精緻 焼成 良好
150	青磁 椀	口径16.4	体部は内彎気味に立ち上がり、端部は外に屈曲する。	色調 黒灰色 胎土 精緻 焼成 良好
151	青磁 椀	口径15.4	口縁端部は外に屈曲する。	色調 濃緑色 胎土 精緻 焼成 良好
152	青磁 椀	口径16.3	体部はハの字状に内彎しながら立ち上がり、端部は若干外反する。体部外面に陽刻蓮弁文。	色調 濃青緑色 胎土 精緻 焼成 良好
153	青磁 皿	口径10.1 高台径5.0 器高1.9	平坦な底部から体部は内彎して立ち上がり、一旦内に屈折させて、口縁部は外反して尖り気味におわる。体部下半から底部外面は無釉。	色調 濃緑灰色 胎土 精緻 焼成 良好

No.	器種	寸法 (cm)	器形・調整	観 察
154	青磁 皿	口径10.8	口縁部はハの字状に外反しながら立ち上がる。	色調 緑灰色 胎土 精緻 焼成 良好
155	青磁 碗	高台径6.4	ケズリ成形の高台から内彎して立ち上がる体部がつく。外面はに陰刻の波文。底部外面は無釉，その外は釉薬を施す。	色調 濃緑色 胎土 精緻 焼成 良好
156	青磁 碗	高台径6.6	ケズリ成形の高台。見込みに陰刻文様。底部外面は無釉，その外は釉薬を施す。	色調 暗緑色 胎土 精緻 焼成 良好
157	青磁 碗	高台径5.3	ケズリ成形の高台。見込みに陰刻文様。底部外面は無釉，その外は釉薬を施す。	色調 濃緑色 胎土 精緻 焼成 良好
158	白磁 碗	口径16.8	玉縁の口縁部。	色調 暗灰色 胎土 精緻 焼成 良好
159	白磁 碗	口径17.2	玉縁の口縁部。	色調 暗緑灰色 胎土 精緻 焼成 良好
160	白磁 碗	口径15.6	玉縁の口縁部。体部下半は無釉。	色調 淡灰色 胎土 精緻 焼成 良好
161	白磁 碗	口径15.4	口縁端部を外側に屈折させ，鳥嘴状を呈する。	色調 淡灰色 胎土 精緻 焼成 良好
162	白磁 皿	口径11.0	体部は内溝気味に立ち上がり，口縁部は外反する。見込みと体部との境に明瞭な段をつける。	色調 暗灰色 胎土 精緻 焼成 良好
163	白磁 碗	高台径4.6	断面台形の高台を呈する。内面は体部と見込みとの境に明瞭な段をつける。体部外面下半は無釉。	色調 暗灰色 胎土 精緻 焼成 良好
164	白磁 碗	高台径6.6	断面台形の高台を呈する。高台は無釉。	色調 暗灰色 胎土 精緻 焼成 良好
165	白磁 碗	高台径6.2	断面台形の高台を呈する。高台は無釉。	色調 暗灰色 胎土 精緻 焼成 良好

* 瓦類

No.	器種	寸法 (cm)	器形・調整	観 察
166	軒丸瓦		重圈文	色調 暗黒灰色 胎土 精微 焼成 良好
167	丸瓦	全長33.1 幅現9.3 器高7.0 玉縁長5.4	玉縁は完存するが、体部は半分欠損する。凹面は布目痕、凸面は縦方向の縄タタキメが残るが、全体的に磨り消す。	色調 暗黒灰色 胎土 精緻 焼成 良好
168	丸瓦		凹面は布目痕、凸面は縦方向の縄タタキメが残るが、全体的に磨り消す。	色調 暗黒灰色 胎土 精微 焼成 良好
169	丸瓦		凹面は布目痕、凸面は縦方向の縄タタキメが残るが、全体的に磨り消す。	色調 淡灰色 胎土 細砂粒多 焼成 やや不良
170	丸瓦		凹面は布目痕、凸面は縦方向の縄タタキメのち、ヘラ状工具によるミガキ。	色調 淡灰色 胎土 精緻 焼成 良好
171	丸瓦		玉縁の破片。凹面は布目痕がのこる。	色調 淡灰褐色 胎土 細砂粒僅 焼成 不良
172	丸瓦	全長 幅15.2 器高7.35	玉縁は欠損するが、基部付近の破片である。凹面は布目痕、凸面は縦方向の縄タタキメが残るが、全体的に磨り消す	色調 淡黄灰色 胎土 細砂粒僅 焼成 不良

* 緑釉陶器

No.	器種	寸法 (cm)	器形・調整	観 察
174	鎌	全長16.7 刃幅2.3	基部折返し方向は、刃先部を左側に置いた場合、手前になる。湾曲の緩い、直刃に近い形態を示す曲刃鎌。	49. 5g
175	鎌	全長15.1 刃幅2.2	基部折返し方向は、刃先部を左側に置いた場合、手前になる。湾曲の緩い、直刃に近い形態を示す曲刃鎌。	54. 3g
176	斧	全長11.6 刃幅5.3 袋幅4.3	いわゆる袋状鉄斧。	339. 4g

No.	器種	寸法 (cm)	器形・調整	観 察
177	摘鎌	全長7.3 幅1.8	両短辺を1.5cm折り曲げ、木の柄を受ける構造。折返し部は片方は欠損する。	16・3g
178	摘鎌	現存長7.6 幅2.2	鉄錆のため、両短辺の遺存状況は不明。177と同様、背の長辺を木の柄に挟み込む構造か？	13・8g
179	紡錘車	径5.6 円孔径0.6	円盤のみ遺存している。	23・4g
180	刀子	全長11.8 刃長8.9 刃幅1.15		16・1g
182	釣針	全長4.6 幅0.6	鉤は欠損している。	4・5g
183	釘	全長5.75 幅0.5	頭部は叩き延ばして折り曲げてつくる。先端部は屈折する。	8・0g
184	鋏	全長9.15 鋏長5.3 刃幅2.8	いわゆる平根鋏。	22・2g
185	鋏	全長9.3 鋏長4.8 刃幅2.4	いわゆる平根鋏。	21・1g

* 土製品

No.	器種	寸法 (cm)	器形・調整	観 察
189	錘	現存長5.7 幅1.7 孔径0.5	いわゆる円棒式。半部分は欠損する。両端に円孔を穿つ。円孔部画側には紐の圧痕跡が観察できる。	色調 黄橙褐色 胎土 雲母含 焼成 良好
190	錘	現存長4.2 幅1.2 孔径0.5	いわゆる円棒式。半部分は欠損する。両端に円孔を穿つ。	色調 淡黄灰色 胎土 精緻 焼成 良好
191	錘	現存長3.6 幅1.6 孔径0.6	いわゆる円棒式であるが、やや偏平気味で中央部はすぼむ。半部分は欠損する。両端に円孔を穿つ。	色調 暗黄褐色 胎土 精緻 焼成 良好

自然流路出土遺物観察表

* 弥生土器

No.	器種	寸法 (cm)	器形・調整	観 察
196	甕	口径21.0 胴最大径 22.1	倒鐘状の体部をもち、口縁はいわゆる如意形口縁である。頸部下には櫛歯状工具による条線文がめぐり、下端には楕円形の列点文を施す。体部内面上方は、ヘラナデ、下方はナデ。	色調 暗黄褐色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
197	甕		逆「L」字状の口縁をもつ。頸部下には櫛歯状工具による条線文がめぐる。体部内面上方はナデ。	色調 橙褐色 胎土 精緻 焼成 良好
198	甕		逆「L」字状の口縁をもつ。頸部下には櫛歯状工具による条線文がめぐる。体部内面上方はナデ。	色調 淡緑灰色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
199	壺		口縁は、短く「く」の字状に外反する。体部外面は、横方向のハケメののち縦方向の粗いハケメ。内面はヘラミガキ。	色調 黄橙色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
200	甕	口径20.0	口縁部はつよく逆「L」字状に外反し、端部は肥厚する。口縁部には3条の凹線文を施す。内外面ともナデ。	色調 黒褐色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
201	壺	口径16.5	頸部は直立して上方で外反し、口縁端部は肥厚する。頸部に5条、また口縁部には3条の凹線文を施す。体部外面は縦方向のヘラミガキ、その外はナデ。	色調 暗黄褐色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
202	壺	胴最大径 16.2	胴部が球体状に張るもので、内傾する肩部に頸部はやや直立すし、つよく外反する口縁がつく。頸部に8条の凹線文、肩部には櫛歯状工具による2段の波状文を施す。胴部外面は縦方向のヘラミガキののち横方向のヘラミガキ。内面はナデ。	色調 黄橙褐色 胎土 細砂粒僅 焼成 良好
203	甕	口径17.2	口縁端部を拡張し、3条の凹線文を施す。肩部には斜め方向のヘラ描き文ののち、4条の凹線文を施す。体部外面は縦方向のヘラミガキ、内面上方はナデ、下方はノハケメ。	色調 暗黄褐色 胎土 細砂粒僅 焼成 良好
204	甕	口径20.4	口縁端部を上方に拡張し、3条の凹線文を施す。肩部には斜め方向のヘラ描き文ののち、4条の凹線支を施す。体部内面上方はナデ。	色調 暗黄褐色 胎土 細砂粒僅 焼成 良好

No.	器種	寸法 (cm)	器形・調整	観 察
205	甕	口径19.4	口縁端部を拡張し、3条の凹線文を施す。肩部には斜め方向のヘラ描き文のち、4条の凹線文を施す。体部外面は縦方向のヘラミガキ、内面上方はナデ、下方はヘラケズリ。	色調 暗黄褐色 胎土 精緻 焼成 良好
206	甕	口径22.9	やや肩のはった体部を呈し、くの字状にひらく口縁端部には3条の凹線文を施す。内外面ともナデ。	色調 暗黄褐色 胎土 細砂粒僅 焼成 良好
207	甕	口径25.9	口縁部はくの字状に外反し、胴部はやや張る。口縁端部は2条の凹線文を施す。頸部下には、その上に刻自をもつ貼付凸帯がつく。その下には、二枚貝の複縁を利用した刺突文が横ハの字状にめぐる。体部外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデ。	色調 暗茶褐色 胎土 細砂粒多 焼成 良好
208	甕	底径4.6	ややあげ底である。外面は縦方向のヘラナデ、内面は指ナデ。	色調 黄褐色 胎土 細砂粒多 焼成 良好

IV ま と め

調査の結果、古代及び中世の時期の遺構と、縄文時代から中世にかけての遺物が検出された。古代の遺構では、掘立柱建物跡8棟、土坑35基（うち性格不明のものが32基）、溝状遺構1条があり、中世では、掘立柱建物跡4棟がある。

ここでは、主に古代の遺構・遺物を中心に述べて、まとめにかえたい。古代の遺構としては、掘立柱建物跡、土坑、溝状遺構などがある。35基の土坑のうち、SK1及びSK2については、両者とも同規模、同形態であり、またSK1において木棺の痕跡が確認されたことから、両者とも木棺を納めたものと考えられる。一方「北調査区」で確認したSK3についても、埋土に炭化物片が混入していたことから、これらも棺材の痕跡であると推定され、この土坑にも木棺が納められていたと考えられる。なお、これらの墓壙と考えられる土坑の時期であるが、SK1とSK3の埋土中の遺物をみれば、掘立柱建物跡や溝状遺構の年代よりも若干遡り、飛鳥～白鳳期の7世紀代と比定される。なお墓壙と考えられる3基以外の土坑については性格不明で、埋土中からほとんど遺物が出土しておらず時期の確定もできない。一部建物跡（SB1）と切り合い関係にある土坑があり、後者の方が新しい。

さて掘立柱建物跡については、柱穴と考えられるピット内から、時期を明確にできる遺物の出土はほとんどないため時期の比定はむつかしいが、2～3の事例によれば、概ね8世紀中頃から9世紀代に比定されるものであり、その外の建物跡の年代もそれらを前後する時期に属すると推定される。この年代比定は包含層から出土した遺物の年代と矛盾はほとんどないが、包含層出土遺物の中には、時期の下るものも少なくなく、建物は12世紀代まで存続していた可能性がある。

SB1以外は、ほぼ調査区のほぼ中央北寄り、西側に集中して検出されたが、SB3とSB4、SB5とSB6、SB7とSB8は、それぞれ重複しており、少なくとも2時期に分けられる。また、建物の軸方向からいえば、SB2とSB3、SB4とSB5、SB6とSB7の、それぞれ2棟の建物は、何らかの関連が指摘でき、それぞれは同一時期に構築されたと推定できる。このことからいえば、さらに3～4時期の時間差を指摘することができよう。ただ、各建物跡の柱穴内から出土した土器は少なく、かつ細片が殆どのため、建物群として同一時期にどれほどの建物が立っていたことについては、不明と言わざるをえない。ところで、これらの建物は、SB1が2間（約4m）×3間（約4.8m）であるほかは、1間×2間が3棟（SB2；約3m×約4.8m、SB4；約2.8m×約4.4m、SB5；約2.1m×約4.4m）、1間×1間が4棟（SB3；約2.9m×約3.1m、SB6；約2.5m×約2.5m、SB7；約3m×約2.4m、SB8；約2.5m×2.1m）であり、規模的にはあまり大きいものはない。そのことはSB2とSB3の柱穴が直径約70～80cmとやや規模が大きいのであるが、その他のほとんどの建物跡の柱穴が50～60cmであることから指摘できる。

溝状遺構については、埋土中からの出土遺物を見れば、概ね掘立柱建物跡の推定年代と大きな隔たりはなく、8世紀中頃から9世紀代に比定されるものが中心となるが、10世紀～12世紀代の遺物も含まれている。また、埋土上面および遺構検出面から出土した遺物の年代が、13世紀後半から14世紀代のものがあることから、少なくとも平安時代の終わり頃までは使用されていたが、恐らく14世紀頃には埋められ、整地されていることが考えられる。

さて、本遺跡の古代遺構面の性格であるが、若干時期が遡る墓壙と考えられる土坑についてはさておき、掘立柱建物跡や溝状遺構から考えてみたい。先述したとおり、遺構的にみて、それほど大きな建物が建てられていたとは考えられない。建物の規模からすれば、SB1以外は住居とするよりも倉庫と考えた方が都合がよいかもしれない。また、数多く建てられていたとは考えられず、調査結果から、1時期にせいぜい2棟、最大でも3～4棟と推定される。ただ、地形的にいえば、遺跡の範囲が広範囲に広がる可能性もあることから、今回のようなある程度まとまった群が何箇所か存在していた可能性もあろう。

溝状遺構は、立地的にみて、上記建物跡とはほとんど関連がない。そのため、何らかの目的をもって掘られたものと考えられるが、現段階ではこの溝状遺構の性格は不明である。しかしながら、溝の東側掘り方は不揃いであるが、西掘り方はほぼ直線的になっており、このラインは地形の等高線にほぼ平行する。区画を目的としているとも考えられるが、道路（官道？）の側溝の可能性も含めて、今後の周辺の調査に期待したい。

次に、包含層出土の遺物を含めて、遺物の面から探してみたい。

上記の掘立柱建物跡にはほとんど伴っていないが、SB1周囲の10m四方を中心として包含層中から多数の遺物が出土している。建物跡と併行する時期と考えられる遺物には、大量の土師器・須恵器に混じって、わずかであるが、畿内系（産）土師器、緑釉陶器、瓦類、硯などが存在している。また、包含層や柱穴埋土中からは鉄滓も数点出土しており、調査区周辺において鍛冶遺構などの施設の存在が推定される¹⁾。

土師器や須恵器は、前者は煮沸具である甕の、また須恵器は杯類などの食膳具の出土が多い傾向にあり、また土錘の出土があることから、確実に生活遺構と考えられる遺構の確認はできていないが、ここで生活が営まれていたと推定でき、それでは、本遺跡は一般的な集落と考えることもできる。

しかしながら、畿内系（産）土師器、緑釉陶器、瓦類、硯などが存在していることはどういう意味があるのであろうか。

畿内系（産）土師器については、畿内では律令国家をささえた官人層の特殊な生活形態に対応するため生産されたものと考えられている²⁾。地方においてはひろく官衙跡や寺院跡のほか、集落跡、古墳からの出土があるが、その存在は都城における官人とのつながりを示すものと考えられる。地方において出土する意義について、その土器そのものの本来の用途としてではなく、律令国家の制度や理念を象徴的に体現した存在として、律令国家の情動的側面の重要性を付加する考え方もあるが³⁾、いずれにせよ何らかの目的をもったひとの往来や物資の運搬があったことを端的に示すものといえよう。また硯については古江西第1号貝塚のように貝塚の出土事例があるが⁴⁾、硯の出土は識字層の存在を示すものといえよう。

緑釉陶器については、これについても城山北貝塚⁵⁾のように貝塚からの出土例はあるが、金属器や輸入陶磁器を頂点とする古代の食膳具様式における階層性の具体的序列において、それらに次いだ位置を与えられていたと考えられており⁶⁾、また、さらにはそれに次ぎ、土師器・須恵器よりも上位の黑色土器も存在している。これらのことから、身分によって使い分けがなされていたことを前提にすれば、緑釉陶器を含めてその使用者の性格を位置づけることができよう。緑釉陶器は、都城及びその近郊の状況では時間の推移とともに中・下級官人層まで普及したと考えられるが、いづれにしてもこれらの使用者層は一部に限定されるものであろう。

一方、丸については、該当期の一般集落からはあまり出土しないものであり、事例は寺院跡か官衙遺跡にほぼ限定されるであろう。しかし寺院跡と比定するには、瓦の出土量は少なく、また礎石の確認もできていない。重圈文軒瓦が寺院跡から出土する例は多くないことも指摘されている。否定する根拠もないが、現状では寺院跡とみなすことは困難ではないかと考えられる。なお重圈文軒丸瓦については、高橋美久二氏によれば、国内において国府・国分寺・国分尼寺・駅家など統一して用いられているとし、同一文様の丸が国内に広く分布するとされている⁷⁾。こうした考えを敷えんすれば、安芸国では、安芸国分寺や駅家と推定される下岡田遺跡、中垣内遺跡は、共通して重圈文であり、これらの官衙推定遺跡と共通している。

以上のことから、いずれにしても即断は避けるべきであろうが、本遺跡を一般的な集落跡と推定することは困難ではないだろうか。極端なことをいえば、出土遺物をみるかぎりでは、官衙遺跡の出土遺物と共通する点もあり⁸⁾、本遺跡を何らかの官衙的な性格をもった遺跡であると推定することができよう。しかしながら、今回検出した遺構と過去の官衙遺跡と推定される調査事例とを比較検討した場合⁹⁾、今回の調

査が遺跡の範囲の一部を確認したのみであるとしても、遺構の面から言えば、現時点では課題を残している。

ところで、鉄滓が出土し、鍛冶遺構などの施設の存在が想定できることから、本遺跡の性格として、やはり、一般的集落跡と捉えるよりは、むしろ佐伯郡衙の推定地とされる利松地区から約1.5kmとあまり離れていないことと、また旧山陽道が西方約300mの位置に通っているという立地の好条件などから、官衙的性格を持つ遺跡か、もしくはこれらの遺跡となんらかの関連をもった遺跡と推定しておきたい。

注

1. 鉄滓の形態は椀形を呈しており、いわゆる椀形滓で、鍛冶滓と考えられる。このことから、鍛冶遺構の施設の存在を想定した。
この鉄滓の観察については、広島大学文学部考古学研究室古瀬清秀先生にご教示いただいた。
2. 林部 均 1992「律令国家と畿内産土師器―飛鳥・奈良時代の東日本と西日本―」『考古学雑誌』第77巻第4号日本考古學會
1992「西日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」『考古学研究』第39巻第3号考古学研究会
3. 注2前掲文献
4. 三枝健二 1983『古江西第1号貝塚発掘調査報告広島市西区古江西町884番地所在遺跡の調査』財団法人広島県埋蔵文化財調査センター
5. 川越哲志・河瀬正利 1976『広島県安芸郡府中町城山北貝塚』府中町教育委員会
6. 伊野近富 1989「原型・模倣型による平安京以後の土器様相」『中近世土器の基礎研究』Ⅴ日本中世土器研究会
7. 高橋美久二 1982「古代の山陽道」『考古学論考』平凡社
8. 山本思尚 1983「地方官簡の遺跡」『日本歴史考古学を学ぶ』（上）有斐閣
9. 駅家跡と推定されている、市域内の中垣内遺跡や安芸郡府中町下岡田遺跡の事例をみれば、確認された建物跡の規模や構成など、大きな差異がみられる。

版 図

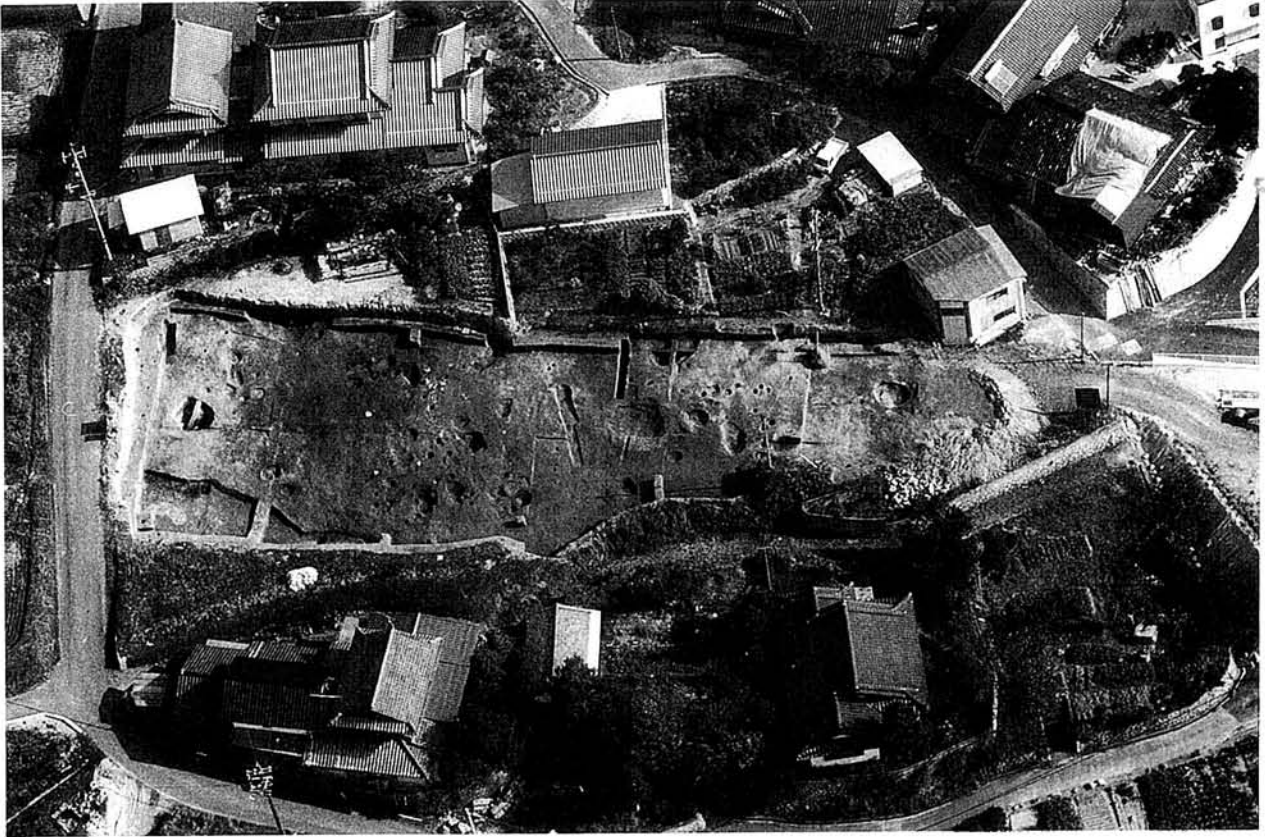




a 下沖 2 号遺跡近景（北西から）



b 下沖 2 号遺跡航空写真（調査前）



a 下沖 2 号遺跡航空写真（「南調査区」古代遺構面；調査後）



b 下沖 2 号遺跡航空写真（「北調査区」古代遺構面；調査後）

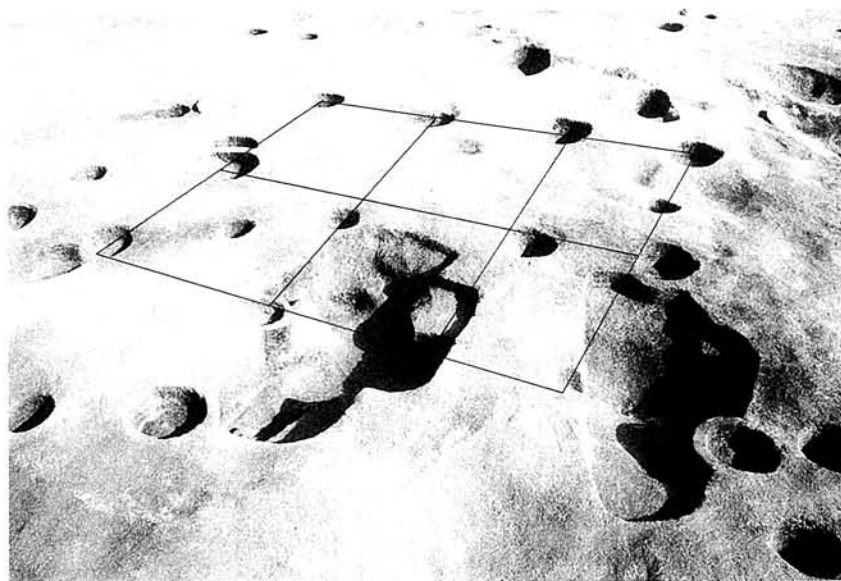


a 「南調査区」 古代遺構面調査後（北東から）

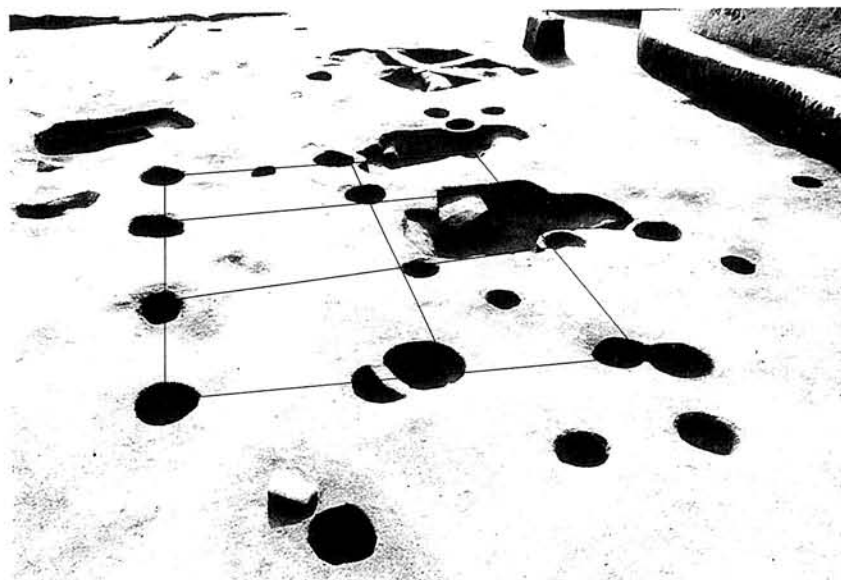


b 「北調査区」 古代遺構面（一部）調査後（東から）

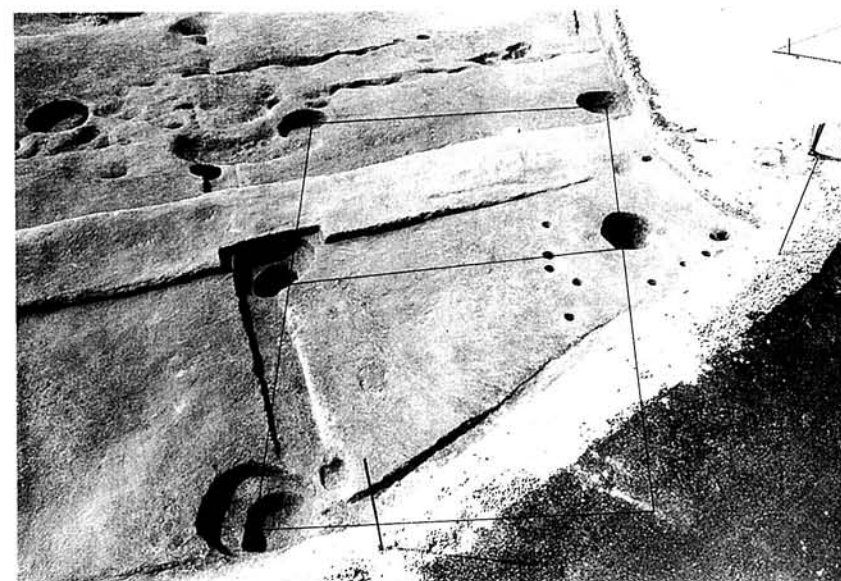
a SBI 検出状況 (西から)

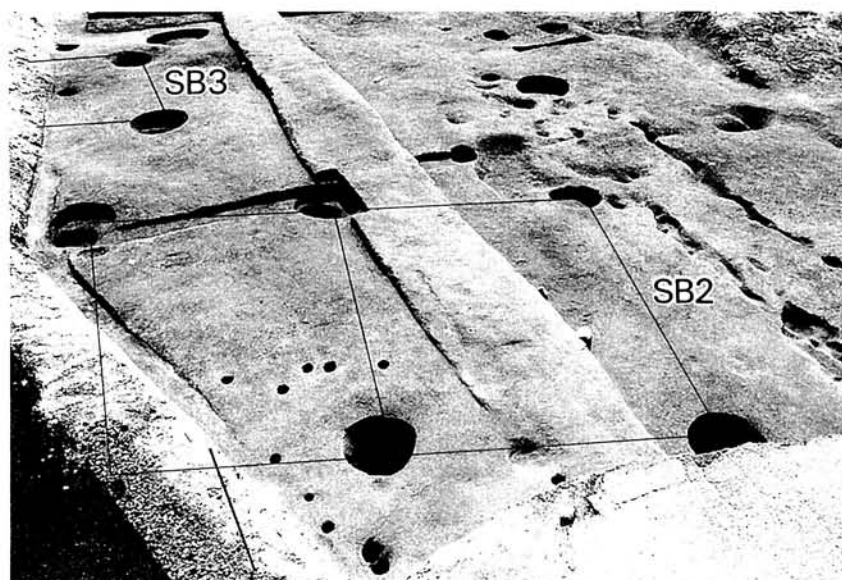


b SBI 検出状況 (北から)

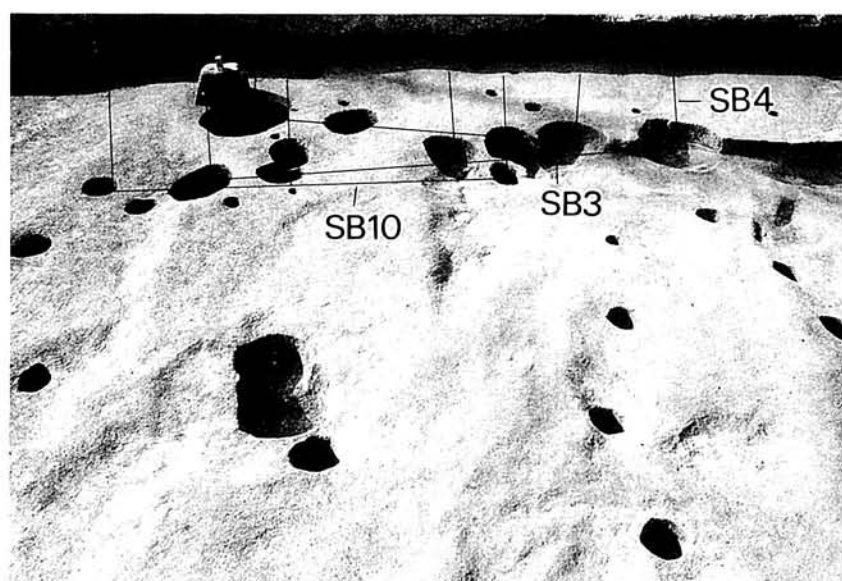


c SB2 検出状況 (北西から)

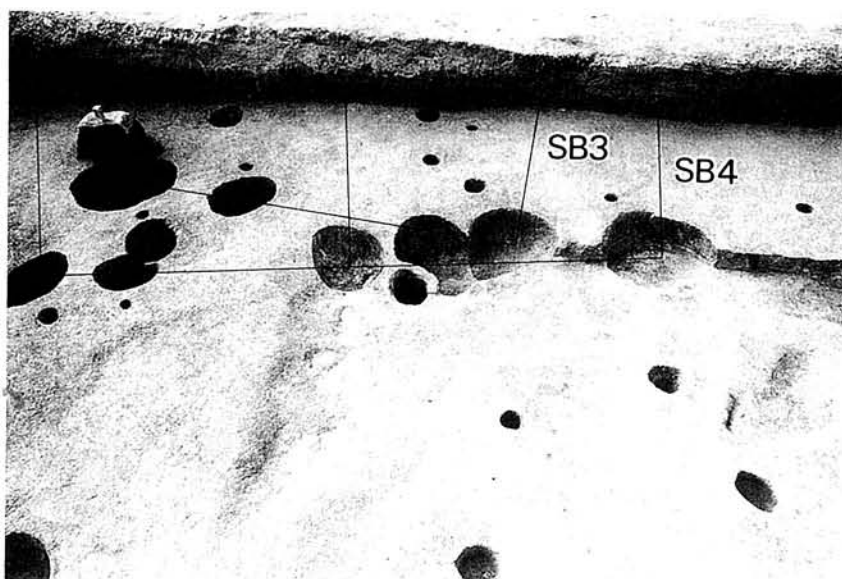




a SB2・SB3検出状況
(北西から)

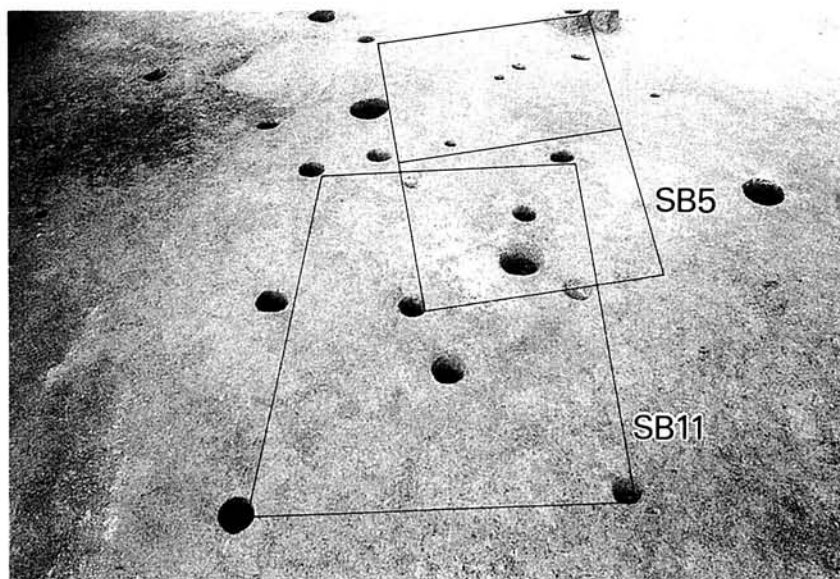


b SB3・SB4・SB10検出
状況(北から)

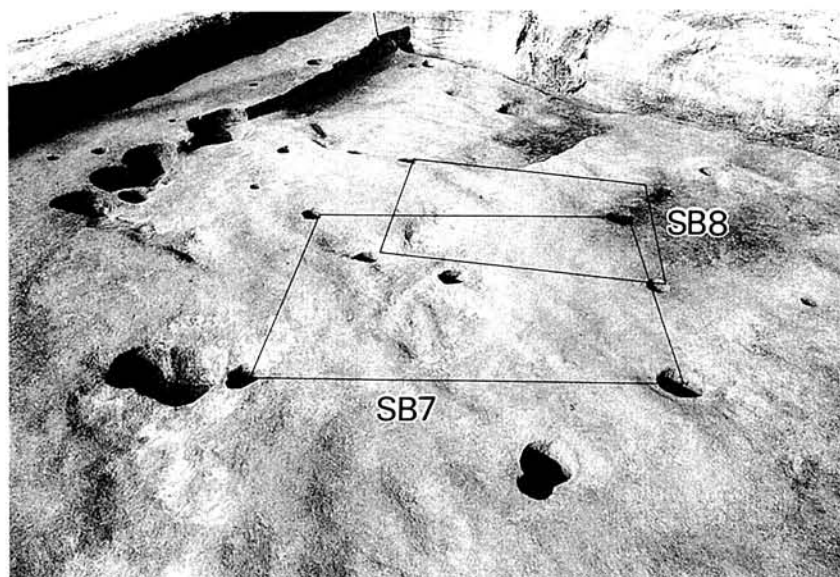


c SB3・SB4検出状況
(北から)

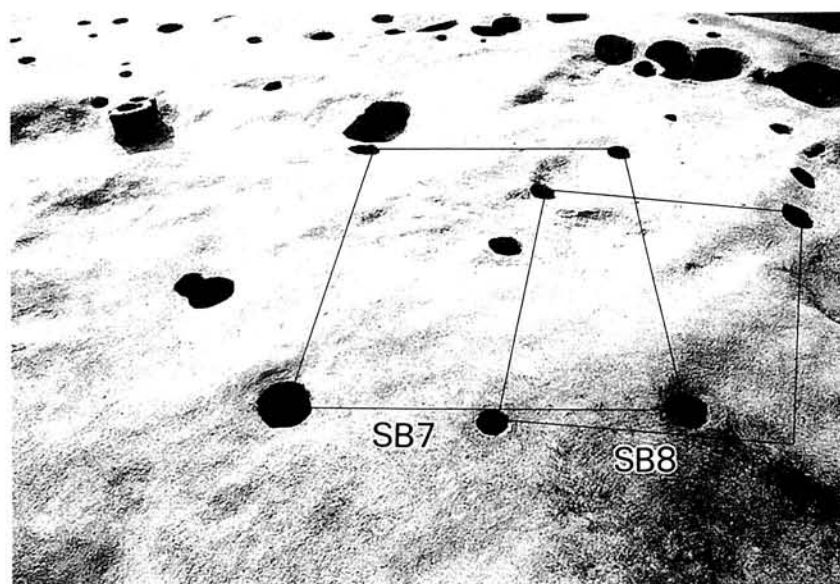
a SB 5・SB11検出状況
(東から)

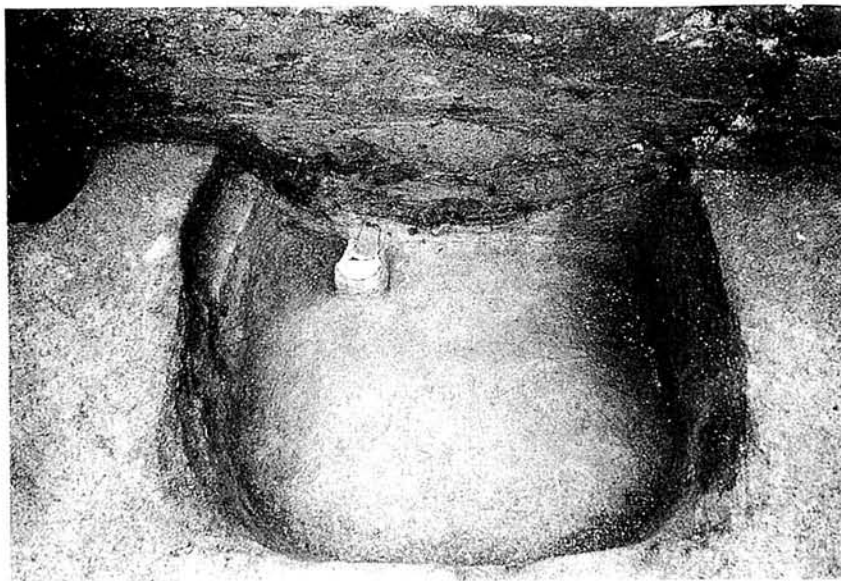


b SB 7・SB 8 検出状況
(東から)



c SB 7・SB 8 検出状況
(北から)





a SK 1 検出状況 (東から)



b SK 2 検出状況 (東から)



c SK 3 検出状況 (北から)

a SK 5 検出状況 (東から)



b SK 6 検出状況 (東から)



c SK 7 検出状況 (北から)





a S D I 検出状況
(北から)



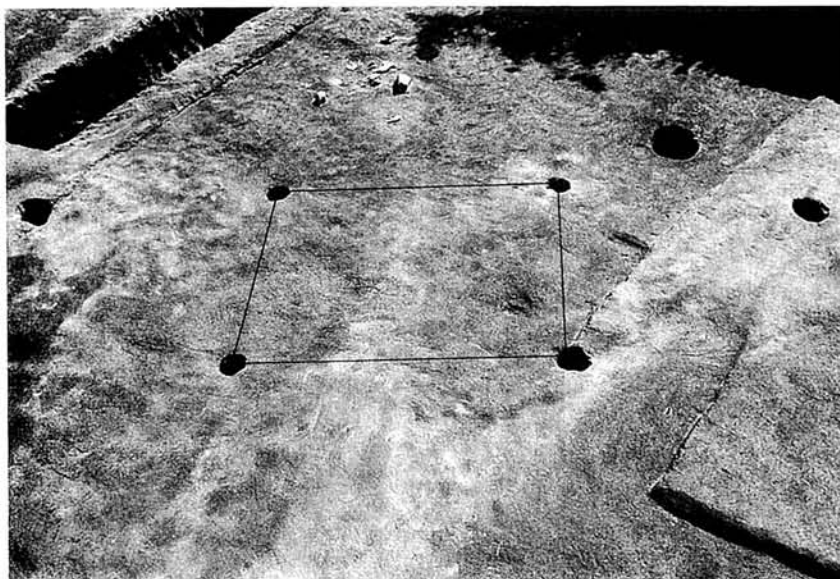
b S D I 検出状況
(北から)



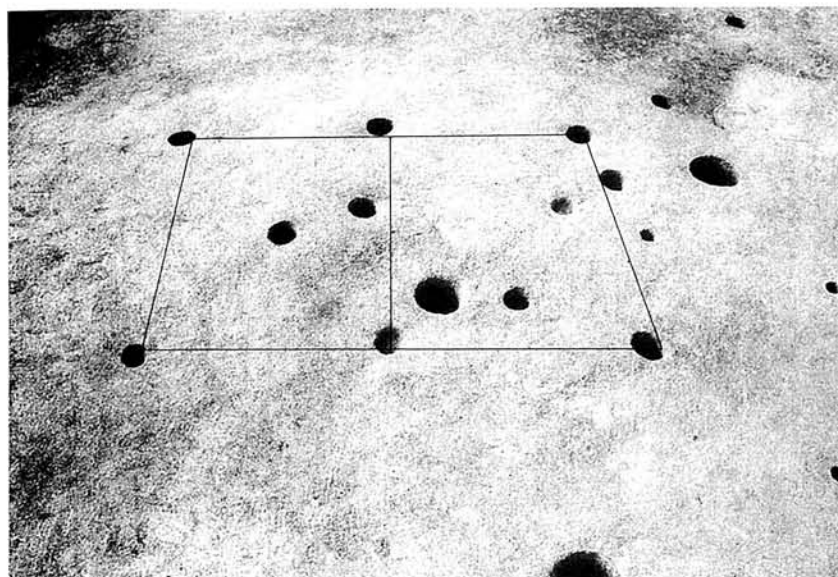
a 「南調査区」中世遺構面調査後（北東から）



b 「北調査区」包含層遺物出土状況（東から）



a SB 9 検出状況 (西から)



b SB11 検出状況 (北から)

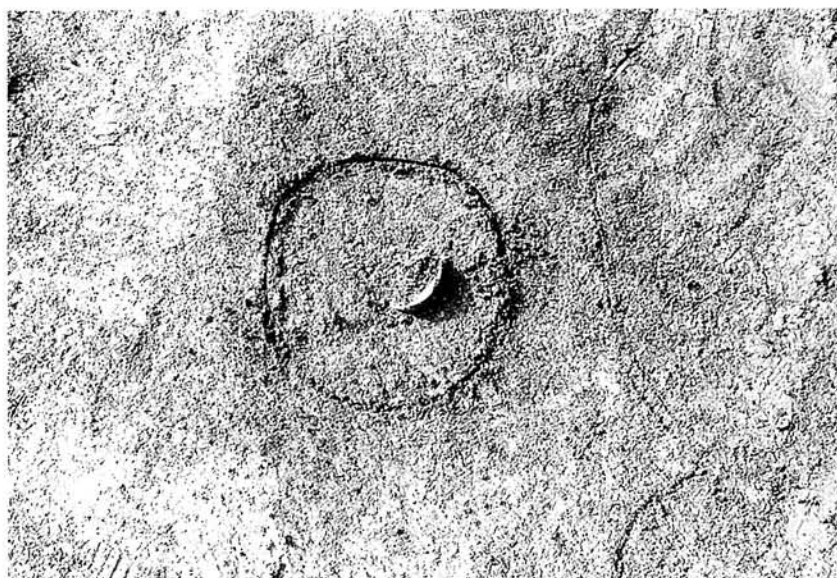


c 自然流路検出状況 (北から)

a 「南調査区」包含層遺物出土
状況（東から）

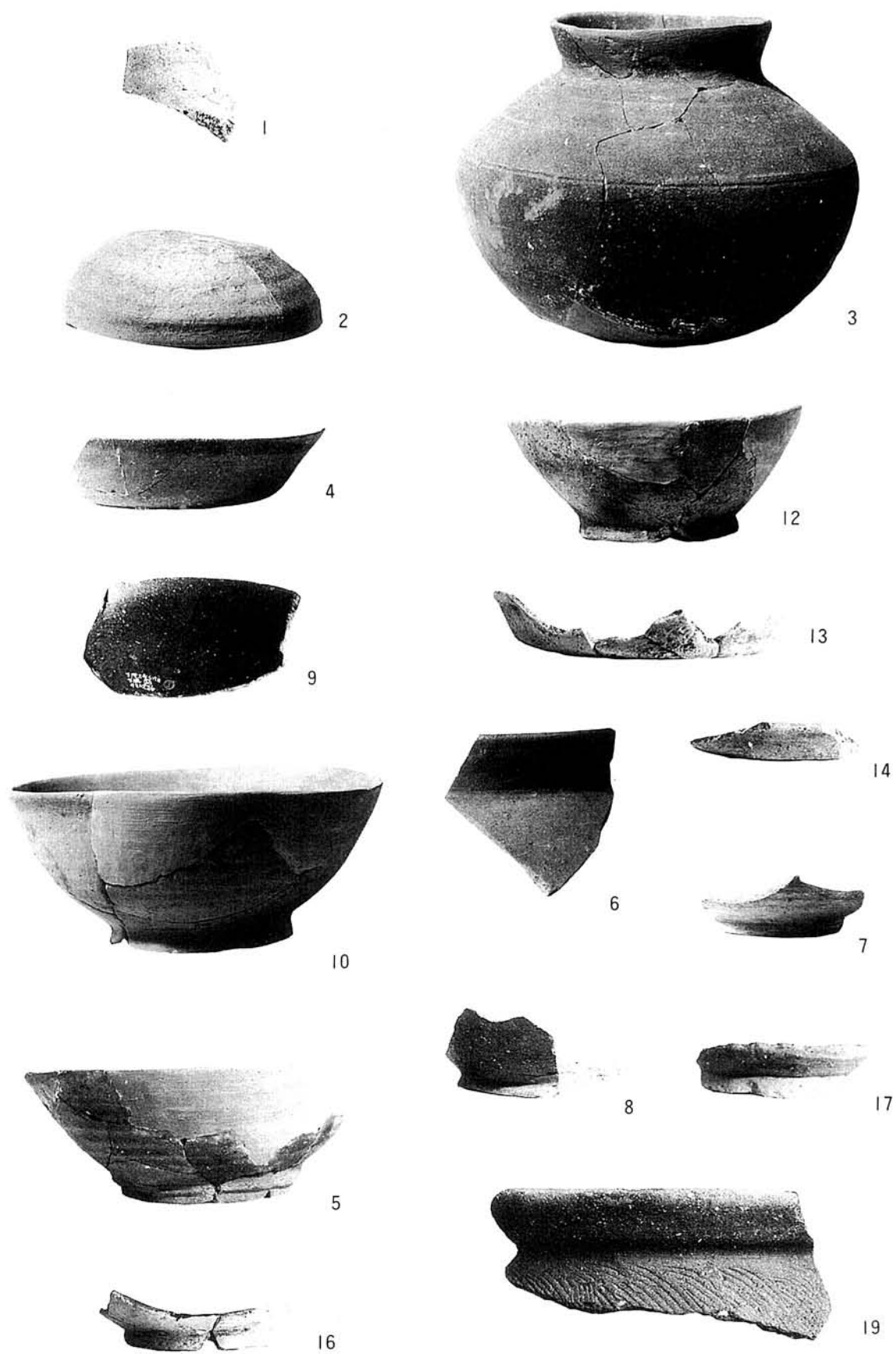


b 柱穴〔SB10/P3〕遺物
出土状況（北から）



c S D I 埋土中遺物出土状況
（北から）





出土遺物 (1)



21



20



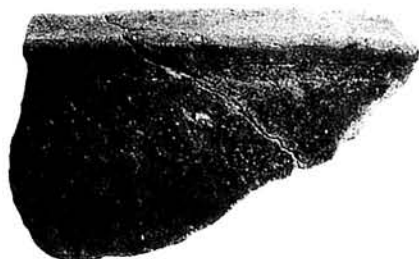
24



22



23



25



27



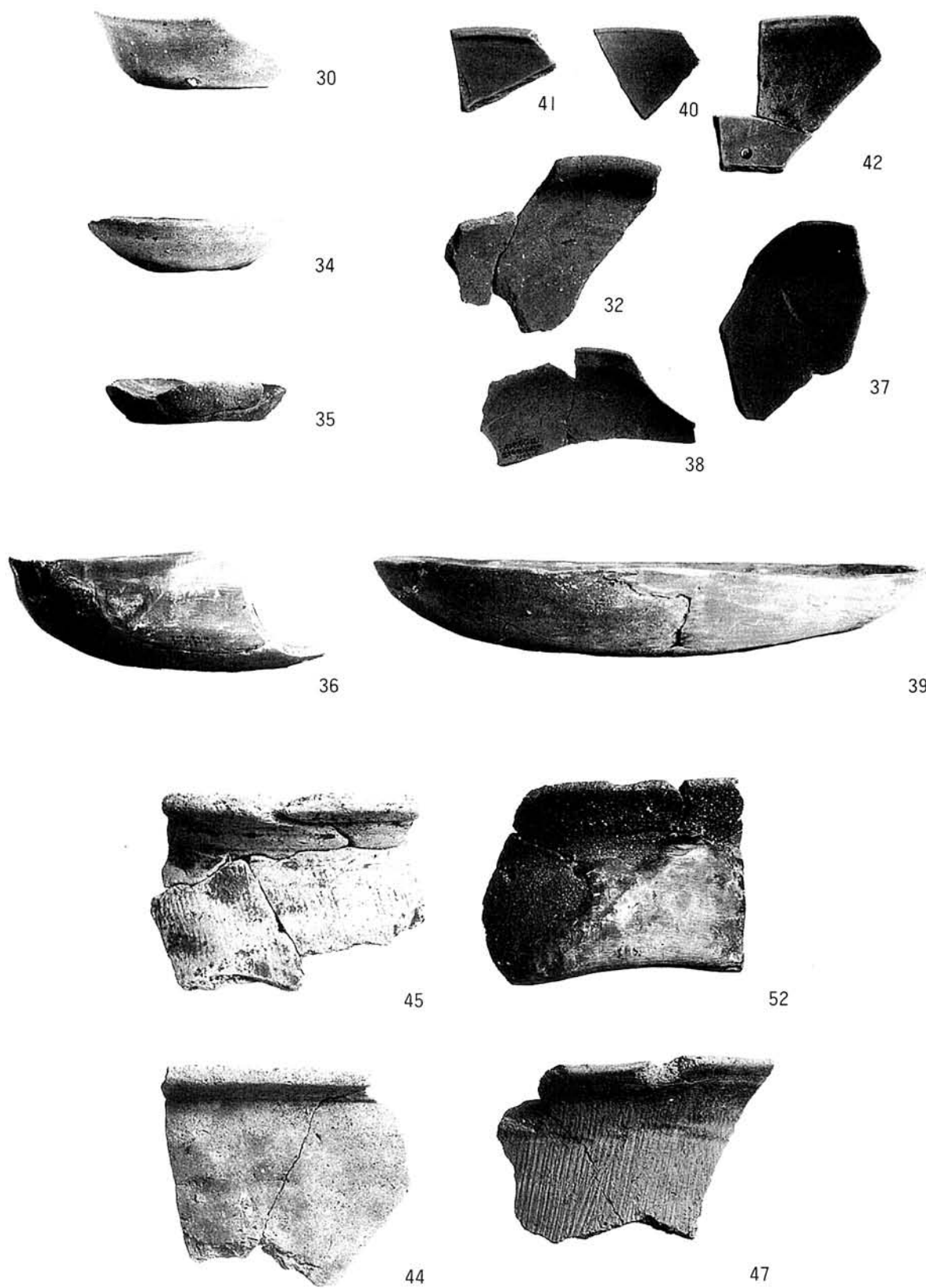
26



29

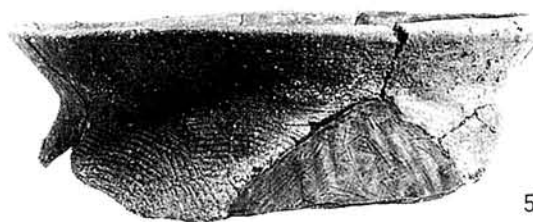


28





43



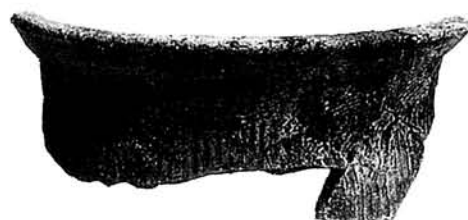
53



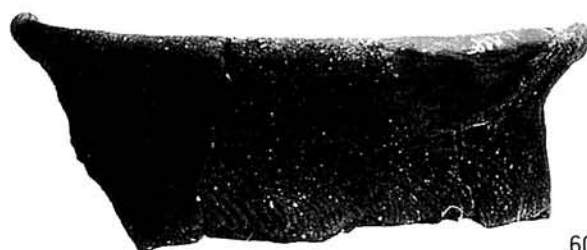
54



57



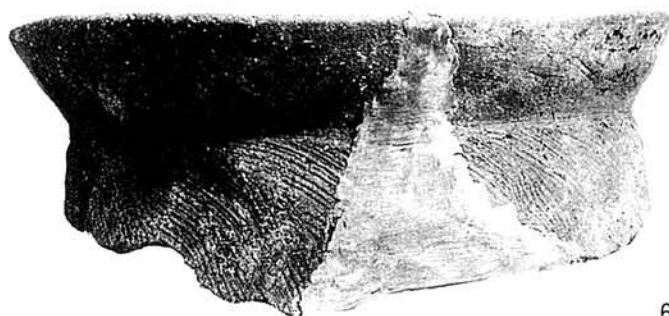
56



60



66

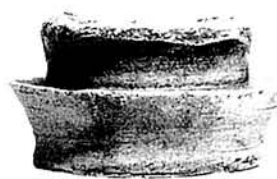


63

出土遺物 (4)



64



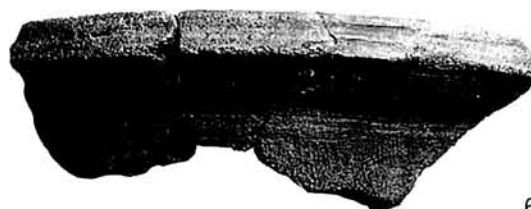
68



75



71



69



72

出土遺物 (5)



80



81



82



83



84



87



88



89



90



91



92



93



95



96



98



99



100



101



102



103



104



105



106



107



109



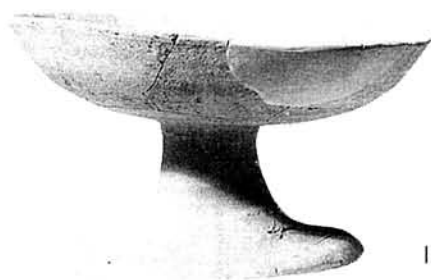
108



111



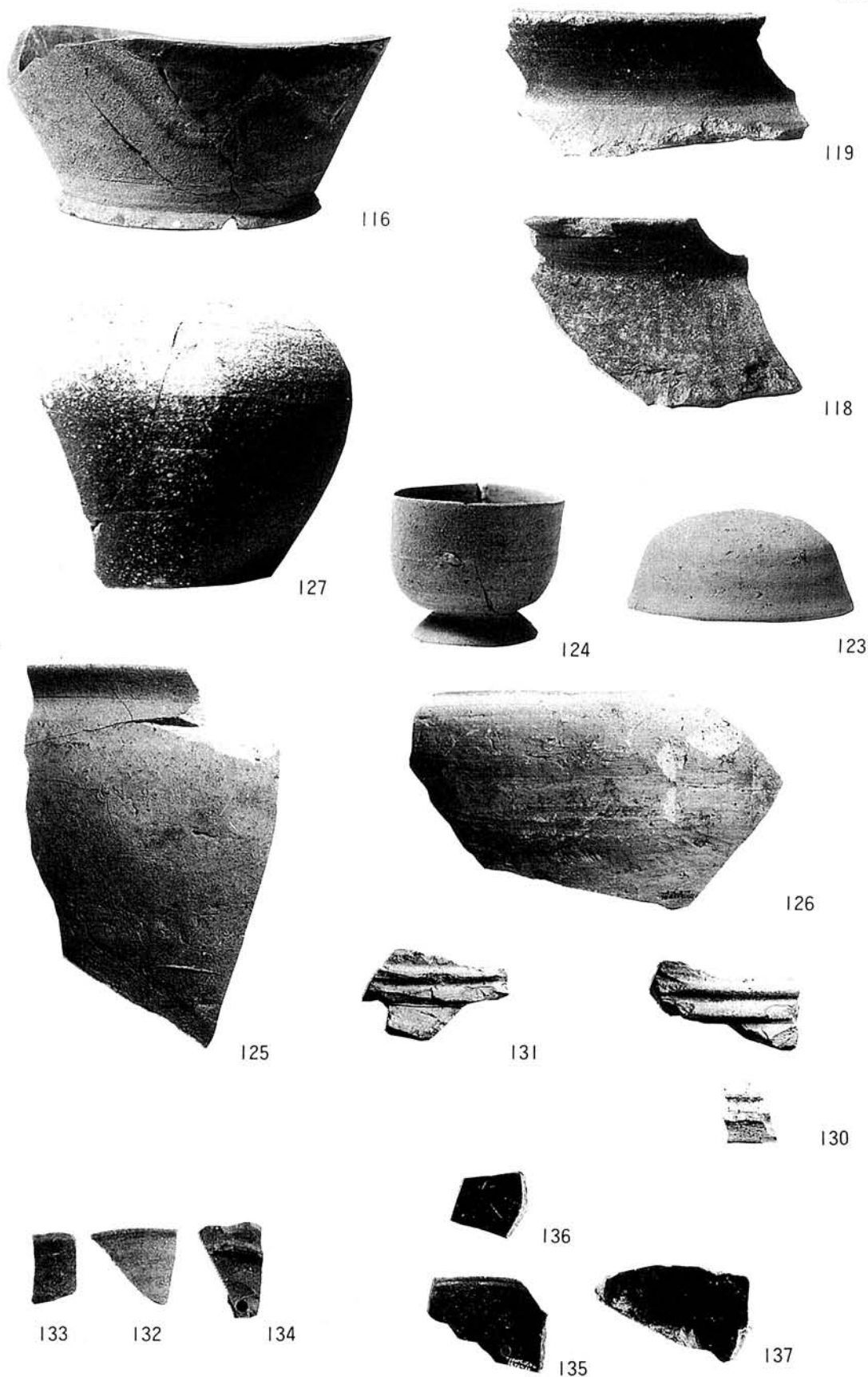
112



110



115



出土遺物 (8)



145



146



138



147



150



149



158



160



152



151



161



159



153



154



162



155



163



157



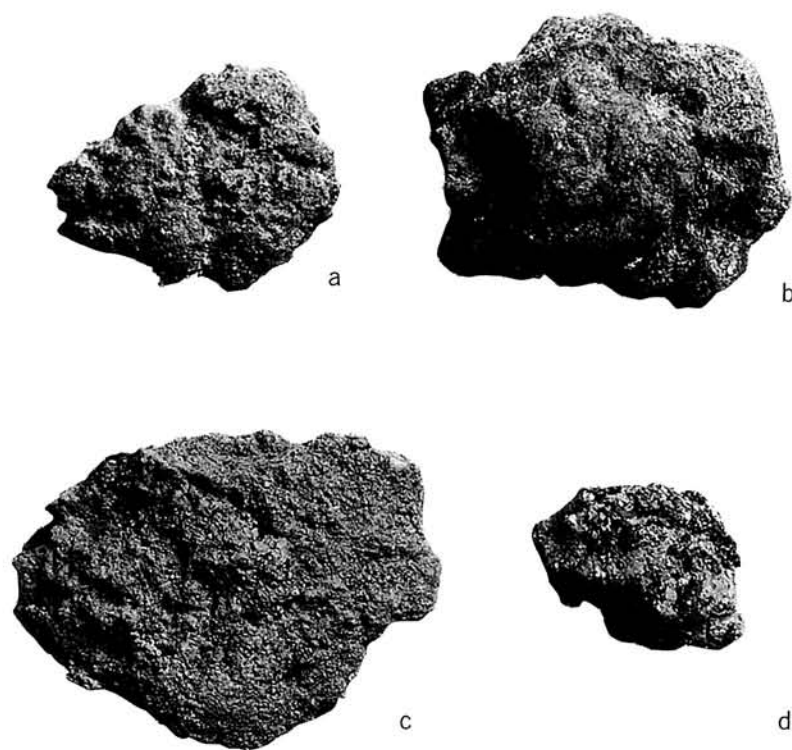
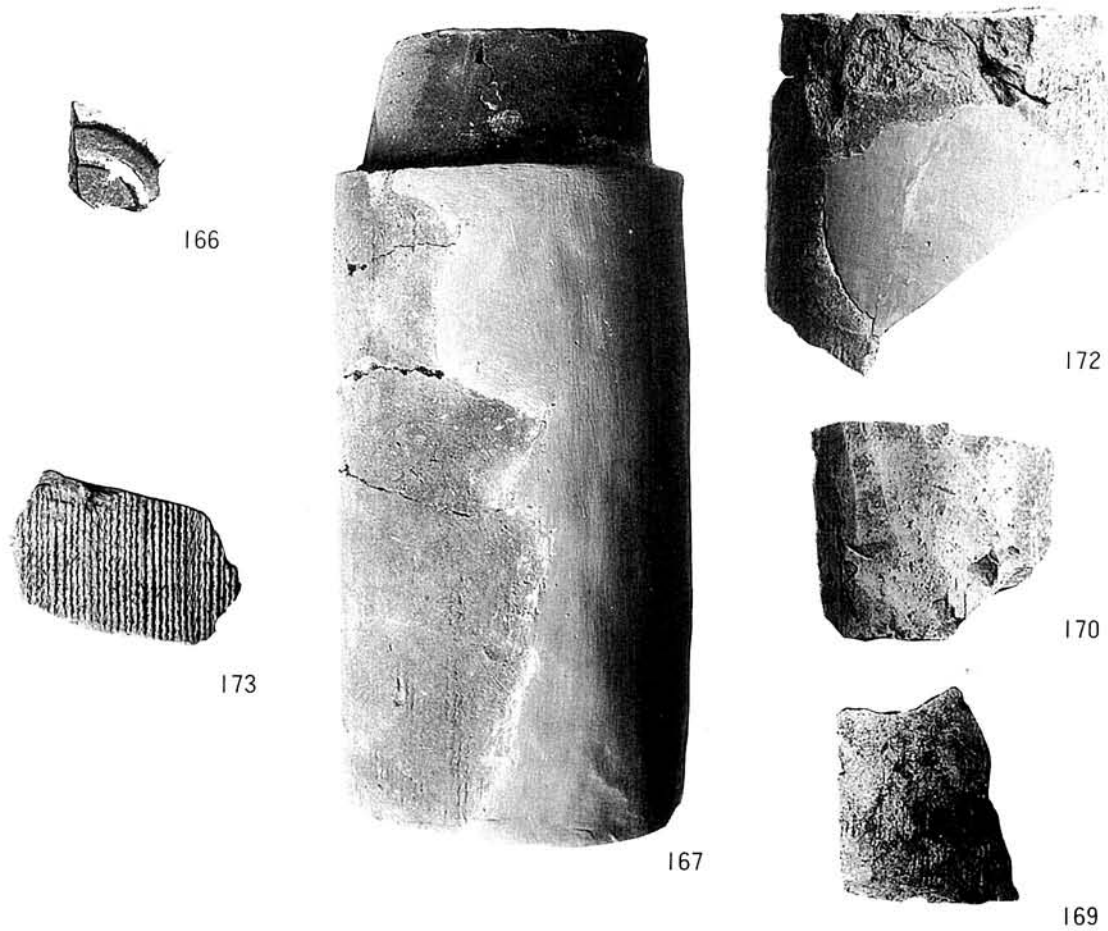
156



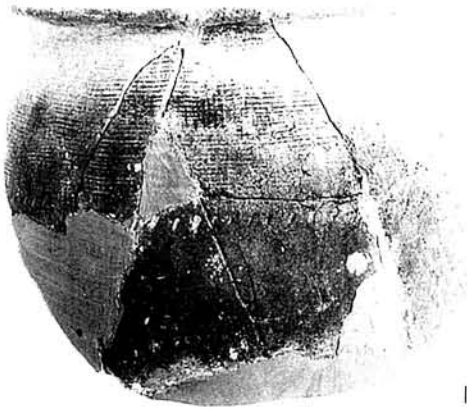
164



165



出土遺物 (10) ※ a～d：鉄滓



196



197



198



199



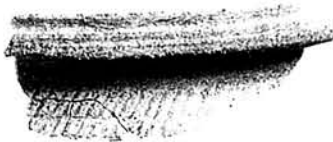
203



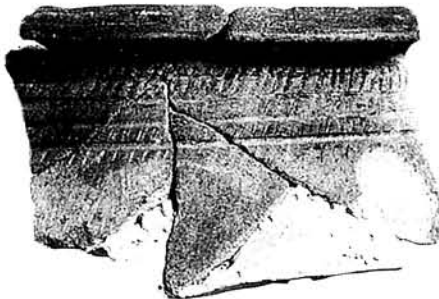
200



201



204



205



202



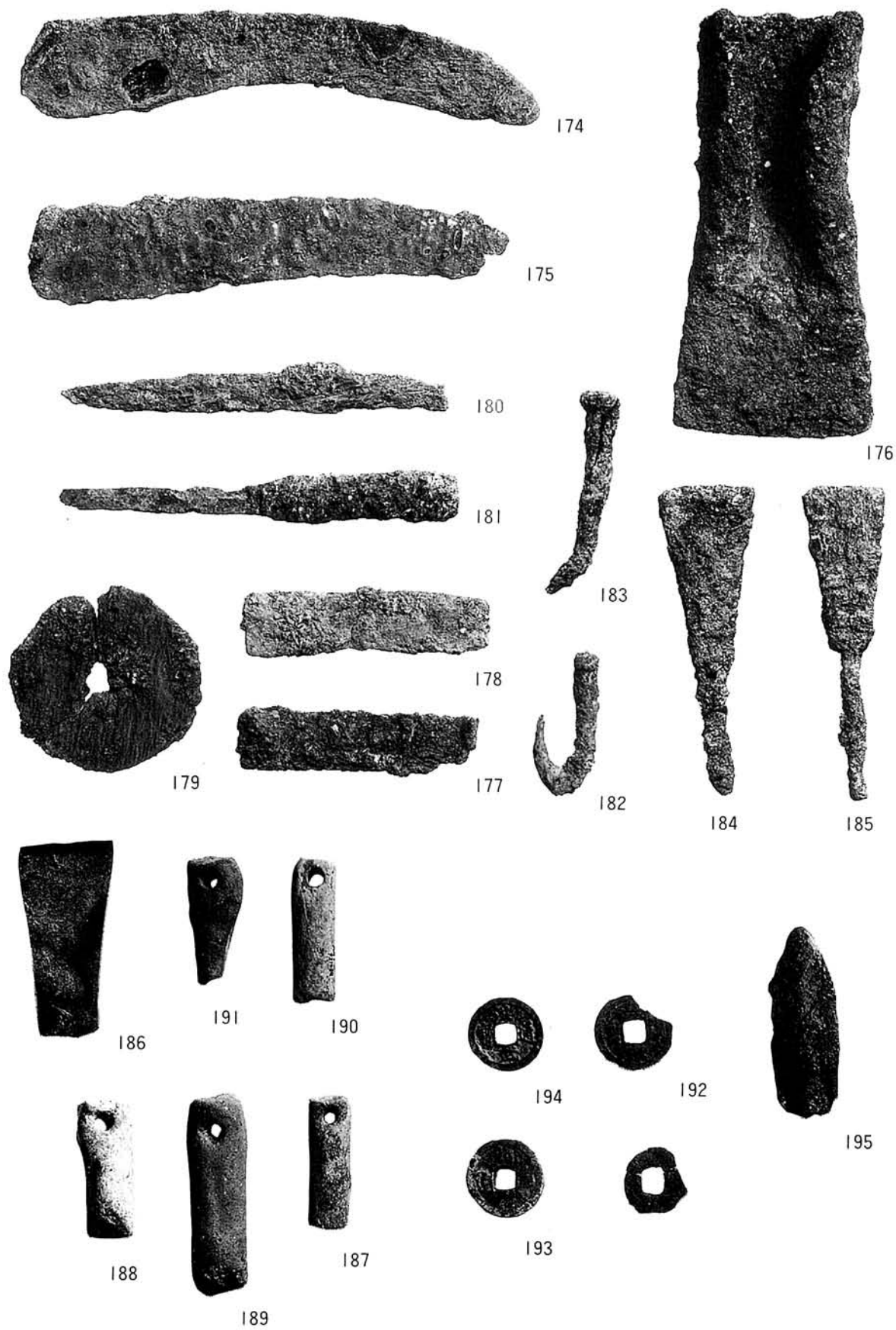
206



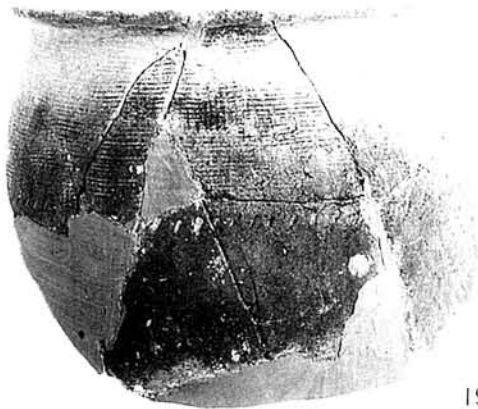
207



208



出土遺物 (11)



196



197



198



199



203



200



201



204



205



202



206



207



208

(財)広島市歴史科学教育事業団調査報告書 第11集

広島市佐伯区五日市町所在

下沖 2 号遺跡発掘調査報告

1994年3月

編集 財団法人 広島市歴史科学教育事業団
発行

広島市中区国泰寺町一丁目 4 番15号

TEL (082) 248-0427

印刷 株式会社 中 本 本 店

広島市中区東白島町13-15